

# 第1篇 茨城大学の創立と発展

## 第1章 創立の経緯

昭和20年(1945)8月、終戦とともに連合軍司令部にもうけられた民間情報教育部が、わが国の教育革新についてのねらいは、教育行政の民主化と、教育の機会均等をめざす学制改革とであった。前者は、中央集権的な国家主義・画一主義をやぶって地方分権的な民意尊重、すなわち教育委員会制度となり、後者は、いわゆる複線型から単線型の教育系統、すなわち6・3制となった。

「教育基本法」(昭22・3)は、いわゆる戦後における新教育の指針である。茨城県では知事(友末洋治)直属の文教審議室(昭22・10)がおかれ、10余の各種専門委員会がもうけられたが、そのなかに「文教振興委員会」「新制大学設立専門委員会」があった。

これよりさき、水戸高等学校は戦災をうけ、昭和21年5月から友部旧海軍航空隊跡(西茨城郡実戸町)を仮校舎としていたが、はやくも「復興課」(教授小川泰・同沼尻源一郎)がおかれていた。すみやかに水戸へ帰り、大学昇格をめざし、東京大学と合体しようという意見もあった。やがて「水戸大学期成会」をつくったが、これには阿久井宇平・風戸元愛・亀山甚・後藤武男・竹内勇之助・宮崎慶一郎・渡辺覚三らの諸氏も参加した。そして友末知事を会長にしようとする動きもあったが、一転して水高と多賀工専をうって一丸とし大学に推進することとなり、本会は前記「文教振興委員会」に発展的解消した。「多賀工専昇格期成同盟会」とおなじ方向をたどったわけである。

「大学行政官協議会」(昭23・2~3)は、レーモンド・ウォルターら外人講師団を中心とし、上野の東京美術学校(現芸術大学)において開かれた。本学からは大学管理について都崎多賀工専校長、学生指導について沼尻水高教授、経

理について荒木会計課長がそれぞれ参加し、各2週間づつの講習をうけた。

こうして、茨城県における新制大学設置の機運はようやく熟してきたが、これが統一的総合的に活動できるようになったのは、前記新制大学設立委員会の答申（昭 23・5・15）にもとづき、友末知事を会長とする「茨城大学設立期成会」（昭 23・5・28）が結成されてからである。副会長は菊田県会議長・高島秀吉・亀山甚の3氏であった。

設立期成会は「茨城県に総合大学を設立するを以て目的とし、事務所を茨城県庁内におく」（会則第1条）もので、「大学設立の宣伝・資金の募集・関係方面との交渉」（同第3条）などをその事業とした。「事務局設置規程」（昭 23・7・22）のもと、事務局長には菅沢肇が就任した。執行機関として「茨城大学設立実務本部」（昭 23・10・7）をもうけ、本部長（知事）以下の役職員を委嘱した。建設資金造成の日標を2億円（3カ年計画）とし、国費3千万円、県費1億円、市町村及び地元寄付（分担）4千万円、県内外有志4千万円、宝くじその他雑収入2千万円を予定した。

「茨城大学設置認可申請書」（昭 23・7）を関水高・都崎多賀工専・片岸茨師・浜口茨青師4校長の連名で、森戸文相に提出したのは、ほぼ期成会の結成とときを同じくしていた。新制茨城大学の構想は、この申請書でわかる通り、はじめは旧制水戸高等学校・茨城師範学校・同青年師範学校・多賀工業専門学校の4つを母体として、学芸・工の2学部をつくり、学芸学部は水高の母体で文科・社会科・理科、茨師・茨青師の母体で小学・中学・職業の3教育科、工学部は多賀工専の母体で機械・原動・電気・金属の4工学科とする予定であった。この申請書作成のためには、いろいろ苦心が多かった。昭和 23 年9月～12月にわたり、太田の西山教育研究所、水戸の教育会館、多賀工専の寄宿舎などを随時利用し、合宿して検討協議をかさねたものである。申請書の内容は、茨城大学創立の経緯をかたる、もっとも基本的・歴史的な資料であるから、つぎにその大要を摘記しておく。はじめに

#### 大学設置認可申請書

此の度学校教育法第4条によって茨城大学を設置致し度いと思ますから御

認可下さるよう別紙書類を添えて申請いたします

昭和 23 年 7 月

水戸高等学校長 関 泰 祐

多賀工業専門学校長 都 崎 雅 之 助

茨城師範学校長 片 岸 初 見

茨城青年師範学校長 浜 口 徳 治

文 部 大 臣 森 戸 辰 男 殿

とあり、つぎに

### 書 類 目 次

1. 茨城大学設置要項
2. 学 則 要 項
3. 校地（図面添付）
4. 校舎等建物（図面添付）
5. 図書標本機械器具等施設
6. 学部別学科日又は講座
7. 履習方法及び学位授与
8. 学部及び学科別学生収容定員
9. 職 員 組 織
10. 設置者に関する調
11. 資 産
12. 維持経営の方法
13. 現在経営している学校の現況
14. 将来計画の概要

をかかげる。以上 14 項のうち、もっとも中心になるのは、はじめの「茨城大学設置要項」であるから、つぎにこれを記しておく。

### 第 1 茨城大学設置要項

#### 1. 目的および使命

茨城県に於ける最高の教育機関、学術文化の研究機関として平和的な文化国家の健全なる形成者を育成すると共に学術文化の理論と応用とを研究し、地方文化の高揚を図り以て世界文化の進展に寄与することを目的とする。

2. 名称 茨 城 大 学 水戸市
3. 位置 大 学 本 部
- 学 芸 学 部（文科，社会科，理科） 水戸市

同	(第1小学教育科, 第2小学教育科, 第1中学教育科, 第2中学教育科)	土浦市
同	(職業教育科)	友部町 (友部)
工学部	(機械工学科, 原動工学科, 電気工学科, 金属工学科)	多賀町

4. 校地 総坪数 445,234 坪  
内 訳

水戸市水戸高等学校敷地	26,000 坪
水戸市外渡里村旧陸軍用地	35,000 坪
土浦市外阿見町茨城師範学校敷地	103,509 坪
水戸市茨城師範付属中小学校敷地	31,655 坪
友部旧海軍用地	78,340 坪
筑波郡古沼村	122,730 坪
多賀町多賀工業専門学校敷地	48,000 坪

5. 校舎等建物総坪数 29,700 坪 (新設予定坪数を含む)

内 訳

学 部		既 設	新 設	計
学芸学部	水 戸	5,834 坪	3,197 坪	9,031 坪
	土 浦	8,266	1,730	9,996
	友 部	2,539	301	2,840
工 学 部		7,485	348	7,833
計		24,124	5,576	29,700

6. 図書, 標本, 機械器具等施設

種 目	学 芸 学 部				工学部	総 計
	水 戸	土 浦	友 部	計		
図 書	34,790冊	4,215冊	2,604冊	41,645冊	17,559冊	59,204冊
標 本	217点	40点	26点	283点	78点	361点
機械器具	797点	1,372点	624点	2,793点	9,773点	12,566点
用 器具	1,656点	5,571点	2,328点	9,555点	12,180点	21,755点

7. 学部及び学科の組織並びに付属施設

本学は大学本部, 学芸学部, 工学部及び付属施設を以て構成する。

1. 大学本部

学長の下に事務局を設け所管事項の処理に当らしめる。

本部には評議員会を置く。評議員会は各学部長, 分校主事及び各学部より選出された若干の教授より成り, 重要事項について学長の諮問に応ずる。

2. 各学部には学部長の下に所要の教職員を配属し教育，研究及び一般事務の処理に当らしめる。  
分校には主事を置き学部長の職務を代行せしめる。
3. 学部及び学科  
学芸学部及び工学部を置く。  
各学部の部科組織，設置場所等次の通り。

学 部	学 科	設置場所	構成の基礎
学芸学部	文 科 社 会 科 理 科	水 戸	水戸高等学校
	第1小学教育科 第2小学教育科 第1中学教育科 第2中学教育科	土 浦	茨城師範学校
	職 業 教 育 科	友 部	茨城青年師範学校
工 学 部	機 械 工 学 科 原 動 工 学 科 電 気 工 学 科 金 属 工 学 科	多 賀	多賀工業専門学校

#### 4. 付 属 施 設

- (1) 産業科学研究所                    工学部に新設する。  
教育研究所                        茨城師範学校教育研究所をあてる。  
工芸研究所                        学芸学部（土浦）に新設する。
- (2) 付 属 諸 学 校  
付 属 中 学 校 }  
付 属 小 学 校 }                    茨城師範附属・小学校（水戸市所在）をあてる。
- (3) 図 書 館                        学芸学部（水戸，土浦）及び工学部に新設する。
- (4) 付属実習農場及び演習林        茨城青年師範学校吉沼農場をあてる。
- (4) 寄 宿 舎                        現在各学校の所有する当該施設をあてる。

#### 8. 学部及び学科目又は講座概要

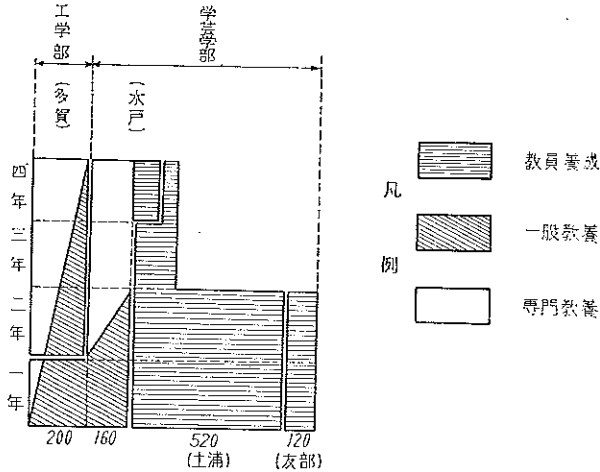
学 部	学 科	講 座 数	講 座 開 設 年 度				計	備 考
			第 1 年 度	第 2 年 度	第 3 年 度	第 4 年 度		
学芸学部	文 科	13	12	1	0	0	13	
	社 会 科	3	3	0	0	0	3	
	理 科	9	7	2	0	0	9	

学芸学部	第1小学教育科						
	第2小学教育科						
	第1中学教育科	26	24	2	0	0	26
	第2中学教育科						
	職業教育科	6	6	0	0	0	6
	計	57	52	5	0	0	57
工学部	機械工学科	4	1	2	1	0	4
	原動工学科	4	1	2	1	0	4
	電気工学科	4	1	2	1	0	4
	金属工学科	4	1	1	2	0	4
	(応用数学講座)	1	0	1	0	0	1
	(応用物理講座)	1	0	1	0	0	1
	(一般教養講座)	4	0	4	0	0	4
	計	22	4	13	5	0	22
	合計	79	56	18	5	0	79

## 9. 履修方法及び学位授与

### 1. 履修方法

- (1) 修業年限は4年とする。
- (2) 学年は夏学期、冬学期の2学期に分つ。
- (3) 工学部学生は前期1年の教養課程を学芸学部（水戸）に於て履修する。
- (4) 学芸学部は教員養成の関係上、経過的に2年制の課程を付設するものとする。
- (5) 教員免許状に関する規定に従い所定の学科目及び単位数を履修した者は教員免許状を授与される。
- (6) 学士号授与の規定に従い所定の単位数を履修した者は学士の称号を得ることができる。
- (7) 学士号の種類に関する事項は別に之を定める。
- (8) 各学部における一般教養課程及び専門課程の履修の方法の概要は次図に示す如くである。



## 2. 履修課程表 (以下略)

これは、その後かなり修正された。文理学部は1学部として独立し文・政経・理の3学科、学芸学部は教育学部として小学・中学の2教科とした。昭和24年5月、正式に認可されたが、これよりさき、昭和23年12月、文部省の大学設置委員会の務台理作(東京文理大学長)・湯浅八郎(同志社大学長)・野木得三(早大教授)ら各審査委員が来学し、つづいて昭和24年1月には柴田社会局長・春山大学課長・政村師範教育課長らと会談し、改訂申請書を提出している。3月18日、審査合格の内報をうけたが、それには「つぎのような茨城大学設置認可に対する履行条件」5項目が付されていた。

1. 教育学部の水戸市に移る計画を可及的速に実施すること。
2. 教育学部の一般教養中、自然科学関係の図書・標本・機械・器具及び文理学部・教育学部の実験室・研究室の充実を計ること。
3. 一般教養は主として水戸校舎にて行ふこと。
4. 各学部共専門学科の教職員組織を強化すること。
5. 以上の事項については、その実施につき報告を徴し、又必要ある場合は委員会として実施地視察をする。尙教員組織については、その充実に至るまでは本委員会に協議しなければならない。

大学本部と各学部の位置をきめるには、いろいろ面倒な問題があった。水高

と茨師は戦災で校舎を失ったから、水高は旧海軍航空隊兵舎（西茨城郡宍戸町）、茨師は旧海軍航空要員研究所（土浦市大岩田町）に移っていた。茨青師も昭和 19 年設立後、水戸から筑波郡上郷村へ、さらに旧海軍航空隊兵舎（宍戸町）へ移った。こうして教育学部は、しばらく土浦・友部の 2 教場にとどまった。水高はすでに昭和 22 年 10 月、旧東部第 37 部隊兵舎（東茨城郡渡里村）および焼残りの旧校舎（水戸市東原町）にもどっていた。

しかし、当時の第 37 部隊跡は、敗戦の混乱の縮図のような状況であった。水戸市内の戦災学校は、すべてここに集中していた。水戸一高・水戸二高・市立高校・水戸工高・大成女高・常磐女高などの旧制中学校・高等女学校をはじめ、市立一中・二中などの新制中学校、さらに新荘小学校をのぞく全部の小学校である。そのほか、日本赤十字社（茨城県支部）や醸造工場・エックス工場も移転しており、それに戦災引揚者も収容していたから、その混乱は大変なものであった。

それはともかく、新制茨城大学が大学設置基準に適合し、将来の確固たる方針をおしすすめてゆくには、どうしても相当の敷地・建物・設備が必要である。いろいろ協議のうえ、旧 37 部隊跡に、文理・教育両学部を併置するのが最善という結論に達した。こうして、大正 9 年以来、「暁鐘」の学風をもってきこえた水高の東原敷地と、明治 21 年以來、かがやく教育の伝統をきづいた茨師の旧水戸城敷地とは、ついに放棄されたのである。さいわい、多賀工専は戦災をまぬがれたうえ、工業都市日立をひかえている関係もあり、工学部として旧敷地にとどまった。なお 37 部隊跡の敷地としては、はじめ旧連隊本部跡も入る予定であったが、当時病院優先のたてまえから、国立水戸病院にゆづらざるをえなかった。

以上、いろいろな迂余曲折はあったが、昭和 24 年 5 月 31 日、法第 150 号国立学校設置法により、文理学部・教育学部・工学部の 3 学部からなる新制茨城大学が正式に発足したのである。



## 第2章 開学の推移

昭和24年5月31日、水高校長関泰祐は学長事務取扱を命ぜられ、文理学部長に補せられ、また茨師校長斎藤儀重は教育学部長、多賀工専校長都崎雅之助は工学部長にそれぞれ補せられた。初代事務局長は東北大学会計課長橋本道胤であった。

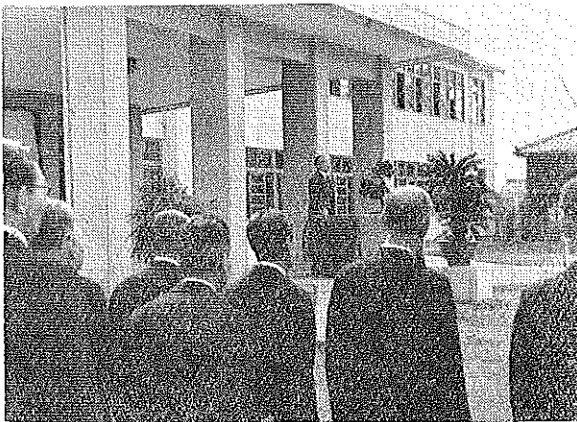
同年6月29日、東京工業専門学校長鈴木京平が学長に補せられたが、学長候補には東北大学名誉教授宮城音五郎もうわさされていた。7月22日講堂もな



橋本初代事務局長

ので構内広場で第1回の入学式が行われ、学生656名の入学を許可した。野外の炎天でもあったが、アロハすがたの学生もみえる入学式風景であった。

はじめは事務局（本部）だけに事務職員をおき、文理・教育両学部にはおかない方針であったが、教育学部の事務職員が多く水戸に移ってくることになる、この線はくずれた。また定員は、年度計画ですこしづつしかもらえぬので、



開学式

水高では昭和 24～25 年にわたり、多賀工専・茨師では昭和 26 年までかけて徐々に移行した（第 1 篇第 5 章の教職員定員推移一覧表を参照）。

また茨城総合運動場建設と大学の関係にも、いろいろ問題があった。堀原地区運動場は、旧陸軍練兵場跡で、茨城県の指定開拓地であった。すでに入植者も多く、ここに総合運動場を建設するためには、まず入植者の代替地と、耕作物および家屋移転の補償料を考慮しなければならなかった。昭和 25 年 4 月、県庁内に茨城総合運動場建設委員会がもうけられ、「茨城大学運動場並びに茨城県総合運動場を建設する」（規程第 1 条）こととなった。補償料の財源は、大学の全般的建設寄付とし、水戸市から 500 万円、大学設立期成会から 160 万円、計 660 万円をもって、この開拓農地から運動場地区への変更を完了した。当時、大学としては、すべてを茨城大学総合運動場として所管する目的で大蔵省に申請書を提出していたが、関東財務局の村田課長が数回にわたって視察調査し、文部省とも協議した結果、ここを A、B 2 地区にわけ、将来、所管換に応じられるのは A 地区だけとなった（B 地区は野球場）。

同年 5 月 26 日、旧堀原練兵場敷地 3 万 6 千坪を、本学の総合運動場用地として関東財務局長あて、土地の一時使用認可申請書を提出。6 月 17 日には所管換を前提として、県知事と「茨城総合運動場維持管理に関する覚書」および「茨城大学運動場施設建設許可条件に関する覚書」をとりかわした。9 月 11 日 A 地区（24,242 坪）の所管換内協議書を水戸財務部長あて提出、翌 26 年には「茨城県総合運動場管理委員会規程」（昭 26・7・14）がさだめられた。

以後の状況については後述するが（第 1 篇第 5 章）、この総合運動場については、東原の旧水高敷地との関係でまたいろいろ問題があった。文理学部では、はじめ渡里地区を大学の一般教育、東原地区を文理学部の専門教育のそれぞれキャンパスと予定しており、数学教室 1 棟を新設したが、その後、教育学部付属小中学校統合の候補地となり、さらに市立一中にその一部をゆずり、三転して教育学部職業科の教場となった。東原の敷地を市立一中にさくかわりに、堀原運動場は完成のあかつきには、あげて茨城大学に寄付するというふくみであった。

大学事務局と文理学部がおかれた水戸の旧 37 部隊は、前述のように、水戸

市内の戦災校その他が雑居していたから、これらが全部立退かなければ、全体の大学整備に入ることができなかった。この兵舎は、明治42年(1909)、千葉県佐倉の歩兵第2連隊が水戸に移動したとき建築されたもので、正門にそって桜並木があり、舎内にも桜が多い。1部が水戸衛戍病院となっていたが、このすさまじい旧兵舎の修理と改造が、大学発足に当たっての急務であった。また教育学部としては「設置認可に対する履行条件」の第1として、なるべくはやく土浦・友部両分校を水戸に合併せねばならず、さらに男子・女子両部の各付属小中学校も統合せねばならなかった。旧37部隊(歩兵第2連隊)の左隣りは旧42部隊(工兵第18大隊)であるが、ここに創立まもない水戸市立女子専門学校があり、茨城大学へ統合のための国立移管運動があった。結局は、水戸市の赤字毎年2,300万円と施設・内容・教員などの貧弱さから成功しなかったが、今日からみれば、女子短大の必要性が叫ばれており、廃校になったのは惜しまれてならない。

これに反し、比較的順調に茨城大学農学部となったのは、財団法人霞浦農科大学であった。昭和21年6月、株木政一が理事長として開学したが、同24年9月には県立農科大学となり、同27年4月には茨城大学農学部となった。ここまでの間、茨城大学が開学の苦難をへて、文理・教育・工・農の4学部をもつまでに発展した第1期ということができよう。

このような茨城大学発展の支柱となったのが、前述の「茨城大学設立期成会」の活動であった。昭和24年8月には、3学部長につづいて付属図書館長(小川教授)・学生部長(沼尻教授)がきまり、8月22日には各学部とも授業を開始したし、12月には学則を制定した。昭和25年5月には事務局新庁舎ができるし、10月20日には開学祝賀式典をあげた。昭和26年4月には教育学部土浦教場を水戸に移転した。同年8月、付属図書館も完成した。

期成会の決算報告(昭27・10・10)とその事業概要はつぎの通りであるが、収入1億819万7千余円、支出1億404万6千余円、残額415万余円であり、その事業も新築・補修改築工事をはじめ、教官住宅・備品など、総額9,778万1千余円に達している。その詳細は、次表の通り。

# 茨城大学設立期成会

## 決算報告 昭和 27 年 10 月

### 収入決算

科 目	自昭和 23 年度 至昭和 26 年度	同 27 年度 10 月 10 日現在	合 計
1. 県分担金	68,250,000,00		68,250,000,00
2. 市町村及地元分担金	35,057,556,00	1,545,400,00	36,602,956,00
3. 特別寄付金	1,442,000,00	370,500,00	1,812,500,00
4. 預金利子	1,275,456,49	56,340,00	1,331,796,49
5. 雑 入	199,412,80	405,00	199,817,80
計	106,224,425,29	1,972,645,00	108,197,070,29

### 支出決算

1. 会議費	1,819,598,30	88,932,00	1,908,530,30
2. 事業費	92,059,668,14	4,702,645,00	96,762,313,14
新築補修費	69,764,271,44	4,178,165,00	73,942,436,44
設備費	17,373,977,40	187,900,00	17,561,877,40
雑費	4,921,419,30	336,580,00	5,257,999,30
3. 事務費	2,341,145,10	262,754,00	2,603,899,10
4. 交付金	2,552,934,75	219,044,00	2,771,978,75
計	98,773,346,29	5,273,375,00	104,046,721,29

### 収入支出精算

収入総額	106,224,425,29	1,972,645,00	108,197,070,29
支出総額	98,773,346,29	5,273,375,00	104,046,721,29
差引残額			4,150,349,00

備考 うち目下工事中の音楽教室支払その他見込約 170 万あり、残額は精算の上、後続団体に引きつぐ予定。

## 事 業 概 要

### 1. 新 築 工 事

工 事 名	構 造	坪 数	金 額	備 考
大学本部庁舎	木造二階建	395坪	9,049,332.00	
図書館書庫	鉄筋コンクリート四階建	216 "	8,466,523.00	
同 閱 覧 室	木造二階建	400 "	10,650,235.00	
大学正門			1,000,000.00	
水道新設			1,398,000.00	工学部多賀
瓦斯新設			1,569,000.00	研究室
計			32,433,090.00	

### 2. 補修改築工事

一号教室模様替		576坪	3,823,260.00	
二号教室 "		"	1,610,528.00	
四号教室 "		"	3,992,200.00	
五号教室 "		"	1,594,000.00	
一号寄宿舍 "		159 "	1,180,180.00	
二号寄宿舍 "		135 "	1,174,879.00	
五号寄宿舍 "		111 "	701,910.00	
独身寮 "		80 "	835,240.00	
第一教授研究室 "		205 "	3,383,600.00	
第二教授研究室 "		195 "	2,855,815.00	
応急補修その他			8,651,266.84	
音楽室			2,669,000.00	
時計取付工事			42,000.00	
雑費 (立退補償料ヲ含ム)			5,257,999.30	
計			37,711,878.14	

### 3. 教 官 住 宅

新築住宅	43棟	総坪 488坪	7,606,793.00	内5棟26年度建築
買収住宅及土地	建物 17棟 土地	" 331.55 " 3,086.63	6,488,300.00	
計			14,095,093.00	

#### 4. 備 品

図 書	17,666冊		3,842,930.90
教 具	11,025点		9,638,321.10
計			13,481,252.00
総 額	97,781,313.14		

備考欄の「後援団体」というのは、いまの茨城県文化振興協会をさすわけであるが、これについては後述する（第1篇第5章、第2篇第3章）。

なお、ここに2つのことを付加しておく。1つは大学改名論であり、もう1つは本学バッジ（徽章）の制定である。

水戸・日立・土浦3地区にまたがる総合大学であるから、茨城大学の名称はふさわしいものであった。ところが、新制大学の構成は、いわゆる駅弁大学・たこあし大学の俗称がしめすように、形式画一的、寄木雑居的な傾向をもったから、大学によっては旧高専時代の歴史や伝統にそぐわぬものもあり、大学に昇格してもその実質は低下した面もあった。弘前・金沢・宇都宮・横浜・神戸諸大学のように、必ずしも県名によらぬ大学名もあった。文理学部教授石原道博の「水戸大学改名論」（いはらき、昭27・5・7）、「水戸大学発足論」（茨城大学新聞10号、昭27・6・20）や、同「新制大学の苦しみ——文理学部をどうする」（朝日新聞、昭28・12・22）、「地方の特色を盛り——大学風土記を読んで」（朝日新聞、昭31・12・28）などが、地元・中央の新聞、大学新聞の論壇・学芸欄などをにぎわしたのは、やはりこの雰囲気を反映したものであった。

バッジの制定は、やはり新制国立大学の続出と関係がある。旧帝国大学時代の徽章は、角帽に「大学」と隷書でたてがきしたもので、帝大以外は、昇格後の東京・広島両文理科大学のみに適用されていた。それが戦後数十の国立大学が発足し、またいわゆる制服・制帽というものもようやくなくなってきたから、各国立大学でも独自のバッジを使用するようになった。



茨城大学バッジ

本学の徽章は、昭和25年9月、ひろく本学学生

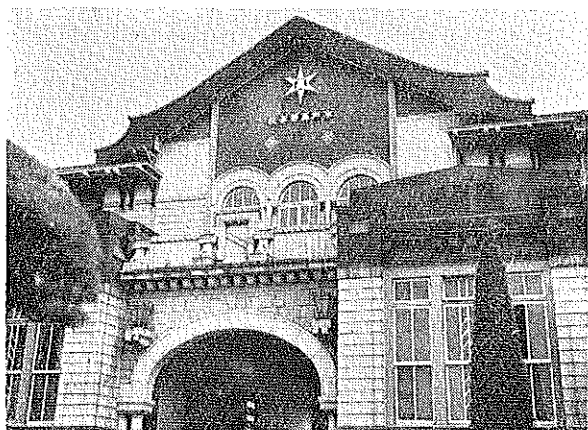
及び教職員によびかけてその図案を募集したが、優秀なものがなかったので、さらためて本学美術科教官に作成を依頼して3種の図案をえた。これを学内投票によって順位をきめ、補導委員会の議をへて、第1位であった現在の図案と、本学の徽章として正式に決定した。当初はバッジにナンバーをつけ、文理学部は 601～900，教育学部は 901～1400，工学部は 1401～1700，農学部は 701～1850 となっていた。しかし入学時につける学生番号が、各学部ごとに 000 番からはじめ、年度をおつて 0 番に終り、以下 10 年ごとに循環することとなっているので、これと一致せず、実効があがらなかった。その後ナンバーを廃し、現在に至っている。このバッジは入学時に学生便覧「我等の学園」とともに新入生に交付されるものである。

## 第3章 学部 の 整備

### 1. 文 理 学 部

#### (1) 水戸高等学校の沿革

紀・尾・水とって御三家の1つである徳川氏親藩の城下町・水戸は、彰考館・大日本史をもって聞えた山緒ある町であって、大都会の騒音と煤煙を隔て



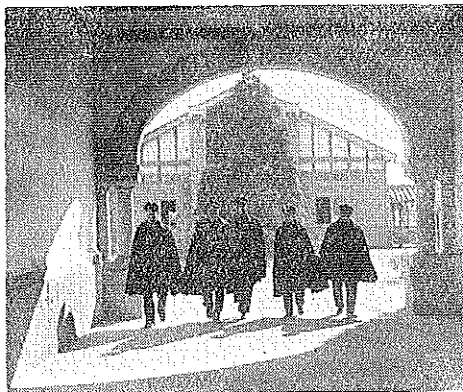
水 戸 高 等 学 校 (1)

つつ東京から鉄路3時間の距離にある。学都としての環境は極めて良好というべきである。

茨城県東茨城郡常磐村(昭和8年水戸市東原町と改称)に、水戸高等学校が建設されたのは大正9年(1920)9月1日である。ここの創立は、郷土出身の実業家内田信也の100万円という当時としては巨額の寄付行為によるものであった。全国に散在する第一より第八にいたる高校について、地名を冠し、これに劣らぬ内容と外観とを具備した高校の設立は、向学の念の極めて篤い県民の待望久しきに及んだものであった。従って、水高が創立されると、直ちに水戸中学・土浦中学を始め、県下の優秀校の卒業生及び全国各地から風を望んで馳せ参ずる秀才は、競って水高の狭き門に殺到した。



学科は文科甲，乙類，理科甲，乙類に分れ，卒業生の大多数は東京帝国大学(京都・東北へも)へ進んだ。水高のもつ外観からの特色は，大講堂と全国高校中にもまれに見る大規模な寮(7寮)とをもったことである。従って一高の皆寄宿制度に準じて，1年生は皆寄宿(これは全国高校の多くがそうであった)



水戸高等学校(2)

とし，2・3年生の半分を収容することができた。この寮において各地から笈を負うて，集まった青年の好学好意は燃え，意気は高く発揚されたのである。こうして昭和20年(1945)10月1日には25周年記念式典を催すに至った水高が大きな変化をこうむるに至ったのは，いうまでもなく戦災と敗戦によるのである。

昭和20年8月2日の戦災によって，校舎の大部分は烏有に帰した。焼失を免れた建物は生徒控室，化学教室及び実験室，図書館書庫(蔵書の大半はこの中であって焼失を免かれ，これが現在茨城大学附属図書館本の基礎となっている)，寄宿舎7棟，訓務課分室，雨天体操場のみであった。

戦後は，残存した建物，寮をもって教室にあてるなどの方法により授業を続けたのであるが，21年2月16日，失火のために第1寮から第5寮までを焼失し，残ったのは僅かに第6，第7の2寮のみとなった。5月に友部町にある旧筑波海軍航空隊跡に移転した。ところが，6月8日，漏電によって寮に転用していた旧士官宿舎焼失の厄に遭い，再度移転のやむなきに至り，水戸市外渡里村，旧東部37部隊へ移った。23年9月である。当時この部隊跡には罹災した水戸市内の各学校が混在し，引揚者罹災者も雑居するありさまであったので，この際は3年生を37部隊に，1，2年生を東原残存建物に収容して授業を続けたのである。

## (2) 文理学部の開設

文理学部は旧制水戸高等学校を母胎として昭和 24 年 (1949) 5 月 31 日、全国一斉に誕生した国立新制大学の一学部である。大正 9 年 9 月に開校した水戸高等学校は、全国に散在する旧制高等学校のすべてが、例外なしにそうであったように、英才四方より集まり、俊秀な教授陣を擁して豪気堅実の校風をもって天下に鳴るものであった。その教育の根本は、大正 7 年 12 月 6 日の高等学校令第 1 条に「高等学校ハ皇国ノ道ニ則リテ男子ニ精深ナル程度ニ於テ高等普通教育ヲ施シ国家有用ノ人材ヲ錬成シ大学教育ノ基礎ヲラシムルヲ以テ目的トス」と掲げられていることによって明かである。それが水府の風土に育まれて独特の校風を創成したのも、これが水戸高等学校であった。

水高は戦災、その後再後に及ぶ失火の災厄をこうむった後、内外にわたる大変動をうけるに至った。昭和 21 年 3 月に第 1 次 米国教育使節団が来朝し、22 年 3 月に教育基本法が発せられ、学校教育法によって 6 3 3 4 制の新教育体制が定められたこと、すなわちこれである。水戸高等学校は、こうして茨城大学文理学部の中に発展的に解消した。

本学部は文学科・理学科・政経学科の 3 学科からなり、人文・自然・社会などに関する学術の各部門を専門的に研究すると共に、その総合的な教育を行い、深い学問と高い教養とを身につけた有為の社会人を養成することを、その目的とするに至った。

水戸高等学校教授の殆んど全員が、本学部の教授・助教授となった。昭和



文 理 学 部

23 年度水戸高等学校入学生は 1 年間で旧制を終り、その多くが本学部の学生となり、第 1 回入学式が同 24 年 7 月 20 日に挙行され、本学部の教育活動が開始されたのである。いうまでもなく、拡張され発展した本学部教官が、水高のみをもって充

とされるはずはなく、水高と同じく本学の母胎となった多賀工専、茨城師範、司青年師範などからも配置転換を行い、また新たに多方面から採用された教官も多い。殊に政経学科にあっては、水高の該教科の教官は、法律、経済各1名に止まっていた関係上、新たに迎え入れた人材が多いのである。

文理学部は、全国的に旧制高等学校のあった新制大学におかれたものである(例外はある)。「基準」の示すところによると、文理学部は「その大学のため一般教育課程を担当するとともにそれ自身の専門課程を有する四年制の学部であって、学術の基本的諸部門に亘る構成により、その大学の中核としての役目をもつ」ものであり、その上に「教育学部と協力して教育職員の養成の責に任ずるもの」である。

以来10年間、実状に応じ細部において多少の変更を加えながら、一般・専門すべての教育課程(特殊な体育・音楽などを除く)を担当して、忠実・厳格に「基準」に則って学部を運営し発展させ、名実ともに本学の中心となっているのが、文理学部の今日までの歩みである。

歴代の学部長は、第1代関泰祐(昭和24年5月31日～同年6月29日)、第2代鈴木京平(事務取扱)(昭和25年4月30日～同年8月1日)、第3代倉橋治助(事務取扱)(昭和25年8月1日～27年12月31日)、第4代大場千秋(昭和27年12月31日～31年6月1日)、第5代中村己喜夫(昭和31年6月1日～現在に至る)である。



関初代文理学部長

文理学部運営の中心機関は教授会であるが、学部長をたずけて常時事に当るのは委員会である。すなわち、補導委員会(うち2名は中央補導委員)・教務委員会・一般教育運営委員会・紀要委員会・就職委員会などがそれぞれである。

各委員は、すべて教室主任の推薦をへて、文・理・政経3学科の教官からほぼ同数を選び、学部長から指名される。任期はいずれも1年。

はじめ教授会は、25年5月1日に制定された規程により、学部長と教授

とをもって構成されていた。それが助教授・専任講師までもその構成員とする大教授会に発展し、いわゆる教授のみの教授会は人事に関する事に当るだけと



大場 前学部長

変わったのは、32年6月1日からである。

新教授会の運営細則第3条によって、従来の委員会はこれを特別委員会と汎称して、そのまま存続し、新たに常設委員会(人事・予算施設・選挙管理など)が設けられ、それぞれ選挙によって交代し、現在に及んでいる。

評議員の選出も、また大教授会でやっているが、このほかに、文理学部組織委員会が存する。同じく教

授会から選出され、本学部の組織等の問題を研究するものである。何故そのような特殊なものが存在するかといえば、後に教科課程の章でもふれるように、本学部の有する2重的性格に由来する。すなわち、学問研究と教員養成との2面がそれである。それぞれの専門分野の研究及び授業内容において、わが国各学界の最高水準に達する程度でなければならぬのが「大学」であり、一方では、また教員養成のことも当たっている。後者に重点をおけば、「文理学部を廃止して学芸学部とせよ」となる。こうした意見が出されたのは、決して最近のことではない。また本学部内からでもないが、かなり有力である。これに対して、前者を重んずるならば、専攻科目それぞれの内容充実を図る方向をとらざるをえない。ところが、このことは人事その他各方面に甚大な影響を及ぼすために、極めて困難である。組織委員が選出されること前後3回、鋭意研究を重ねている。いずれにせよ、なるべく早く結論を得て、本学部の新しい歩みを見出したいものである。



教務・補導については、開学当初は一般教養(当時 中村 学部長の呼称)のみで出発したから、両者は未分化であった。学生部を中心とし、各学部から選出された補導委員によつて中央補導委員会が設けられ、厚生面をも併

せて処理していた。専門課程の授業が行われるようになって、ようやく補導と教務とを分離すると同時に、各学部の補導・教務が独立し、学生部はその間の連絡調整に当ることとなった。第2代酒井学生部長のとき、学生部の教務補導課を廃止して学生課とした。その結果、各学部が独自に教務補導の責に任じ、学生部は主として学部間の連絡調整と、全学的な学友会・自治会・学寮活動に努めることなどに当るようになった。

文理学部も、この経過の線に沿っている。補導委員は開学当初からおかれたが、教務委員は昭和26年からである。

補導委員の仕事の中、最も多くの時間と手数のかかるのは日本育英会奨学生の選考と推薦である。文理学部としては、工農両学部の1年次生及び水戸残留学生の問題ももっている。はじめ助言教育制度を採用したが、あまり効果があがらなかったため、1・2年次については外国語のクラス別によって1種の学級主任制を採った(24年より)。学生相談室(水戸地区)には、教官2名を送っている。専門課程の学生の補導は、各教室に委ねつつ、学部補導委員会および中央補導委員会と緊密に連絡し、事を処理している。補導業務は、学生の賞罰にも及ぶ極めて困難な仕事であるが、学部単独のことは少なく、全学に及ぶ場合が多い。殊に、全学連を主たる指導勢力とする学生自治会の運動が問題の中心である。10年間を顧みて重要な問題は、(1)29年末より30年1月にかけての「当面の要求」、(2)33年における勤務評定・警職法の反対運動、(3)34年の安保改訂反対運動、である。この特色は、学の内外と呼応して抗議集会・デモ行進、時としてストライキに及べんとすることなどである。

文理学部には他学部とちがって、教務が2つある。一般教育運営委員と(専門)教務委員とである。その概略は教科課程の章(第2篇第1章)に述べてあるが、それ以外に、授業計画・時間割の作成などがある。一般教育における必修と選択、専門科目における必修と関連・自由を1つの体系にまとめ、その上に教育学部学生が副免許状を取得できるような教務計画である。この調整には指定・特設科目を設け、文理・教育両教務委員が随時連絡し、工・農両学部とも連絡をとる方法で処理する。時間割の作成には、別に委員を委嘱する。教育

実習については、後にその変遷の概要を述べてあるが、学期試験・編入転部転科試験などをも担当していることはいうまでもない。

### (3) 文理学部の組織と各科の概況

本学部は、大学創立の当初から、枠外必修の外国語を初めとして（体育は教育学部）、一般教育科目の全部を担当する。従って1年間しか水戸地区に在学しない工農両学部学生に対しては、その第2学年生を対象として多賀・阿見へ出張して講義を行っている。

その上に、独自の専門をもっている。これについては文理・教育一体の建て前をとり、教職科目及び特殊な音楽図工体育などを除く、すべての学科目に対して本学部がその責に任ずる。

大学創立当初は一般教育のみの授業であったが、講座組織も次第に整備された。昭和27年度に例をとれば、つぎの如くである。

文 学 科	国文学第1講座（国文学）
	// 2 //（国語学）
	// 3 //（中国文学）
	英文学 // 1 //（英文学）
	// 2 //（ // ）
	// 3 //（ // ）
	// 4 //（英語学）
	独文学 // 1 //（独文学）
	// 2 //（独語学）
	言語学及びフランス語
	哲 学第1講座（哲 学）
	// 2 //（倫理学）
	心理学
史 学	// 1 //（日本史）
	// 2 //（東洋史）
	// 3 //（西洋史）

理 学 科	数 学第 1 講座 (解 析)
	# 2 # (函 数)
	# 3 # (代 数)
	# 4 # (幾 何)
	物理学 # 1 # (力 学)
	# 2 # (物理実験)
	# 3 # (電 気)
	化 学 # 1 # (無 機)
	# 2 # (有 機)
	# 3 # (物理化学)
生 物 # 1 # (植 物)	
	# 2 # (動 物)
	地 学

政 経 学 科	第 1 講座 (経済原論)
	# 2 # (経済政策)
	# 3 # (財 政)
	# 4 # (簿 記)
	# 5 # (行政法)
	# 6 # (民 法)
	# 7 # (社会学)

講座数において逐次増加したのは政経学科であって、文学科・理学科にあってはあまり増減がない。多少の変化はあっても、おおむね上掲の専門区分に従って研究と教育とを行ってきた。それにしても 1 講座に教授 1、助教授 1 の原則では、到底一つ一つの学科の充実にはほど遠いといわねばならぬ。そこで教官各自が力を尽して研究に従いつつ授業時間も多くを担当し、なお不足の科目については非常勤講師による集中講義によって補充をしている。そして演習、ゼミナールを強化し、卒業研究の指導に力を致し、更には、ともすれば余りに微細な専門に分化しすぎる傾向に鑑みて合同演習を設けるなどの措置を講

ずることによって、マスコミ教育の欠点を除去しつつ、実力ある卒業生を社会に送り出すことに努めている。

そこでたえず問題となるのは、専攻の整理である。はじめから専攻学生をおかない学科もある。文学科の言語学、理学科の地学、政経学科の法学・社会学・人文地理学がこれである。学生定員、1学年につき文学科 35 名（初め 40 名）、理学科 40 名、政経学科 80 名からも、教官定員からも、専攻科目の数を減じて内容を充実拡大しようとする方向に進みつつある。拡充の方向は、まず政経学科に対してとられた。初め 6 講座であった該学科は、昭和 33 年度には合計 9 講座となり、近き将来には経済学科と改称されようとしている。

以下煩雑をさけるために、昭和 27 年度と 34 年度をとって、本学部の授業計画を比較する。便宜上、文学科から史学、理学科から生物学をとり、それと政経学科の 3 つとした。人員及び学科内容において、変化の著しいものをとったのであるが、27 年度はようやく専門がその緒について一応整備された年、34 年度は現況を示す。これによって、日進月歩、たえず新たな努力をつんで整備と発展につとめつつある本学部の姿の一端をうかがうことができよう。

## 文 学 科

### 史 学 専 攻

#### 昭和 27 年度

(講義題目)	(担当教官)
日本史概説	宮 田 俊 彦
" 特講 (日本仏教史)	"
" 演習 (続日本紀)	"
" 特講 (近世地方史)	瀬 谷 義 彦
" 演習 (近世史料)	"
東洋史概説	石 原 道 博
" 特講 (東洋史上の諸問題)	"
" 演習 (日中交渉史料)	"
" 特講 (中国社会経済史)	豊 崎 卓
" 演習 (旧唐書食貨志)	"
史学概論	島 田 雄次郎
西洋史概説 I	三 浦 一 郎
" II	島 田 雄次郎



" 特講 (ルネサンス)	"
歐洲經濟史	"
西洋史特講 (ギリシャ史)	三浦一郎
" 演習 (ギリシャ史料)	"
昭和 34 年度	
日本史概説 I (古代・中世)	宮田俊彦
史学概論	"
日本史特講 (常陸国風土記)	"
" 演習 (日本書紀)	"
日本史概説 II (近世・最近世)	新城常三
" 特講 (中世社会史)	"
" 演習 (吾妻鏡)	"
" 演習 (近世史料)	瀬谷義彦
東洋史概説 I (古代・中世)	豊崎卓
" 特講 (東洋女性史)	"
" 演習 (史記)	"
" 概説 II (近世・最近世)	石原道博
" 演習 (朝鮮史料)	"
" 特講 (東西交渉史)	満井隆行
西洋史概説 I (古代・中世)	三浦一郎
" 特講 (ギリシャ史)	"
" 演習 (ギリシャ史料)	"
" 概説 II (近世・最近世)	島田雄次郎
" 特講 (ルネサンス)	"
" 演習 (ドイツ史)	"
" 特講 (アメリカ史)	非常勤講師 (集中)
史学合同演習	全教官

## 理 学 科

### 生 物 学 専 攻

昭和 27 年度

(講義題目)

微生物学

    " 実習

遺伝学

    " 実習

系統動物学概論

無脊椎動物学

(担当教官)

山口弥輔

    "

    "

    "

渡辺勇

    "

動物解剖実習甲	"
" 乙	"
動物発生学	戸 沢 秀 寿
" 実習	"
生理動物学A	渡 辺 勇
" B	"
" C	"
" 実習甲	"
" " 乙	"
植物生理学	山 口 弥 輔
" 実習	"
植物生態学	中 山 俊 郎
野外実習	山 口・中 山
臨海実習	渡 辺・戸 沢
生物学特講A	渡 辺 勇
" B	山 口 弥 輔
昭和 34 年度	
系統動物学	今 村 泰 二
動物形態学	"
" 生態学	"
陸水動物学	"
動物学特講	"
系統動物学実験	"
動物形態学実験	"
動物生理学	篠 崎 寿太郎
" 発生学	"
" " 実験	"
植物系統学	佐 藤 正 己
" 分類学	"
隠花植物学	"
植物形態学	"
植物学特講	"
植物分類学実験	"
" 形態学 "	"
" 生理学	野 本 宣 夫
" 生態学	"
植物生理学実験	"
遺 伝 学	井 口 昌一郎

” 実験

生化学 (集中)  
臨海臨湖実習  
植物野外実習  
生物学実験

”

薬師寺 英次郎  
今 村・篠 崎  
佐 藤・野 本  
佐 藤・今 村

政 經 学 科

經 济 学 専 攻

昭和 27 年度

(講義題目)

簿 記 学  
原 価 計 算  
ゼ ミ ナ ー ル  
經 济 地 理  
商 品 学  
經 济 政 策  
国 際 經 济 論  
原 書 講 読  
ゼ ミ ナ ー ル  
商 業 学  
ゼ ミ ナ ー ル  
社 会 政 策  
經 济 学 史  
經 営 学  
原 書 講 読  
ゼ ミ ナ ー ル  
經 济 原 論  
財 政 金 融  
統 計 学  
商 業 数 学  
農 業 政 策  
日 本 經 济 史  
憲 法  
行 政 法  
民 法 1  
” 2  
” 3  
商 法

(担当教官)

今 井 忍  
”  
”  
国 松 久 弥  
”  
津 田 隆  
”  
”  
高 木 皖  
”  
佐々木 専三郎  
”  
河 村 良 吉  
”  
”  
大 石 泰 彦  
江 美 洋 甫  
石 田 正 次  
加 藤 惣兵衛  
広 沢 吉 平  
木 戸 田 四 郎  
関 誠 一  
”  
木 下 ・ 明  
”  
中 川 善之助  
鴻 常 夫

社会学概論	伊豆山 善太郎
"    特講	"
社会調査	古田 仁
人文地理学	桜井 明俊
"    演習	"
地誌学1	高橋 栄一
"    2	堀口 友一

昭和 34 年度

経済原論	武井 邦夫
経済学史	石川 郁夫
日本経済論	桜井 武雄
国際経済論	津田 隆
統計学	横山 辰夫
原書講読(英)	石川 郁夫
"    (露)	"
日本経済論ゼミナール	桜井 武雄
日本経済史	木戸田 四郎
欧州経済史	藤村 通
経済地理学	桜井 明俊
日本経済史ゼミナール	木戸田 四郎
欧州 " "	藤村 通
経済地理学 " "	国松 久弥
"    "	桜井 明俊
経済政策	津田 隆
農業 "	桜井 武雄
社会 "	佐々木 専三郎
財政学総論	大川 政三
経済政策ゼミナール	津田 隆
社会政策 "	佐々木 専三郎
財政学 "	大川 政三
原書講読	"
金融論 I	吉野 昌甫
"    II	武井 邦夫
商業学概説	高木 皖
商品学	国松 久弥
商業学特講	桐田 尚作
金融論ゼミナール	武井 邦夫
商業学 "	桐田 尚作

商業学	〃	高木	司
経営学		村松	叙
財務管理			饒
経営学特講			〃
経営学ゼミナル		桐田	尚
簿記学		村松	司
会計学		永田	忠
会計監査		倉地	幹
原価計算		永田	忠
原書講読		倉地	幹
会計学ゼミナル			〃
憲法		永田	忠
行政法		関	誠
〃	特講	横山	保
政治学			〃
刑事法		関	誠
公法ゼミナル		浅野	豊
〃		関	誠
民法I		横山	保
〃	II	小林	三
〃	III	木下	明
民法特講			〃
労働法		小林	三
民事訴訟法		山本	吉
私法ゼミナル		内田	恒
〃		木下	明
〃		小林	三
商法		山本	吉
社会学概論		岡田	憲
〃	特講 (民族社会学)	伊豆山	善太郎
〃	(マス・コミュニケーション)		〃
社会調査		古田	仁
集落人口地理学			〃
地誌学I (世界地誌)		桜井	明
〃	II (日本地誌)	堀口	友
地誌学演習		高橋	栄
〃		堀口	友
人文地理学演習		高橋	栄
		桜井	明

## 2. 教育学部

### (1) 茨城師範学校、茨城青年師範学校の沿革

茨城師範学校は、明治7年(1874)1月、水戸下市柵町旧水戸城内付属中御殿(現水郡線踏切から水戸駅に通ずる通路の中程)に拡充師範学校と称して創設、明治9年4月、茨城県師範学校と改称、土浦師範学校(旧新潟県の師範学校)を分校とした。明治10年、水戸上市滝岡町(現測候所付近の台地)の新校舎に移転、学則を定めて師範科・女子師範科・速成師範科・予備師範科を設置、付属小学校を併設した。同12年、土浦分校を廃止、翌13年、茨城中学校(現水戸一高)を併置、予備科・女子師範科・速成師範科を廃止した。明治18年、茨城中学校を分離、従来の初等師範科・中等師範科のほか、高等師範科を創設したが、翌19年の師範学校令の公布によって同科は第1回の卒業生を出しただけで廃止された。同年、茨城尋常師範学校と改称。同21年、旧水戸城本丸跡(現付属小学校)の新校舎に移転、同31年、茨城県師範学校と改称した。

茨城県女子師範学校は、明治36年(1903)5月、県立水戸高等女学校(現水戸二高)内に併設され、同38年、付属小学校を併置、同44年、水戸市寺町(現警察学校のあたり)の新校舎に移転、昭和8年(1933)、県立水戸第二高等女学校を併設した。

昭和18年4月、師範学校令改正により文部省直轄の茨城師範学校となり、茨城県師範学校は男子部、同女子師範学校は女子部となり、県立水戸第二高等女学校を分離した。初代校長は磯野清、男子部長に齋藤儀重、女子部長に関野豊三が任ぜられた。昭和20年(1945)8月、戦災によって全校を焼失、男子部は稲敷郡阿見町元海軍氣象学校跡に、女子部は那珂郡勝田町日立兵器株式会社付設青年学校跡に移転した。同22年2月、男子部は土浦市大岩田町元海軍航空要員研究所跡に再び移転、同年5月、付属国民学校を付属小学校と改

茨城大学が誕生したので、県立農科大学も国立に移管して茨城大学に合併す  
く、時の茨城県知事友末洋治が陣頭にたち、茨城大学設立期成会が中心とな  
り、翌 25 年 2 月 14 日付、文部省告示第 7 号によって新制茨城県立農科大  
学として認可を受けた。



農 学 部 全 景

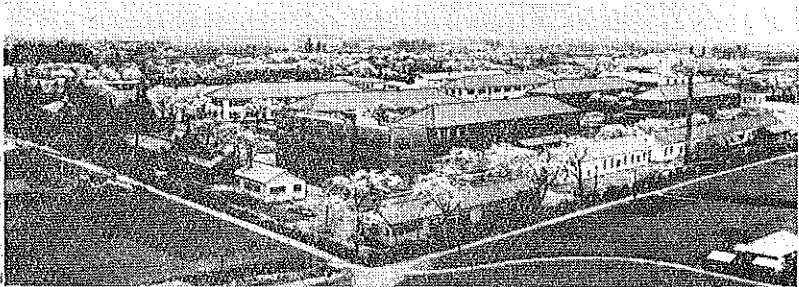
当時の茨城大学長鈴木京平が暫定的に県立農科大学長に委嘱され、2ヵ月後  
に東京大学農学部教授田中貞次が専任の学長として補職された。そして昭和26  
年度には旧制農科大学の課程を卒えた第1回卒業生 37 名を、実社会に送りだ  
すことができた。

このようにして昭和 27 年 3 月 31 日、文部省告示第 10 号により茨城県立  
農科大学は廃止され、翌 4 月 1 日付、宿望の国立に移管され、農学、畜産の 2  
学科をもって、茨城大学農学部が発足した。心気一新、組織は確立し、陣容は  
もろくも充足し、研究上の施設、設備も大いに整った。ここに、農学部のゆるがぬ礎石  
が築かれたのである。

## 第5章 発展の様相

茨城大学が、第1期の創業時代をおえて、第2期の建設時代に入ったのは昭和26年(1953)である。3月20日、第1回卒業式および第3回修了式(教育学部2年課程は、第1回を昭和26年、第2回を同27年に行っている)が総合運動場体育館で挙行された。卒業生457名(内女子12名)、終了生227名(内女子79名)であった。学生の定員・現員・募集人員・志願者・入学者および卒業生・修了生の数などは、まとめて後述するが(第2篇第2章)、とにかく旧制高専の1年次から横すべりした学生も多数いた第1回卒業生は、いろいろな意味で教官と同甘共苦、未来の大学像をえがきつつ、希望と覇気をもって前進したことは事実である。

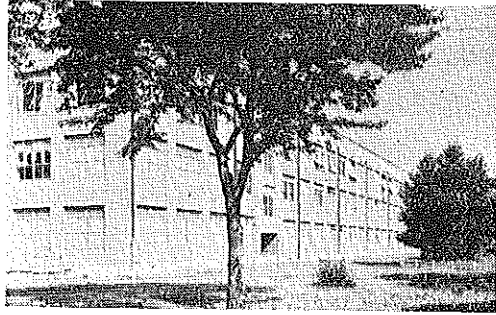
この年9月、鈴木学長が勇退されると、本学学長選考規則により第2代学長として東京大学名誉教授・日本体育協会会長東竜太郎が選出され、10月1日、正式に発令された。鈴木学長時代は、創業草創のときで、一応新制大学としての物的・人的条件をととのえるのに急であったが、東学長時代は、一歩前進して諸規程の整備、教授研究の充実にも、力がむけられてきた。たとえば、各学部長・図書館長にしても、それぞれその選考規則にもとづいて選出されるようになった。ことに大きな問題は、1つは昭和30年3月、かねて懸案であっ



茨城大学(水戸地区)全景



た教育学部友部教場を旧水高構内の東原教場（昭25.10竣工）に移転させ、これを職業科にあてたこと、2つは同年7月、地元の要望にもこたえて工学部に工業短大が新設されたこと、3つは同33年4月、これも難行をきわめた教



新装なった自然科学研究室

育学部付属水城・愛宕両中小学校の統合がようやく軌道にのり、水城が付属小学校、愛宕が付属中学校となったことである。詳細はそれぞれの章節にゆずるが（第1篇第3章2、第7篇）、このほか工学部では工業化学科（昭31.3）・専攻科（昭33.3）の増設があり、事務機構の改正としては、学生部教務補導課を学生課に改めた（昭29.9）。また付属施設としての岡倉天心ゆかりの地である五浦研究所もあらたに発足したし（昭30.6）、涸沼臨湖実験所もようやく整備されて（昭32.3）その特色を発揮してきた。主な工事施設については、年度別一括して後述するが（第4篇第2章）、この間に工学部図書館（昭30.6）、水戸地区の自然科学研究室（昭32.3）・合併教室（昭33.3）、教育学部付属小学校校舎（第1期、昭33.3）などが完成している。

なお、この時期でわすれられないのは、校歌の制定とその後の総合運動場の問題である。

現在の校歌は、昭和29年7月、土岐善麿作詞、平井康三郎作曲により完成した。当時1部の学生は、原水爆、M.S.A.再軍備、教育2法案問題などに重大関心をよせはじめ、学内外において具体的運動を展開しようとしていた。これらの動きに対し批判的であった学友会役員会は、代表者会議を開き、「校歌を制定して、全学生の団結をはかり愛校心をもりたて、もって地についた意義ある学生運動を起す」方針を一決、ただちに実行委員をあげて、具体的行動を開始した。学生は沼尻学生部長、音楽科教官らの助言指導により前記の土岐・平井両氏と十数回直接交渉した。この間、酒井教授が学生部長に新任した機

会に、学長、各学部長をふくむ校歌制定委員会が発足し、その承認の下に正式校歌として決定した。その後は学生のあらゆる集会行事に、茨城大学校歌として愛唱されている（巻首の作詞・楽譜参照）。

茨城総合運動場については、その後、管理使用条例（昭 27.12.21 茨城県条例第 46 号、改正昭 29.8.15 同第 51 号）および同施行規則（昭 27.12.21 茨城県教育委員会規則第 6 号、改正昭 29.8.15 同第 5 号）がつくられ、「教育委員会及び茨城大学が共同で管理する」（条例第 2 条）、経費の負担区分は「教育委員会が茨城大学と協議して定める」（同第 3 条）こととなった。これよりさき、大学からの貸付申請（昭 29.4.21）に対し、「本地の現況に鑑み茨城県を賃貸人として使用管理せしめることが適当である」との理由で、貸付申請書が返戻され（昭 30.8.12）、やがて知事から総合運動場建設経過報告ならびに都市公園運動場として大蔵省から無償貸付をうけるため、本学の同意方を依頼してきた（昭 31.6.28）。ついで「都市公園法」（昭 31.10.15）が施行されたが、大学としては、知事からの依頼に対して、総合運動場が都市公園運動場として設置認可されたときも、本学は従来通り使用できることを県使用条例に規定することを条件として承諾する旨の覚書（同意書）を知事に送付した（昭 31.10.20）。つづいて、もし運動公園となれば、将来大学としては、所管換不能になるから、大学運動場設置のさいは県の援助も考慮されたい旨、申し入れた（昭 31.11.13）。こうして、ついに「茨城県都市公園条例」（昭 32.6.6）が公布されたのであるが、大学ではこの堀原運動公園の体育館その他を、毎日正課および課外活動に使用しており、清掃そのほか管理運営の面で、必ずしも円滑にいかない悩みをもっている。

茨城大学教職員組合（水戸地区）が発足したのは、昭和 32 年 4 月であった。

昭和 33 年 9 月、東学長が東京都知事に立候補を予測しての辞職に伴い、二方教育学部長が事務取扱を命ぜられた。この間が、茨城大学としては 1 つの反省期であろう。同年 12 月、都崎工学部長が第 3 代学長として選出された

が、学外からの有力候補をやぶって、学長が学内から選出されたのは、これが最初である。こうして、大学としては第3期の整備時代に入ったといえよう。

これよりさき、同年6月、中村文理・二方教育両学部長はともに再選されていたが、昭和34年3月、工学部長には都崎学部長の学長就任後、真野克三教授、農学部長には中原学部長の定年退職によって広沢吉平教授が、それぞれ併任され、同時に田中事務局長の辞職による東京大学庶務課長藤田忠の新任、つづいて4月、小川図書館長の後任に文理学部大場千秋教授が併任、5月には石原学生部長の再任



田中前事務局長

など、またこれと前後して会計課長・厚生課長の転出もあったから、昭和33~34年にかけては、大学として人事異動のもっとも激しいときであった。

工学部につづいて農学部に専攻科(昭34.3)、また工学部にはさらに精密工学科(昭34.3)がそれぞれ増設された。文理学部は数年来、文理学部のありかたについて熱心な討議がくりかえされたが、政経学科は経済学部としての内容をとのえてきた。教育学部も2人3脚的性格からの脱皮に努力を重ねてきている。異動は一時混乱をまねくが、前進への胎動である。茨城大学も10年



藤田事務局長

の歩みをつづけ、同年5月30日、水戸の茨城会館において、創立10周年守成とどち記念式典を挙行した。創業とらが困難かなどは、今日の問題ではない。学長を会長とする茨城大学10周年記念事業委員会では、募金目標6千万円をもって記念講堂の建設と「茨城大学10年史」の編集とをまず企画した。こうした10周年記念事業が、明日の茨城大学をめざして、承前起後の役割をはたすよう祈念せざ

らえない。

10年を顧みて、茨城大学にはまだまだ物的・人的条件にかけているところが多い。教職員・学生が一体となって、各自が全力をつくす以外に道はない。

大学は、さらに将来の発展をめざして、教育と研究に不断の努力が要望される。

なお、大学発展の様相を概観する一助として、開学以来の評議会の議題と教職員定員の推移の一覧表をかかげておく。

### 茨城大学評議会議題

(昭和 24.10～同 34.5)

回数	開催年月日	議 題
1	24. 10. 27	工学部一般教養課程について 友部教場の授業について 本部処務規程(案)について
2	24. 11. 9	工学部一般教養課程について 一般教養学科運営について
3	24. 11. 19	本学学生他国立大学へ編入学のための受験手続について
4	24. 12. 22	学則の制定について
5	25. 1. 12	昭和 25 年度学生募集要項について
6	25. 2. 20	大学敷地問題について
臨時	25. 3. 11	本年度の専任教授の任命について
7	25. 3. 31	人事問題について
8	25. 4. 17	大学管理法試案について 人事問題について 茨城総合運動場について
9	25. 4. 27	大学管理法試案について 助手の定員について
10	25. 5. 4	教育公務員特例法による教員の審査について 昭和 25 年度予算及び施設について
11	25. 5. 18	現職教育運営協議会規程について
12	25. 6. 8	国立大学協会々則(案)について
13	25. 7. 21	大学施設整備計画について 昭和 26 年度概算要求事項について
14	25. 8. 19	県立農科大学移管について 教育学部に通信教育部設置について 厚生補導通則制定について

		工学部において教職課程に関するサママーセッション実施 について
15	25. 9. 28	昭和 26 年度入学者学力検査実施教科々目について 学則一部改正について 茨城大学教員適格審査委員会規程制定について 昭和 26 年度入学者学力検査実施教科々目について 昭和 25 年度小学校教員臨時養成科開設について
16	25. 11. 20	人事問題について
17	26. 1. 25	学士号について
18	26. 2. 19	旧制学校卒業者の編入学について
19	26. 5. 24	昭和 26 年度予算の配当について 事務機構の改革について
20	26. 7. 14	昭和 27 年度概算要求事項について 付属図書館協議会規程(案)について 補導協議会規程改正(案)について 一般教育の運営について
21	26. 8. 25	学長の海外出張について
22	26. 10. 18	学則の一部改正について 就職斡旋委員会規程(案)について 補導協議会規程(案)について
23	26. 12. 25	各学部規程(案)について 行政整理の問題について 茨城県立農科大学の移管とその後の経過について
24	27. 1. 19	昭和 27 年度入学募集要項について
25	27. 2. 28	水戸市立女子専門学校の廃校に伴う本校編入について 私立短期大学卒業者の本学編入について 工業短期大学部設置について 一般教育に関する追試験、再試験の実施について
26	27. 3. 31	学則の一部改正について 一般教育課程履修規程(案)について 各学規程(案)について
27	27. 4. 10	農学部第二次募集について 各学部規定(案)について
28	27. 5. 22	本学創立記念日制定について 農学部教授会規程について 短期大学部設置について
29	27. 6. 5	学則の一部改正について
30	27. 7. 17	昭和 27 年度予算の配当について

		昭和 28 年度概算要求について 現職教育講習について 昭和 28 年度入学者選抜方法のうち学力検査について
31	27. 10. 16	関東地区大学体育大会実施について 茨城大学後援会設立について 適格審査委員会規程の廃止について 農学部規程について
32	27. 12. 4	評議会規程の一部改正について 評議会記録の再確認について
33	28. 1. 22	茨城大学後援会について 昭和 26 年度決算報告について 友末知事に感謝状贈呈並に茨城大学設立期成会解消について
		文理学部学科改正と学士号について 第 1 回卒業式について
34	28. 2. 19	本学の予算配当について 一般教育履修規程(案)について 学士号について
35	28. 4. 16	学則の一部改正について 専攻生細則について
36	28. 5. 21	農学部農学科専修課程について 専攻生細則について

昭和 28 年 4 月 22 日文部省令第 11 号国立大学の評議会に関する暫定措置を定める規則により、昭和 24 年 10 月 20 日制定の茨城大学評議会規程は廃止され、新たに昭和 28 年 6 月 18 日に茨城大学評議会規程及び細則が制定され、この規程に基き昭和 28 年 6 月 18 日第 1 回評議会が開催された。

1	28. 6. 18	茨城大学評議会規程及び同細則について 茨城大学協議会規程について
2	28. 8. 20	茨城大学学則の一部改正について 昭和 29 年度概算新規要求の方針について 専攻科等の設置について 協議会規程の一部改正について 新評議会の性格について
3	28. 9. 17	な し
4	28. 10. 14	な し

5	28. 11. 19	な し
6	28. 12. 17	一般教育委員会規程（案）について 学部長選考規程（案）について 付属図書館長選考規程（案）について 転部転科及び編入試験期日変更について
7	29. 1. 21	一般教育委員会規程（案）について 学部長選考規程（案）について
8	29. 2. 18	一般教育委員会規程（案）について 学部長選考規程（案）について
9	29. 3. 4	学部長選考規程の制定について
臨時	29. 3. 18	図書館長の選考について 学部長選考規程について 授業料の未納について
10	29. 4. 22	学部長選考規程細則（案）について 進学適性検査の措置について 教員の資格審査について
11	29. 6. 3	教員の停年に関する規程（案）について 教員の採用並に昇任の選考に関する規程（案）について 明年度予算概算要求について
12	29. 6. 17	教員の採用並に昇任の選考に関する規程について 教育学部教授会規程の一部改正について
13	29. 7. 15	進学適性検査及び入学試験について 入学者選考委員会（仮称）規程（案）について 教員の採用並に昇任の選考に関する規程の農学部細則について
14	29. 9. 16	入学者選抜に関する運営委員会規程（案）について
15	29. 10. 21	教員の停年制規程の制定について 学則の改正について
16	29. 11. 25	教員の停年制規程の制定について 学則の改正について
17	29. 12. 16	教員の停年制について
18	30. 2. 24	学生共通規則について 教員停年制規則について 卒業式の日取について
19	30. 3. 17	教授定年制規則について
20	30. 4. 15	教授定年制規則について
21	30. 5. 12	評議員の改選について
22	30. 6. 30	学則の改正について

23	30. 7. 14	補導協議会規則の改正について 学則改正について
24	30. 9. 15	補導委員会規則について 補導委員会規則について
25	30. 11. 10	一般教育委員会規則について
26	30. 12. 15	一般教育委員会規則について
27	31. 2. 16	な し
28	31. 3. 15	工業短期大学部学則の制定について
29	31. 4. 26	専攻生、聴講生規則の一部改正について
30	31. 5. 17	短期大学部より評議員選出について 学生共通規則の一部改正について
31	31. 6. 21	な し
32	31. 7. 19	昭和 32 年度概算要求について 入学試験の運営について
33	31. 9. 13	入試運営委員会規則の一部改正について
34	31. 10. 18	名誉教授称号授与規則（案）について 付属図書館運営委員会規則（案）について
35	31. 11. 8	名誉教授称号授与規則（案）について
36	31. 12. 20	短期大学部教官会議規則（案）について 付属図書館規則（案）について
37	32. 3. 14	本学教官の国交未回復国への渡航について 名誉教授の選考について 一般教育履修規程の一部改正について 教官人事の異動報告について
38	32. 4. 4	図書館長の任期について
39	32. 4. 18	名誉教授の選考について 図書館分館長選考規則（案）について 付属学校規則（案）について
40	32. 5. 16	名誉教授の選考について 文理学部教授会規則（案）について 建設整備委員会規則（案）について
41	32. 6. 20	名誉教授の選考について 昭和 34. 5 年度の入試科目について 授業料未納による除籍者の除籍日付と未納期間中の単位の 認定並に在籍証明について 外国人学生の入学許可について



42	32. 7. 18	昭和 33 年度概算要求について
臨時	32. 8. 26	学長選挙について
43	32. 9. 12	建設整備委員会規則（案）について
44	32. 10. 17	な し
45	32. 11. 21	茨城大学懲戒審査会に関する内規（案）について
46	32. 12. 19	な し
47	33. 2. 13	外国人入学志願者の取扱について 入学式日取について
48	33. 3. 13	工学部長選考規程細則の一部改正について 授業時間の変更について 入試当日の私鉄等のスト対策について 中国留学生の取扱について
49	33. 4. 17	専攻科設置に伴う学則の一部改正について 学生定員の変更に伴う学則の一部改正について
50	33. 6. 19	工学部規則の一部改正（案）について 専攻科規則（案）について
51	33. 7. 11	昭和 33 年度予算配分について 昭和 33 年度教職員定員について 昭和 34 年度概算要求について 茨城大学学生厚生施設運営委員会規則（案）について
臨時	33. 8. 28	人権問題について
52	33. 9. 11	人事について
53	33. 10. 17	な し
54	34. 1. 22	東前学長名誉教授推せんについて 学科新設について
55	34. 2. 19	工業短期大学部入学式、卒業式について 東前学長名誉教授推せんについて 学生部長選考規則（案）について 卒業式、入学式について 短期大学部卒業式、入学式について
56	34. 3. 12	教育学部規則の一部改正（案）について 施設拡充資金運用委員会について
57	34. 4. 16	評議会規程の一部改正について 10 周年記念行事について 評議会、地区持廻り開催について
58	34. 5. 14	学則の一部改正について 教育学部学部規則の一部改正について 工学部学部規則の一部改正について

施設拡充資金運用委員会規則（案）について  
 本学学生補導業務組織及び運営の改善に関する基本方針について

これによれば、昭和 24 年 10 月から同 28 年 5 月までに 36 回、臨時 1 回、同 28 年 6 月から同 34 年 5 月現在までに 58 回、臨時 3 回、合計 94 回、臨時 4 回となり、10 年間に約 100 回開催している。このほか、協議会や部局長会議・部長会議などを入れると、なお相当多くの会議がもたれていることになる。

茨城大学教育職員定員の推移一覧

年 度	学長	学部長及び主事	教授	助教授	講師	助手	付属学校の事務、技術長及び教員職務職員	計	
24. 6.22	1	3	115	71	30	5	37	578	
25. 5.24	1	3	89	87	30	18	39	578	
度年	学長	教 授	助教授	講師	助手	教論	養護教諭	その他の職員	計
26. 8.25	1	65	105	31	27	39	2	304	574
27. 10.13	1	82	121	29	55	41	2	360	691
28. 4.15	1	82	121	29	55	43	2	360	693
28. 8.17	1	82	121	29	55	43	2	360	693
29. 3.31	1	84	120	27	55	43	2	352	684
30. 7. 1	1	87	120	26	54	43	2	344	677
31. 4. 1	1	89	120	26	55	42	2	342	677
32. 4.10	1	89	121	25	57	44	2	343	682
33. 5. 1	1	90	120	25	56	45	2	344	683
34. 5.16	1	91	119	25	56	45	2	344	683

これによれば、開学当時 578 名であった教職員が、昭和 34 年 5 月現在では 683 名となり、10 年間に 105 名増である。また教官と事務職員との割合は、開学当時の教官 262 名・事務職員 316 名であったのが、現在は教官 339 名の 77 名増に対し、事務職員は 334 名の 18 名増にすぎず、両者はほぼ同数にちかい。

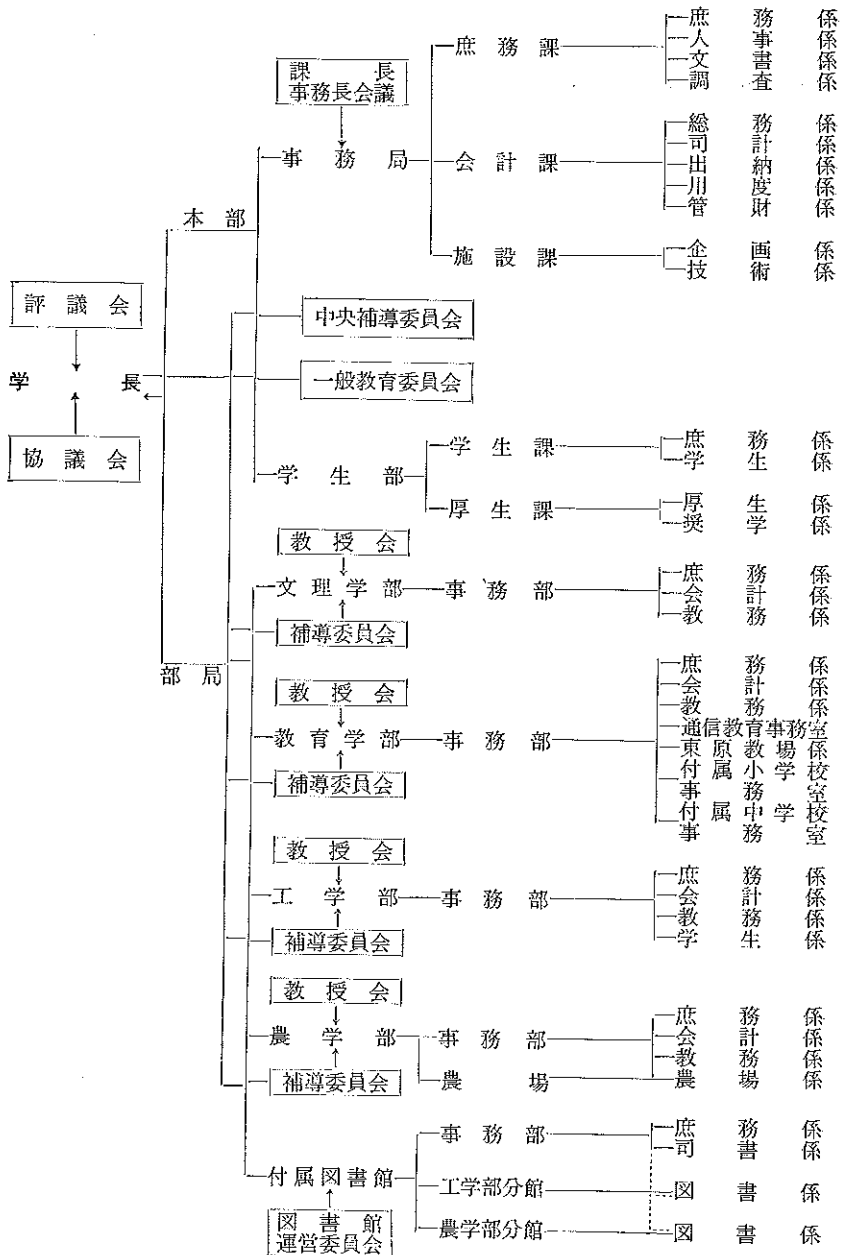
なお昭和 34 年 5 月現在の茨城大学の組織と運営機構はつぎの通りである。

## 組 織

### 1. 名称および所在地

部 局	組 織 概 要	付 属 施 設	所 在 地
本 部	事務局 { 庶務課 會計課 施設課 学生部 { 学生課 厚生課		水戸市渡里町 2127 (電水戸 4171~7)
		五 浦 研 究 所 澗 沼 臨 湖 実 験 所	北茨城市大津町 五浦 727 東茨城郡石崎村 中石崎字親沢
文 理 学 部	事 務 部		水戸市渡里町 2127
教 育 学 部	事 務 部	付 属 小 学 校	水戸市渡里町 2127 水戸市北三の丸 1 (電水戸 2043)
		付 属 中 学 校	水戸市愛宕町 1997 (電水戸 3379)
工 学 部	事 務 部		日立市成沢町 300 (電日立(2) 0104 多賀 0105 64)
農 学 部	事 務 部	付 属 農 場	稲敷郡阿見町 3998 (電阿見 16, 38)
付 属 図 書 館	事 務 部		水戸市渡里町 2127
		工 学 部 分 館 農 学 部 分 館	日立市成沢町 300 稲敷郡阿見町 3998

## 2. 運営機構図



歴代学長および部局長を表示すればつぎの通り。

学 長

昭和24年5月31日～昭和24年6月29日	(事務取扱)	関 泰 祐
昭和24年6月29日～昭和28年10月1日		鈴木 京 平
昭和28年10月1日～昭和33年9月18日		東 竜太郎
昭和33年9月18日～昭和33年12月26日	(事務取扱)	二 方 義
昭和33年12月26日～現在		都 崎 雅之助

文理学部長

昭和24年5月31日～昭和25年4月30日		関 泰 祐
昭和25年4月30日～昭和25年8月1日	(事務取扱)	鈴木 京 平
昭和25年8月1日～昭和27年12月31日	(事務取扱)	倉 橋 治 助
昭和27年12月31日～昭和31年6月1日		大 場 千 秋
昭和31年6月1日～現在		中 村 巳喜夫

教育学部長

昭和24年5月31日～昭和26年10月1日		斎 藤 儀 重
昭和26年10月1日～現在		二 方 義

工学部長

昭和24年5月31日～昭和33年12月26日		都 崎 雅之助
昭和33年12月26日～昭和34年3月1日	(事務取扱)	都 崎 雅之助
昭和34年3月1日～現在		真 野 克 巳

農学部長

昭和27年4月1日～昭和32年3月31日		田 中 貞 次
昭和32年3月31日～昭和34年3月31日		中 原 重 樹
昭和34年3月31日～現在		広 沢 吉 平

付属図書館長

昭和24年8月1日～昭和34年3月31日		小 川 泰
昭和34年4月1日～現在		大 場 千 秋

学生部長

昭和24年3月1日～昭和29年5月1日		沼 尻 源一郎
昭和29年5月1日～昭和32年5月1日		酒 井 清 一
昭和32年5月1日～現在		石 原 道 博

事務局長

昭和24年5月31日～昭和32年11月28日		橋 本 道 胤
昭和32年11月28日～昭和34年3月31日		田 中 米 喜
昭和34年4月1日～現在		藤 田 忠

## 第2篇 茨城大学の教育と研究

### 第1章 教科課程

#### 1. 一般教育

一般教育科目は新しい4年制大学の学科課程の根柢をなす科目であって、外国語、3系列（人文・社会・自然）、体育（理論・実技）の3つに分れる。体育4単位は必修で教育学部の担当、他の2つは文理学部の担当。

##### (イ) 外国語

外国語は、体育と同じく必修。これを3系列の人文科学の中に入れたのでは、語学ばかりを選択して他を履修しない学生と、外国語を避けてそれ以外の人文科学系列ばかりを学習するものとの2通りになるおそれがある。出発の当初、他の大学ではその弊が多かったようである。本学は、おそらく全国の大学中、最も早く外国語を3系列のわく外必修とする制度をしいたのであって、開学当初からこの方針を堅持して今日に及んでいる。

その履修については、文理学部のみでなく、教育・工・農学部に対しても、1・2年次生を対象としてクラス制をとり、講義の半分の単位、すなわち30時間1単位の基準によって、

文理学部学生 英語 10 単位以上、独（或は仏）語 8 単位以上

工・農両学部学生 英語 8 単位以上、 独（仏）語 6 単位以上

教育学部学生 英語 8 単位以上、 独（仏）語 4 単位以上

とする。

文理学部は初め英語、独語各8単位としていたが、それを英語、独（仏）語各9単位と改め、更に昭和32年英語10単位、独（仏）語8単位と改めた。

##### (ロ) 3 系 列

人文・社会・自然科学の3系列の中から各3科目を選択履修させることによつて、広い視野と知識、各般にわたる理解力を与え、語学・体育と相まって高い知性と豊かな教養とを身につけさせようとする。まさに新制大学のもつ著しい特色の1つである。

この履修を、入学の初め1、2年間に終らせてそれから専門に進むか（他大学の教養部、教養学部当たる）、それとも専門を学びながら4年間にわたって履修させるのがよいか、は開学当初からの問題であった。本学では文理・教育両学部は、卒業まで水戸で学修するから後者の方法もとれるが、工・農両学部は、入学の初めの1年間水戸地区に在学するだけで、2年次からはそれぞれ多賀、阿見において専門に入るのであるから、これに従うことができないし、わずか1年で、9科目36単位を取得し終ることも不可能である。そこで、1年次には文理・教育両学部の方法を準用し、英・独語と3系列の各系列にわたって順次に科目を組み換え、毎年4人づつの文理学部教官が多賀・阿見へ出張して主として2年次学生に対して授業を行っている。

また、3系列は「単に後期の専門課程に対する予備的なものではなく、専門科目と互いに相即相関の關係に立つべきもの」（基準）とされている。これをどのようにするか、もまた難問題たるを失わない。はじめ、一般教育といわず一般教養と称していた時には、3系列では一切概説を行わないことになっていた。それでは、どんな内容か。方法としては、アメリカで行っている Survey Course と Case History とのいずれかがよいとされた。ところがどの大学でも、いつか概説と内容が変わっていった。本学もまた然りであつて、そうなのは、専門の概説は専攻学生に対するもの、一般の3系列は非専攻学生に対する概説、とせざるをえない。そこで本学では、3系列のおのおのについて「……学部向」「……学科向」を指定することによって、講義内容に考慮を加えることとしている。

はじめ、1週2時間、1年間を通じて4単位としたが、27年から31年までの期間は、1週4時間の前期・後期各4単位として人文・社会系列を変更したことがある（自然系列は実験の關係上従来のまま）。しかし、32年度からは3

系列とも、もと通りの1週2時間、1年間4単位に復した。

なお、基礎教育科目について一言しておく。

大学教科課程の出発点となった「大学設置基準」は昭和22年7月8日に決定されたものである。その後、5たび改訂をへて、31年10月22日、文部省令第28号としての「大学設置基準」となった。その第6章第19条第2項に、はじめて「基礎教育科目」というものが現われた。これは「一般教育科目に関する授業科目のうち、その学部の専攻分野に関連のあるもの」を8単位に限って履修させることにより、専門の基礎を一般教育において学習させようとするものである。主として医学・歯学の大学に対してであるが、今後の一般と専門のあり方を示唆するものである。

#### (ハ) 体 育

体育は、1、2年次学生は必修である。講義は外国語のクラス別を準用し、実技は科目別とし、男女の区別を考慮し、また、不具・疾病などの場合は実技を講義で代えられることを認め、厳格に実施している。

## 2. 専 門 教 育

### (1) 文 理 学 部

文理学部には一般教育課程のほか、次のような11の専門課程がある。

(1) 哲学心理学課程 A (哲学専攻)

(2) 哲学心理学課程 B (心理学専攻)

(3) 史学課程 (史学専攻)

(4) 文学課程 A (国文学専攻)

(5) 文学課程 B (英文学専攻)

(6) 文学課程 C (独文学専攻)

言語学及仏文学

(7) 経済学法学課程 (経済学専攻)

社会学

(8) 数学物理学課程 (数学専攻)



(9) 物理学化学課程 A (物理学専攻)

(10) 物理学化学課程 B (化学専攻)

(11) 生物学地学課程 (生物学専攻)

## 地 学

「課程」というのは、例えば哲学心理学課程にあっても、これを習得しようとする場合には、当然哲学専攻・心理学専攻などに細分される。それをあえて「課程」と称しているのは、講座数・設備・教授定員などが旧制大学に比べてまだ不十分である、ということと共に、学問の細分化からくる弊害を指摘して新教育のねらいである「広い視野と豊かな教養」を日ざすものである。従って、履修においても、「専攻科目のほかに関連・自由選択科目が要求されている。

これは新制大学の新しい歩みを示すものである。しかし、旧制高校の「精深ナル程度ノ高等普通教育」が、もし新制大学の「一般教育」と代ったといえるならば、その上に位する専門科目は、当然「學術の蘊奥」を究めることをめざすものでなければならない。ところが本学は、入学試験は2期校に編入されており、文理学部入学生の学力も一時は逐年低下の傾向にあった。到底3年次から専門に入り、4年次までの2カ年間で専門知識を修めることは至難であり、むしろ不可能としなければなるまい。そこで学部規定(昭和27年4月1日施行)の改正が行われ、

第4条 専門科目は第2年次より履修することができる。

よそのままであるが、

第5条 専攻の選択は第3年次の始めに於いて学生の志望により教授会の議  
によって決定する。

の「第3年次の始め」を「第2年次の始め」と改めた。この改正は昭和32年である。以後これに従って専門の強化に努め、今日に至っている。

なお文理学部の卒業資格及び学士号資格の最低単位を示すと、次のようになる。

科目別	学士号別	文学士			社会科学士	理学士	備考
		心理学	漢国史 文学学	外国学			
科一般 教育	人文科学	12	12	12	12	12	各系列3科目
	社会科学	12	12	12	12	12	
	自然科学	12	12	12	12	12	
	計	36	36	36	36	36	9科目
外国語		18	18	18	18	18	英語10単位 独仏語のうち1科目 8単位
体育		4	4	4	4	4	講義及実技各2単位
計		58	58	58	58	58	
専攻科目		36	48	50	50	40	専攻科目は各専攻課程の科目中より 選択する(卒業研究6単位を含む)
関連科目 自由選択科目		32	20	18	18	28	(関連科目は各専攻課程に定められ た関連科目中より選択する 自由選択科目は専攻及関連外の科 目を選択する)
計		68	68	68	68	68	
合計		126	126	126	126	126	

また次の表は文理学部学生として適当な履修基準を、各年次及び各科目について便宜上配当したものであり、その数字は卒業資格及び教員免許状取得に必要な最低単位を示したものである。

年次	科目				専門科目	教職科目	計	備考
	一般教育科目	三系	外国語	体育				
1	24	10	2	36			36	
	24	10	2	36		4	40	
2	12	8	2	22	14		36	
	12	8	2	22	10	8	40	
3					36		36	
					40	(教育実習)3	43	
4					18		18	→卒業研究6単位含む
					23		23	→卒業研究6単位及び教職科目 に替えられる5単位を含む
計	36	18	4	58	68		126	
	36	18	4	58	73	15	146	

次に 11 の専門課程の学科目（講義題目）、単位数、関連科目などを表示する。その中で卒業研究はいずれも6単位必修で重視されているのが注目される。ただ各表にみる単位合計は、昭和34年度に用意されたものを示すに過ぎず、必修の単位を記したものではない。



## 2. 心理学専攻

講座	必修	講義題目	単位	関連科目
心理学	○	心理学概説	4	史 社 倫 人 生 統 教  文 育  会 理 地 物 計 統 計  学 学 学 学 学 学 学
	○	心理学史	2	
	○	社会心理学Ⅰ	2	
		文化心理学	2	
		民族心理学	2	
	○	実験心理学	2	
		心理学特講(宗教心理学)	2	
		心理学特講(精神分析学の発展)	2	
		心理学特講(言語心理学)	2	
	○	特殊問題研究	2	
	○	心理学テストⅠ	2	
	○	心理学テストⅡ	2	
		心理学演習Ⅰ	2	
		心理学演習Ⅱ	2	
		心理学演習Ⅲ	2	
	○	一般実験	2	
		教育心理学	2	
		児童心理学	2	
		青年心理学	2	
		教育評価	2	
	哲学概論	4		
	近世哲学史	4		
	精神衛生(集中)	2		
卒業研究			6	
単位合計			58	



#### 4. 国文学専攻

講座	必修	講義題目	単位	関連科目
第一 国文学	○	概説, 国文学史	4	英独仏言史倫哲心社 文 文 文 語 理 理 会 学 学 学 学 学 学 学 学
	このうち ○	特講 I 自照文学	4	
		特講 II 俳諧史	4	
		特講 III 洒落の研究	4	
		特講 IV 近代小説	4	
	このうち ○	演習 I 万葉集	4	
		演習 II 源氏物語	4	
		演習 III 父の終焉日記	4	
		演習 IV 一葉の日記	4	
	第二 国語学	○	概説, 国語学概説	
このうち ○		特講 I 日本文法史	4	
		特講 II 近代文体の形成	4	
		特講 III 国語研究史	4	
このうち ○		演習 I 平家物語	4	
		演習 II 徒然草	4	
第三 中国学	○	概説, 中国文学史	4	
	このうち ○	特講 I 唐詩の研究	4	
		特講 II 詩経の研究	4	
	このうち ○	演習 I 古文真宝	4	
演習 II 論語		4		
卒業研究			6	
単 位 合 計			86	



## 6. 独文学専攻

講座	必修	講義題目	単位	関連科目
備考参照		独文学史	4	文学, 哲学, 史学関係の諸講義と英仏語及び古典語などである。  <b>備考</b> 独文学を専攻しようとする学生は3年間に独文学講座で行う授業科目のうち講義(4単位のもの)5科目, 演習講読(2単位のもの)6科目を履修しなければならない。
		独文学序説	4	
		特講 古典主義文学	4	
		演習講読	2	
		演習	2	
		独語学概説	4	
		演習講読	2	
		特講 近代独逸文学	4	
		演習講読	2	
		演習講読	2	
卒業研究			6	
単位合計			36	

## 言語学及仏文学

講座	必修	講義題目	単位	備考
		近代言語学概論	4	
		フランス近代詩講読	2	
		仏文学講読	2	
		ギリシヤ語	4	
単位合計			12	



## 7. 経済学専攻

講座	必修	講義	題日	単位	関連科目
政第 経一	○	経 済 原 論	4	数 史 心 物 哲	学 学 学 学 学
	○	経 済 学	4		
		日 本 経 済 論	4		
		国 際 経 済 論	2		
		農 業 問 題 特 講	4		
	○	統 計 学	4		
		原 書 講 読 (英)	4		
		原 書 講 読 (露)	4		
政第 経二	○	日 本 経 済 史	4	備 考 経済学関係6科目のうち5 科目を選択必修。 法学関係科目のうち、憲法、 民法Ⅰ、民法Ⅱを必修とする。 ゼミナールは4年次卒業研 究を含み6単位とする。	
		欧 州 経 済 史	4		
		経 済 地 理 学 Ⅱ	4		
		日 本 経 済 史 ゼミナール			
		欧 州 経 済 史 ゼミナール			
		経 済 地 理 学 ゼミナール			
		経 済 地 理 学 ゼミナール			
政第 経三	○	経 済 政 策	4		
		農 業 政 策	4		
		社 会 政 策	4		
		財 政 学 総 論	4		
		財 政 学 各 論	2		
		経 済 政 策 ゼミナール			
		社 会 政 策 ゼミナール			
		財 政 学 ゼミナール			
政第 経四		原 書 講 読	4		
		金 融 論 Ⅰ	4		
		金 融 論 Ⅱ	4		
		商 業 学 概 説	4		
		商 業 品 学	4		
		商 業 学 特 講	4		
		金 融 論 ゼミナール			
		商 業 学 ゼミナール			
政第 経五	○	経 営 学	4		
		財 務 管 理	4		
		経 営 学 特 講	2		
		経 営 学 ゼミナール			

政第 経六		簿記学	4
		会計学	4
		監査	4
		原価計算	4
		原書講読	4
		会計学ゼミナール	
政第 経七	○	憲法	4
		行政法	4
		行政法特講	4
		政治学	4
		刑事法	4
		公法ゼミナール	
		公法ゼミナール	
政第 経八	○	民法Ⅰ	4
		民法Ⅱ	4
		民法Ⅲ	4
		民法特講Ⅰ	4
		労働法	4
		民事訴訟法	4
		私法ゼミナール	
		私法ゼミナール	
		私法ゼミナール	
集中		商法Ⅰ	4
		商法Ⅱ	4
	卒業研究	6	
	単位合計	172	

### 社会学

講座	必修	講義題目	単位	備考
政第 経九		社会学概論	4	
		社会学特講(民族社会学)	4	
		社会学特講(マス・コミュニケーション)	4	
		社会調査	4	
		集落人口地理学(人文地理学Ⅲ)	4	
		地誌学Ⅰ(世界地誌)	4	
		地誌学Ⅱ(日本地誌)	4	
		地誌学演習Ⅰ	4	
		地誌学演習Ⅱ	4	
	人文地理学演習	4		
	単位合計	40		

### 8. 数 学 専 攻

講 座	必修	講 義 題 目	単 位	関 連 科 目
数 第 学 一	○	解 析 学 I	4	物 熱 電 物 量 化 天 物 彈 原 性 論 学 学 一 学 験 学 学 学 核 氣 磁 氣 第 理 実 験 力 実 象 子 学 力 数 力 文 理 性 子
	○	解 析 学 II	2	
		解 析 学 特 講 I	2	
		解 析 学 特 講 II	2	
		解 析 学 特 講 III	2	
		解 析 学 演 習	2	
	○	微 分 方 程 式	4	
		微 分 方 程 式 論	4	
数 第 学 二		数 学 通 論	4	
		解 析 学 ゼ ミ ナ ー ル		
	○	集 合 論	4	
	○	複 素 変 数 函 数 論	4	
		函 数 論 演 論	2	
		函 数 論 特 講	4	
		積 分 方 程 式 と 変 分 学	4	
		函 数 論 ゼ ミ ナ ー ル		
数 第 学 三	○	代 数 学 I	4	
	○	代 数 学 II	2	
		抽 象 代 数 学	4	
		代 数 学 特 講 I	2	
		代 数 学 特 講 II	4	
		代 数 学 演 習	2	
		代 数 学 論	2	
	代 数 学 ゼ ミ ナ ー ル			
数 第 学 四	○	幾 何 学 I	3	
	○	幾 何 学 II	2	
		幾 何 学 演 習	2	
		幾 何 学 特 講	4	
	○	確 率 論 及 統 計 学	4	
	幾 何 学, 確 率 論 統 計 学 ゼ ミ ナ ー ル			
物 理 学 一 第 一		力 学	6	
物 理 学 一 第 二		彈 性 力 学	2	
物 理 学 二 第 一		物 理 実 験 学	4	
	卒 業 研 究		6	
	単 位 合 計		98	

### 9. 物理学専攻

講 座	必修	講 義 題 目	単 位	関 連 科 目
物理学 第一	○	力 学	6	解 析 学 微 分 方 程 式 論 複 素 函 数 論 代 数 学 天 文 気 象 学 概 論
	○	量 子 力 学	4	
		原 子 核 (隔 年)	2	
	○	物 理 教 学	4	
		物 理 数 学 演 習	2	
		弾 性 力 学 (隔 年)	2	
		物 理 学 ゼ ミ ナ ー ル (I)		
		物 理 学 ゼ ミ ナ ー ル (II)		
物理学 第二	○	物 理 実 験 学	4	備 考 (隔年)とあるのは次の題目 を隔年に交互に行うもので ある。 (相 对 論 (来 年)) (原 子 核 (本 年)) (流 体 力 学 (来 年)) (弾 性 力 学 (本 年))
	○	熱 学	4	
		結 晶 物 理 学	2	
		応 用 電 気 学	4	
物理学 第三	○	電 磁 気 学	4	
		光 学	4	
		物 性 論	4	
	○	原 子 物 理 学 序 論	2	
共 通	○	物 理 実 験 第 一	2	
	○	物 理 実 験 第 二	2	
化 学 第 三		物 理 化 学 概 論	4	
		物 理 化 学 特 講 I (化 学 熱 力 学)	4	
	卒 業 研 究	6		
	単 位 合 計	66		

# 10. 化学專攻

講座	必修	講義題目	単位	関連科目
化学第一	○	無機化学概論	4	解微分方程式 確率論 原子物理 動物植物 植物物種 植物物種
		無機化学特講 I	4	
		無機化学特講 II	4	
		分析化学	4	
	○	定性分析実験	2	
	○	定量分析実験	2	
化学第二		無機化学実験	1	
	○	有機化学 I	4	
	○	有機化学 II	4	
		有機化学 III	2	
		有機化学特講 I (生化学)	2	
		有機化学特講 II (理論有機化学)	4	
	○	有機化学実験	1	
化学第三		生化学実験	1	
	○	物理化学概論	4	
		化学熱力学	4	
		物理化学特講 I	2	
		物理化学特講 II	2	
		物理化学特講 III (量子化学)	2	
	○	物理化学実験	1	
化学共通		化学工学(集中)	2	
		応用化学(集中)		
		放射化学(集中)		
		化学演習	2	
物理学第二 物理学共通 物理学第三		物理実験学	4	
		物理実験第一	2	
		電磁気学	4	
	卒業研究	6		
	単位合計	70		

# 11. 生物学専攻

講座	必修	講義題目	単位	関連科目
生物学第一	○	系統動物学	4	地質学概論 天文気象学概論 鉱物学概論 確立論及統計学 地史学総論 古生物學 東亜地史学 海洋学概論 有機物学
		動物形態学	2	
	○	動物生態学	2	
		腔水動物学	2	
		動物学特講	2	
		系統動物学実験	2	
		動物形態学実験	1	
	○	動物生理学	4	
		動物発生学	4	
		動物生理学実験	2	
		動物発生学実験	1	
生物学第二	○	植物系統学	2	備考 必修科目に関する注意 (イ)第1及第2講座より○印を各2科目以上 (ロ)遺伝学、細胞学の何れか1科目 (ハ)臨海臨湖実習・植物野外実習の何れか1科目
		植物分類学	4	
	○	隠花植物学	2	
		植物形態学	2	
		植物学特講	2	
		植物分類学実験	2	
		植物形態学実験	1	
	○	植物生理学	4	
		植物生態学	2	
		植物生理学実験	2	
		○	遺伝学	
	遺伝学実験	2		
	生化学(集中, 隔年)	(2)		
○	細胞学	2		
○	臨海臨湖実習	1		
○	植物野外実習	1		
	○	生物学実験	1	
卒業研究			6	
単位合計			68	

地 学

講 座	必修	講 義 題 目	単 位	備 考
地 学		地 質 学 概 論	2	鉱物学修了者 鉱物学修了者 層位学修了者 鉱物学聴講者又は修了者 岩石学聴講者又は修了者 古生物学聴講者又は修了者 層位学聴講者又は修了者 地学(一般)聴講者又は修了者 地学の専門科目聴講者又は修了者 毎年何れか一講義開講の予定 各研究課題に関連する専門科目聴講者又は修了者但し地学の全科目修了者にのみ単位の認定を行う。
		鉱 物 学	2	
		岩 石 学	2	
		鉱 床 学	2	
		地 史 学	4	
		古 生 物 学	2	
		応 用 地 質 学	2	
		層 位 学	2	
		天 文 気 象 学 概 論	4	
		鉱 物 学 実 験 演 習	1	
		岩 石 学 実 験 演 習	1	
		古 生 物 学 実 験 演 習	2	
		層 位 学 実 験 演 習	2	
		地 質 巡 検 I	1	
		地 質 巡 検 II	2	
		海 洋 学 概 論 (集 中)	②	
	地 球 物 理 学 概 論 (集 中)	②		
	天 文 学 特 講 (集 中)	②		
	特 別 研 究	{ 鉱 物 学 } { 地 質 学 } { 古 生 物 学 }	4	
単 位 合 計			41	

専攻生は、学則第 54 条に基づく制度で、昭和 29 年 12 月 23 日に取扱要項が施行され、期間を 1 年とし、専攻 2 科目 8 単位以上、研究論文 6 単位を課して、深度の学力充実をめざす。規程は昭和 31 年 4 月 1 日に改正され今日に及んでいる。その数は下表の通り。

年 度	文学科	理学科	政経学科	計
昭和 29 年	2	2	4	8
30	6	6	8	20
31	9	2	4	15
32	4			4
33	9	2	1	12
34	3		1	4

年度によって甚しい増減がある。就職状況の良・不良もその原因の 1 つであるが、激減の理由は何よりも高校 1 級免許状のことである。すなわち昭和 31 年 2 月 8 日文部省告示第 2 号で、文理学部のうち、史学・国文・物理・化学・生物・経済の専攻生で所定の単位を修得したものに対しては、高等学校教諭 1 級普通免許状が与えられることとなった。これにより、該免許状を取得した専攻生は 12 人に達した。ところが、その後、免許法から専攻生が取除かれたので、専攻生入学者が激減したのである。文理学部としては、この制度を發展させ、専攻科設置を希望しているが、まだ実現に至らない。本学の専攻科は、工・農両学部だけに設けられている。

認定講習は、教育学部に協力して文理学部教官の殆ど全員が、毎年このことに当たってきた。本県教育の質的向上に寄与すること多大なものがあるといえよう。

通信教育は、文理学部に設けていないが、教育学部に協力して、本学部教官が援助している。

教育実習は、教育学部と一体となり、協力して事に当たっている。もと 3 週間 3 単位であったが、のち 4 週間 4 単位に改めた。昭和 34 年度からは、協力校を小中学校に依頼するのは教育学部教生にかぎり、文理学部は協力校を県立高



々に求め、3週間3単位に復した。

聴講生は、高校卒業、またはそれと同等以上の学力を有するもので、特定の科目の聴講を希望するものには、所定の手続きをへて選考の上、一年間を限り聴講を認めることがある。入学者の多くは、教員免許状関係の理由によるものゝ、その数は下表のように年々増加している。

年 度	人 数	年 度	人 数
昭和 26 年	1	昭和 31 年	5
27	1	32	9
28	1	33	11
29	6	34	9
30	4		

## (2) 教 育 学 部

教育学部の教科課程は、初等・中等教育科に2大別され、さらにおのおのが1年・2年の2課程に分けられる。これは、大学基準と教育職員免許法などの基準に基づきながら、本学独自の教育方針と特色とをおりこんで編成されたが、学部の整備充実と免許法の改正などに伴い、たびたび修正された。この間を大別すると3期になる。

第1期は、昭和24年から同26年まで。開学草創の時期で、大学基準と、昭和24年5月31日公布の教育職員免許法及び同年11月1日公布の同法施行規則などによって編成され、本学独自の特色があまりみられず、学生の選尺が大幅に認められた。

第2期は、昭和27年から同29年まで。教育方針の確立と第1期の反省とに基づき、本学独自の特色が相当考慮された時期。例えば、初等教育科の教科専門の教材研究の必修単位が、免許法の6教科必修の規定にも拘らず、小学校の全教科である8教科の教材研究を必修としたこと、中等教育科の教科科目を整備したことなど。

第3期は、昭和30年から同34年まで。昭和29年6月3日の教育職員免

許法及び同年 10 月 27 日の同法施行規則の改正に伴い、学部の教科課程も大幅な修正をみ、独自の方針がかなりおりこまれて整備された時期。例えば、教材研究を教科専門から教職専門に入れたこと、初等教育科を各教科別・教育学教育心理学の 2 専攻課程に分け各専門の学力を強化したこと、中等教育科の各最低必修単位数を免許法の基準をはるかに上回って規定したこと、通年教育実習制度を新しく採用したことなど。

第 1 表 単 位 基 準 表

		期 課程 必選別		第 1 期教科課程		第 2 期教科課程		第 3 期教科課程							
				24年—26年		27年—29年		30年—34年							
(1)	初等教育科	教科専門	必修	18	30	24	34	教科別専攻		教育心理専攻					
			選択必修	12				16	26	16	16				
		教職専門	必修	15	25	14	25	32	44	42	54				
			選択必修	10								12	12		
		自由選択		25	25	15	15			0	0				
卒業研究				4	4			4	4						
計			80		78			74	74						
課程	中等教育科	教科専門	必修	30	40	20	30	30	40	18	28	32	46	28	38
			選択必修	10		10		10		10		14		10	
		教職専門	必修	15	20	15	20	16	20	16	20	28	20	18	20
			選択必修	5		5		4		4		2		2	
		自由選択		20		30		14		26		4		4	12
卒業研究						4		4		4		4	4		
計			80		80		78		78		74		74		
(2)	初等教育科	教科専門	必修	12	15	14	17			8		8			
			選択必修	3											
		教職専門	必修	16	20	12	20	28	4	28	32				
			選択必修	4											
		自由選択			5		3				0				
卒業研究															
計			40		40				40						
課程	中等教育科	教科専門	必修	15	20	10	15	15	20	10	15	20	24	16	20
			選択必修	5		5		5		5		4		4	
		教職専門	必修	15	15	15	15	14	16	14	16	16	16	16	16
			選択必修	0	0	0	2	2	2	2	0	0	0	0	16
		自由選択		5		10		4		9		0		4	
卒業研究															
計			40		40		40		40		40		40		

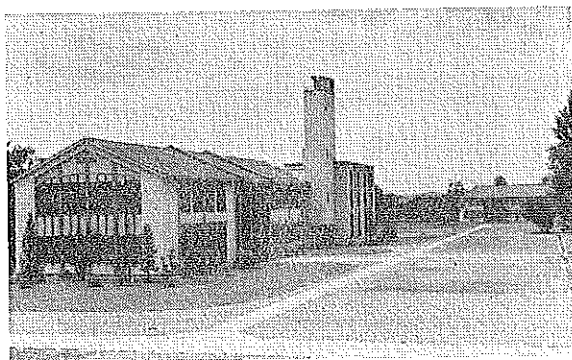
# 第 3 編 附属図書館の沿革と活動

## 第 1 章 水戸地区本館

### 1. 発 足

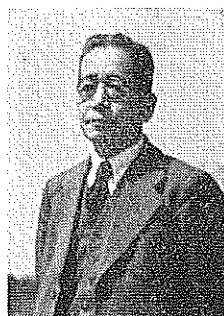
戦後の新学制による新制大学設置準備のため、県に設けられた茨城大学設立成会では、中央図書館建設の必要は何の異論もなく認められ、ほぼ現在の敷を予定し、設計が進

られていた。  
昭和 24 年 5 月に大  
が発足し、同年 8 月  
初代館長として文理  
部教授小川泰が任命  
された。旧水戸高等学  
の蔵書と館員 7 名で  
水高の焼け残りの教



茨城大学附属図書館

を充当し、図書館業務を開始した。1 部の図書は、現水戸地区内 1 号館の一隅に移し、開架式の閲覧室とした。このいかにも戦後らしい状態が、昭和 26 年 8 月まで続いた。



小川初代図書館長

本館設置とともに、工学部に多賀分館を設け、当時土浦にあった教育学部土浦校（旧茨城師範学校）、及び友部にあった友部校（旧茨城青年師範学校）には、それぞれ暫定的に本館分室の形の事務室がおかれた。

館長は東京の諸大学をつぶさに視察し、新制大学図書館のあり方についての構想をまとめ、また大学当局

及び教官も積極的に協力し、ようやく今日の姿を形造る基礎ができていった。

当時の方針として特記すべきは、和洋図書を通じ、すべて日本 10 進分類法 (N.D.C.) による新しい分類制度を採用したこと、図書の管理上、中央図書館主義の原則をたてたことであろう。

昭和 25 年 5 月 13 日、本館の建築工事が安藤組の手によって起工された。かねて用意された設計図について、館側の希望により、書庫を 3 階から 4 階に改め、視聴覚教室（これは恐らく全国国立大学にさきがけるものであったろう。）を設けるなど、相当大幅な変更を加えたが、若干不満な点が残らないでもなかった。工事は順調に進み、同 26 年 8 月 20 日に竣工し、9 月 6 日第 1 閲覧室で、茨城大学設立期成会長であった友末知事、鈴木学長、以下多数の来賓、関係者が集まり、盛大な竣工披露式が挙行された。

本館建築の概要はつぎの通りである。

構造 閲覧室及び事務室など

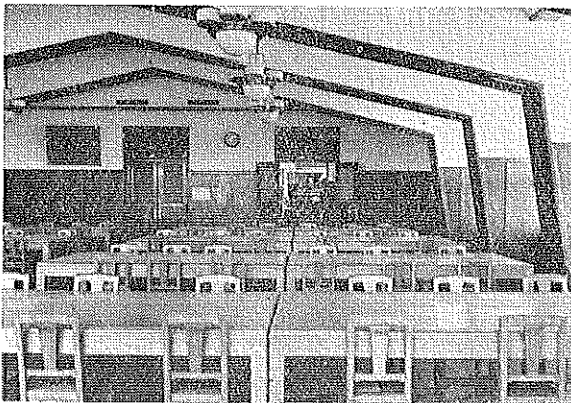
木造 2 階建 200 坪、延 400 坪

書庫及び塔（時計台）

鉄骨コンクリート 4 階建 54 坪、延 216 坪

工期 起工 書庫 昭和 25 年 5 月 13 日

閲覧室 昭和 25 年 9 月 11 日



付属図書館第 1 閲覧室

竣工 書 庫 昭和 26 年 5 月 10 日

閲覧室 昭和 26 年 8 月 20 日

工事費（付帯工事および備品費を含む）

書 庫 8,203,671 円

閲覧室等 10,893,315 円

建設者 茨城大学設立期成会

工事請負者 株式会社 安藤組

## 2. 整 備 時 代

本館の建築落成をもって、茨城大学図書館はいよいよ整備の時代に入ったと  
える。以下、事項別にその後の経過をふりかえってみよう。

(1) 蔵書数 開館当時の蔵書数は、水戸高等学校関係 34,790 冊、茨城師  
学校関係 4,215 冊、茨城青年師範学校関係 2,604 冊、多賀工業専門学校関  
約 15,000 冊、期成会の寄付によるもの 7,203 冊（昭和 26 年度受入れ）、  
の他の寄附によるもの 715 冊（主として茨城師範関係、昭和 28 年度受入  
）、更に昭和 27 年農学部移管当時の蔵書 4,512 冊を加え、計 69,039 冊で  
った。その後逐年躍進的に増加し、34 年 5 月 1 日現在、本館、両分館を  
わせて、和書 121,208 冊、洋書 28,119 冊、計 149,327 冊、和洋雑誌 1,718  
を数えるに至った。

(2) 圖書の分類 設立当時の蔵書のうち、茨師、青師の分は少数であつた  
で、ただちに日本 10 進分類法によって分類換えを行った。しかし水高の蔵  
は、その後毎年夏期休暇など、平常業務の合間にこの作業を行ってきたが、  
で洋書は全部分類換えを完了し、現に和書約 17,000 冊を残している。こ  
作業の完了は、今後なお相当の期間を要すると思われる。農学部分館の蔵書  
、すでに移管前から N.D.C. によって分類されていたが、工学部分館の蔵  
は、本館と同様の方式による分類換え作業を、最近ようやく着手したところ  
ある。

(3) 図書目録 圖書のカード式目録は、本館では事務用、閲覧用、とも

に、著者目録・分類目録を作成し、検索の便をはかっている。また分館の目録カードも、昭和 30 年以降は本館において作成し、全館の方式統一につとめている。

印刷目録の作成は、大学図書館の義務であろうとの考えから、大学設立以後の分について、特に洋書の目録は逐年刊行する意図で、昭和 26 年度末から同 28 年度まで 3 回にわたって発行した。しかし、経費の捻出が困難であり、その割に利用価値が少ないためこれを中止した。その後、月報発行などの段階を経て、現在は四季報として、全学 1 本の「増加図書通報」が発行されている。

(4) 奉仕事務並びに利用状況 開館以来、図書館の使命が奉仕にあるという観念は、よく全館員に徹底し、教官に対しては、緊急必要の図書・雑誌を研究室に分置して研究の便をはかり、学生に対する態度も、まず遺憾なく行なわれていると思われる。このことは、学生からの投書などによっても明らかである。ただ学生の図書帯出については、開館当初は、蔵書数の不足と職員配置の関係から、数年間実施できなかつた。しかし、次第に蔵書数も増加し、従米の受付を廃止し、職員の配置を工夫することなどによって、まず昭和 27 年卒業研究の学生を対象に帯出制を採用し、つぎに一般学生に週 1 回、土曜帯出、月曜返納の制度をはじめ、昭和 33 年からは週 2 回、期間 1 週間の帯出制を採用し現在に至っている。

夜間開館は、むしろ理想とするところであり、しばしば学生からの要望もあったが、費用、特に人員の点から実行できず、今日に至っている。ただ毎試験期には、その直前約 2 週間程度の夜間開館を行っている。

(5) 視聴覚教室 開学当初、まだ学内にテーブコーダー、幻燈機などがなかったころ、すでに図書館視聴覚教室では、これらの器機を設置し、それ以来講義講演などに、きわめて活発に利用されている。

図書館の対外活動は、とりたてていうほどではないが、昭和 26 年から 30 年にかけて、学外の人をも加えて製本講習会を開催した。また昭和 31 年以降は、連年、教育学部と協力して、司書教諭講習会を行っている。

(6) 資料室 開館以来、地方大学の使命にかんがみ、郷土資料を収集展示

5計画をもっていた。昭和 29 年度、当時の教官閲覧室を2階書庫入口付近現在位置に移して、そのあとに展示ケースを入れ、資料室を設けた。しかし資料そのものは、予算の関係で入手が困難である。現在、数量的にも豊富なく、受入れ整理も完全でない。

7) 研修文庫 昭和 26 年、当時事務職員に図書の帯出閲覧を認めたい事を考慮し、部局もちよりの予算をもって研修文庫を設置し、週 2 回の貸出を行った。この制度は、今日まで継続活用されているが、昭和 32 年度以降職員厚生経費によって支出されるよう改められた。

### 3. 運営ならびに現況

図書館運営の大綱について審議するため、昭和 26 年「茨城大学図書館協議規則」が制定され、同年 9 月に会合して一応の館則などを決定した。しかし正式に施行の運びにいたらず、館長会議をもって、規則に基づくものにか本館・分館の関係などについて協議してきた。昭和 31 年、前規則を廃し「茨城大学図書館運営委員会規程」を定め、それからは年約 1 回、この委をを開催し、予算問題などについて、協議を行っている。なお本館は、一面は水戸地区両学部の分館の性格をもつ関係上、文理、教育両学部から選出さ各 4 名の委員と館長を加えた水戸地区図書委員会 月 1 回会合し、主として一般図書の選定などを行っている。その他必要に応じ、館長、分館長会議、事務関係者会議を行う。また、工学部・農学部両分館でそれぞれ図書委員会をもって運営上の重要問題を負している。



大場図書館長

昭和 34 年 4 月 1 日、第 2 代館長として文理学部大場千秋が就任した。本館職員は、事務長以下 名。管理、目録、閲覧の 3 係に分れる。農学部・工学部においても、それ分館長以下、図書係をおき、相互に協力して大学図書館機能の発展に努力している。

本館分館の関係は、1本の体系で運営することが理想と考えられる。昭和28年文部省発行の「大学図書館改善要項」にも、この点が強調されている。本学図書館設立にあたっては、分館名に地名を冠したのは、その趣旨によるものである。しかし、この理想の実現は、各学部の所在距離及び人事、予算、対教室関係などによって、解決困難な事情が介在するから、全国的にみても、これらの難問題を完全に克服している大学はきわめて少ない。本学でも設立当初、本館と分館は実質的にはほとんど関連がなかった。その後ようやく密接となり、近年では図書分類上の本館における統轄、「図書通報」の共同発行、事務連絡会議など、きわめて円滑に行われている。なお昭和27年農学部の設置とともに、阿見分館が設けられ、同32年規則改正により、多賀分館は工学部分館、阿見分館は農学部分館とそれぞれ改称された。

以上、主として本館を中心としてのべたが、以下工学部・農学部両分館についてのべることにする。



# 第5篇 学生の生活と活動

## 第1章 寄 宿 舎

本学の寄宿舍は、大学教育の一環として、その共同生活の実践を基盤とする  
究の場である。性格、境遇、専攻などを異にする学生が、切磋琢磨して個性  
伸張をはかるとともに、共同生活の意義と経験を自得し、真に民主的社  
会人としての素質を養うことを目的として設置された。

名 称	地区	収容者別	収容可能数	所 在 地
く 哉 寮	水戸	男	236	水戸市愛宕町
は ば ら 寮	水戸	女	68	水戸市渡里町茨城大学構内
し ゃ ゃ 寮	多賀	男	324	日立市油縄子町
あ げ 光 寮	阿見	男	70	土浦市阿見町、茨城大学農学部内

### 1. 水戸地区寄宿舍

#### (1) 男 子 寮

茨城大学構内の旧兵舎付属建物3棟を改造し、昭和24年5月、本学が創設  
れると同時に設けられ、それぞれ東寮、中寮、西寮と称した。同年8月には  
食堂も開設され、よりよい寮生活を送るため、その整備を急いだ。

その後、構内に男子、女子両寮が併置されていることに対する教育上の問題  
が指摘され、愛宕町水戸第3校舎（付属中学校）地区に移転の計画が進めら

昭和29年4月、旧水戸連隊・42部隊（工兵）兵舎2棟を改造し、それぞ  
愛宕第1寮、第2寮と称して移転が行われた。ただし、第2寮は予算打切り  
ため、建物の半分を改造しただけであった。

昭和30年12月、第2寮残余未改造分の改造を終了し、昭和31年4月か

ら愛宕寮に寮生を収容した。

一方、寮内に食堂を設置する要望も高まり、昭和 31 年 5 月には、構内旧兵舎付属建物を食堂として移築改造した。

既存の茨城大学構内の寄宿舎は、男子寮が愛宕町に移転後、東寮は若干補修を加えそのまま女子東寮として転用、中寮は解体され体育教官室となり、西寮は内部を改造し学友会部室として転用、現在に至っている。



水戸地区女子寮

## (2) 女 子 寮

女子寮は男子寮と同じく、構内旧兵舎付属建物 1 棟を改造、単に女子寮と称して昭和 24 年 4 月、開学と同時に開設された。

さて、戦後の児童激増に伴って義務教育教員が不足したが、教育学部には 2 年の短期

養成課程が設けられた。入寮希望者の女子学生は、特にこの課程修得のために増加の傾向を示し、1 棟だけではとうてい収容しきれなくなったので、男子寮が愛宕町に移転後、東寮をそのまま女子東寮に切替え、管理上、女子寮を女子第 1 寮、女子東寮を女子第 2 寮と改称、現在に至っている。

昭和 31 年、男子寮生専用の愛宕寮食堂が設置されると、今までの構内の寮生食堂を、僅か 70 名前後の女子寮生を対象とした食堂として単独経営することは困難であるとともに、他方、間借生活を余儀なくされている学生の食生活の安定をはかることが肝要であることに着目し、現在の学生ホール東側に接続して学生食堂を新設した。この食堂の具体的運営は、利用学生の自治機関に任せることにしたが、女子寮生、一般学生男女の別なく利用者に開放した。昭和 31 年 12 月には、「茨城大学学生食堂管理運営要項」が設定され、これに基づいて利用学生の自治団体「共営会」が発足した。

近年、安定した経営状態を示してきたが、女子寮生の立場から独自の食堂の

要求が強まっており、このことは、学寮運営の一環として今後の課題である。

### (3) 寄宿舍の現況

昭和 33 年 5 月、寮生日ごろの愛称にもとづき、公式の書類に記載する場合を除き、愛宕第 1 寮を水哉寮東寮、第 2 寮を水哉寮北寮、女子寮をうばら寮東、女子東寮をうばら寮西寮とそれぞれ呼称し、学内一般文書に使用すること公認した。水哉は水戸に因み、「孟子」離婁篇からとったもの、うばらは、茨波に因み、いばらの別名である。

吼洋は、大太平洋に咆吼する意気を示したもので、霞光は、霞カ浦に因む和光・明・栄光を待望したものであろう。

現在は全寮制度ではないが、学生の修学条件から考えると、寄宿舍の必要性指摘される。従って入寮選考に当っては、自宅からの通学困難なもの、経済に恵まれないもの、団体生活である寮生活に適應するもの、という基準のものに、大学（学生部）と寮生代表がそれぞれ別個に面接して選考する。入寮を可された学生は、男子は 1 年次全員水哉寮に、2 年次からは、工・農両学部それぞれ日立、阿見にわかれてゆく。

水哉寮 1 年次の間は、1 室 4 人制で、高年次寮生と起居をともにする。高校卒業して大学生となり、新しい誇りと自信をもつこの時期は、年令的には心発展のもつともさかんな時期であって、健全な人間形成の場として果たす役はきわめて大きい。

水哉寮では、常勤職員 1 名が事務を管理し、その他は厚生課で寮務を担当している。寮生の自治を通じてその教育的効果を期待しているわけであるが、大当局の果たすべき任務はいよいよ重大で、再検討すべき問題がきわめて多い。

名称	所管学部等	収容性別	延べ坪数		延坪数の内訳							畳数 (ベッド数)	基準定員
			居室	食堂調理室	浴室	集会保健室	事務室	便所	廊下その他				
水哉寮	学生部	男	坪 969.0	坪 506.8	坪 95	坪 0	坪 94.3	坪 8.1	坪 12.4	坪 252.4	坪 224(床)	坪 224	
水哉寮	学生部	女	坪 247.2	坪 139.5	坪 0	坪 0	坪 15.5	坪 0	坪 24.2	坪 67.9	坪 150	坪 72	
水哉寮	工学部	男	坪 1,738.0	坪 978.0	坪 117.5	坪 29	坪 0	坪 18.0	坪 62.0	坪 533.5	坪 865	坪 324	
水哉寮	農学部	男	坪 502.0	坪 227.0	坪 59.5	坪 23	坪 31.0	坪 0	坪 9.0	坪 152.5	坪 70	坪 70	
合計			坪 3,456.2	坪 1851.3	坪 272.0	坪 52	坪 140.8	坪 26.1	坪 107.6	坪 1006.3	坪 1,329	坪 710	

#### (4) 管 理 運 営

寄宿舎開設当時は、学生部が直接運営したが、ようやく寮生の自治意識も高まったので、大学が寮生に対して委任できる範囲内で、寮委員会の運営に任せることとなった。

昭和 27 年 2 月、「茨城大学寄宿舎規程」がつけられたが、内容が不備のため、学生部修正案を中央補導委員会で数回審議した結果、昭和 30 年 4 月、「茨城大学寄宿舎規則」が制定された。その間、寮生は学生部の指導と助言のもとに、寮内生活全般にわたる自治規約を起草し、昭和 30 年 2 月、それぞれ水哉寮規約、うばら寮規約が制定された。

ついで昭和 33 年 5 月には、大学と学寮委員会との円滑な連絡をもちながら学寮管理運営の適正化をはかり、寮自治の向上発展を助育するすことを目的として、「水戸地区学寮協議会規則」が設けられた。

ところが協議会発足の期におよんで、当規則は寮生の自治権を圧迫するものであるから撤回されたいとの要求が寮委員会から提出され、大学としては思わぬ障害にぶつかった感じであった。

昭和 33 年 6 月、学部補導委員も出席し、寮生代表に対して石原学生部長から、協議会設置の趣旨、規則成立に至るまでの経過や内容について説明が行われ、今後の対策などを協議した。ついで同年 12 月、学生部長、学部補導委員と新規学寮委員らが協議したが、席上この規則に対する寮委員会の反対意見が表明され、活発な討議が行われたが意見の調整はできなかった。

このころ寮生側では、昭和 33 年 2 月の全国国立大学学生部長会議において、文部省から「国立大学寄舎管理運営要項(試案)」が示された事実をとらえ、これは各大学の寮管理規程を全国的に統一しようとするもので、教育が系統的な国家統制の道へ通じるものと解し、各大学と歩調をそろえ統一的反対運動を起こそうとしていた。このことは、同年 12 月に開かれた第 4 回関東甲信越寮連総会においても討議され、全寮協を中心に各地域の結合をはかる結果となった。本学でも、他大学の応援をえて強力な反対運動が展開された。なかでも、33 年 2 月 4 日の学内抗議集会とデモ行進は、自治会委員、他大学の参加もあ

、て約 200 名に達した。

## 5) 学寮の自治活動

### 1) 活動の背景

開学と同時に開設された本学寄宿舎は、沼尻初代学生部長の管理の下に、水戸高等学校時代の伝統をうけついで、自治寮「星嶺寮」の名称で発足した。終戦後の不安定な経済生活は、学生生活にも大きく波及し、勉学や生活状態にいじるしい変化をもたらした。

占領軍の教育自由主義政策に伴い、学園にも民主化闘争が起った。20年(1945)10月、水戸高校時代の校長排斥運動に端を発した運動は、同盟休校とってあらわれ、その後の学生運動に大きな影響を与えた。文部省は21年1月、「文部省教職員学生生徒の政治活動について」次官通達を発したが、学生自治組織は拡大強化の一途をたどった。

21年(1946)5月1日には、学生メーデーが開かれ、学生民主戦線統一が議決され、反動政府打倒、人民政府樹立などを要求した。このころから、学生は生活権確保の旗印を標榜して、学内問題から政治運動へ転向し、ようやく反権力、反政府的傾向を示し、その運動も尖鋭化してきた。

昭和28年6月、「学生の住居認定に関する自治庁通達」がだされた。これ全国10数万学生の選挙権の行使を規制するばかりでなく、事実上不可能にする反動政策であるとし、寮生大会を開いて反対を決議し、通達撤回を要求し、吼洋寮では多賀町、星嶺寮では渡里村選挙管理委員会にそれぞれ再三抗議したが物別れとなり、やむなく水戸地方裁判所に渡里村選挙管理委員会を相手って法廷闘争にもちこんだ。全学連もこの問題をとりえて、8月には自治庁に選挙権反対闘争指令を発し、10月には本学寮生代表も参加し、東京において選挙権擁護全国学生決起大会を開いた。この闘争は29年10月、最高裁の「学生の選挙権は居住地にあり」との判決により解決をみたが、この問題をきっかけとして一般学生、とくに寮生の政治意識を高める結果となった。

昭和29年の教育2法案反対闘争は、全国的には過激な学生運動もあらわれ、社会からの批判の声も強まった。30年9月の全学連第7回中央委員会(愛

知大)では自己批判が行われ、「学生よ、学園に帰れ」のスローガンのもとに、政治闘争から日常生活闘争に転換した。本学でも、学内の基盤にたって運動を進めることとなった。たまたま女子寮の風紀問題と結びついて、26年10月ごろから教官の追放運動となった。

31年2月、大蔵省は31年度予算編成に当って授業料の値上げ方針を決定した。これには反対デモなどが全国的に展開され、全学連第8回中央委員会では、これを契機に再び政治闘争へふみきることを確認、これが当時のサンフランシスコ体制強化の客観情勢に呼応し、砂川基地反対、原水爆禁止運動、沖繩基地反対闘争となった。寮委員会も寮生大会の決議に従って代表を中央へ送るようになり、寮内の生活問題をはなれて、寮外の統一的学生運動に積極的に参加していった。

#### ロ) 自治活動の諸相

反政府的傾向をたどる学生運動は、学生部に対する対立的感情をひき起し、学寮自治活動に対する指導助言ということにさえ、思想善、導自治権の侵害だと反ばくし、両者の話し合いはだんだん物別れ状態に終わることが多くなった。また、寄宿舍規則、学生共通規則に対する独善的解釈は、大学側が考えている大学の方針の中での自治ということをし、しばしば逸脱する行動としてあらわれた。学生部の援助や協力的態度に対しては、とかく政府の保守反動政策につながるものと解し、警戒的な高姿勢をとる傾向がみられた。これは今日もお学寮管理運営上の大きな悩みであるが、この不信な態度は33年ごろから高まりをみせている。

33年11月の警職法反対運動は、たまたま秋の寮祭に、そのスローガンとして大々的にとりあげられた。このような政治的スローガンが、寮祭の内容とどのように結びつくのかは問題があるが、飛躍的論理がようやく支配的になってきた。いずれにせよ、寮祭そのものが、学内自治活動の規範をこえて、学外政治運動の一環となつてきたのは、最近の特徴である。

まへの修学地選挙権行使運動と期を同じくして、寮生の自治権確立と生活擁護とが、これからの運動の中心であった。そのため、各地区の学寮連合体結

への機運が起こり、各ブロック（北海道、東北、北陸、関東甲信越、東京、海、関西、中国、四国、九州）の全国的連合体として、28年11月京都大学において全日本学生寮自治会連合（全寮連）が結成された。つづいて各ブロック連合体結成が具体化され、29年12月、山梨大（芙蓉寮）で開かれた関東甲信越大学学生寮代表者会議には、本学寮からも代表が参加、翌年6月には、千大（浩気寮）において関東甲信越（地区）学生寮連合（関寮連）が発足。ここに学寮自治活動の全国的統一活動が始った。

当然、本学寮に対しても寮連加盟の要請があったが、学外団体に加入する場合は、学生共通規則により学生部長の許可が必要である。当時、大学側は寮連設置の趣旨、活動目的、全学連との関係などについて疑義があったので、慎重審議の結果、その時期をまつこととなった。寮生側はこれを不満として、正加盟を再三要求した。一方、大学の許可をまたずに、各大学持回りの関寮連会及び全寮連大会には、自主的に代表を送るようになり、実質的な参加、活を開始している。

また、寮連活動の中では、各大学寮生間の交流と親睦とを目的として、関寮にトラベルビューロー専門委員会を設け、全寮連指定寮として、大学の寄宿を寮生の宿泊機関と考えるような活動もあらわれた。その一端は、毎年受生の学寮宿泊、外来者の宿泊などをめぐって、現在もお問題を残している。

地区寮連結成の動きは県内にも波及し、本学寮（水戸・工・農地区）と鯉淵壱（東茨城郡内原村）を組織母体とした茨城県学生寮協議会（県寮協）結成準備が整い、31年11月、水哉寮（水戸）で結成大会が開かれた。

寮生側は数年来のいろいろな要求実現のため、31年1月30日、水哉、うば両寮合同の寮生大会を開き、学寮協規則撤回を中心に「10項目の要求」なるものを学生部長に提出した。2月4日には文理学部自治会が支援の声明文を示したが、また他大学の応援も加わってきた。

大学側では、これらの諸要求を中央補導委員会、評議会にかけるなどの努力を盡し、学寮管理並びに教育的見地から適当であると確認された事項については

要求をいれ、その他の事項については引き続き検討が行われている。

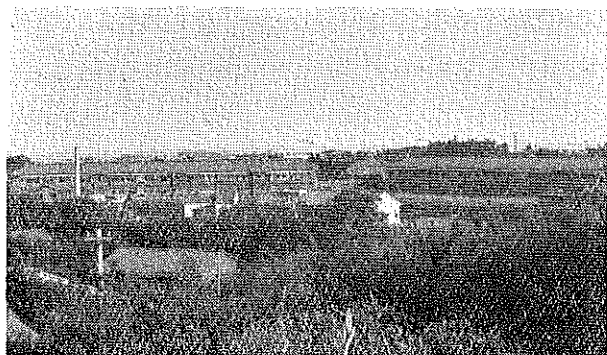
以上、学寮の 10 年間の回顧を行ってみたが、茨城大学内の 4 つの寮には、それぞれの伝統と特色がある。寮生が寮活動としてとらえている問題は、どちらかといえば寮生自身の身近かなことよりも、政治的なことが多く、またつねに自治会や学外団体と関連をもつて活動する傾向がめだっている。

## 2. 工学部寄宿舎

工専時代からひきつがれた寄宿舎吼洋寮は、現在茨城大学工学部 2・3・4 年次学生 235 名、及び茨城大学工業短期大学部学生少数を収容し、自治寮として、茨城大学工学部長の管理下に、寮生から選出された運営委員会によって運営されている。

寄宿舎は各寮とも 2 階建である。昭和 20 年 7 月 17 日の艦砲射撃によって、本館の一部その他に被害を受けたほかは、建物には何の異状もなかったが、昭和 32 年 11 月 16 日午前 0 時 40 分頃突然炊事場から発火し、食堂、炊事場、浴場、ボイラー室、渡り廊下など合計 395 坪余及び食堂、炊事場、備付物品などを焼失したことは、開寮以来の大きな災難であった。

北寮は同年 11 月、茨城大学工業短期大学部の校舎にするため解体し、学部構内に移築した。



工学部吼洋寮全景（山上より望む）



本館には事務室、医務室、応接室、会議室、図書室、娯楽室、売店ホールなどがあり、寄宿舎の管理的建物として利用されていたが、昭和 33 年 8 月その一部延べ 180 坪を、前年焼失した食堂、炊事場、浴場などを建築するため、この材料として取り壊した。現在、学生寮は東、西及び南寮を工学部学生が使用し、別館を工業短期大学の学生が使用している。

東寮及び南寮は 12 室、西寮は 14 室あり、居室の総数は 38 室、他に別館室がある。東、南、西の各寮は 10 坪の板敷の勉強室と 10 畳 2 間の居室(寝)からなっており、現在居室の総面積は 921 坪である。収容定員は 324 名あるが、現在は 307 名の学生が入寮している。

昭和 33 年 12 月、食堂、炊事場、浴場がもとの位置に移築され、食堂は 72 の板敷の広間で全寮が同時に食事することができ、炊事場は 45.5 坪で採光備も良く、浴場は 29 坪でタイル張りのものが完成した。

昭和 26 年 9 月、寮務課が廃止されてからは、学生係の一部として学生係長下に事務員 1 名、守衛 2 名、用務員 2 名、賄夫 4 名がそれぞれ寮の仕事に従っている。

寮の運営は自治寮として、寮生選出の運営委員会により運営され、大学もれにできる限りの助言指導をするなど、その運営に協力し万全を期している。

### 3. 農学部寄宿舎

本学部の東方 2 キロにある旧海軍気象学校建物を、茨城大学教育学部が改造し、女子寮として使用していたものを、同学部の水戸地区移転に伴い、茨城県農科大学寄宿舎として借用、昭和 26 年 4 月から霞光寮と称し、50 名収容能の寮として発足した。

昭和 27 年 4 月、国立に移管され本学農学部となり、国費要員 3 名を配置し理運営に当たっていたが、同建物は老朽甚だしく、施設の不備、また入寮希望の増加と、周囲の要望に応え、昭和 33 年 3 月、構内の北東側に、2 階建の在寄宿舎の改築をみた。これは元霞カ浦航空隊司令部本館で、延 502 坪、各

部屋2段式ベッド，2～4名で70名を収容できる。庭園に囲まれ，日当たりもよく，食堂，洗面所，浴場，娯楽室，応接室などあり，環境はまことに良好である。

寮生の自治により運営され，寮委員会は，寮長，副寮長，書記のほか，会計，体育，文化，備品衛生の委員が各1名，食堂委員が4名。任期は半年，前期，後期に改選され，寮祭やいろいろのレクリエーション，ハイキングなど，時季に応じて催される。国費によって炊事夫2名，小使1名を専属配置し，寮生活の向上につとめている。

## 第2章 学 友 会

### 1. 水 戸 地 区

#### (1) 学 友 会

学友会は学生の全人教育の一環として、昭和26年5月、「文化、学術、体育各分野に於ける健全な発展と学生生活の充実を計り、以て民主的にして自由なる学園の建設擁護に邁進せん事を目的及び使命とする」（規約第2条）全学の組織体として発足した。会務運営の基本的方針は、あくまで学生の自主的運営に委すこととし、会長には象徴として学長を推すが、会務運営の責任は、キャプテン会で互選された委員長に負わされた。また各部会の顧問教官は、各部会の学生団体が任意に選ぶもので、会務運営を側面から助言する立場をとる。会務の総括執行機関は、キャプテン会で互選された委員長、副委員長2名、会計委員2名、庶務委員3名の委員会により行われる。会務の運営上重要な事項は、各部会責任者で構成されたキャプテン会において審議決定するが、必要に応じて学生大会にはかる。当時の活動状況を表示すればつぎの通り。

学生課外活動概況

昭和27年2月現在

	部会名	集会研究会	出 版 物	実 績 行 事
学 科 研 究 部	物 理 研 究 会	定期週1回2時間 その他随時研究		市内小・中学校における生徒児童の疑問調査、教材研究、研究発表会年2回
	理 科 学 研 究 会	定期週1回2時間 その他随時研究	不定期発行、年20回 4頁。論文随筆掲載	研究発表会、年2回
	生 物 研 究 会	定期週1回2時間 その他随時研究	不定期発行 「実験用テキスト」 「動植物採集目録」 「採集の葉」	筑波山、奥日光、奥久慈、男体山動植物解剖標本作成大学祭行事展覧会出品
	教 育 会 研 究 会	定期週1回2時間 その他随時研究	定期発行月刊「教研」 論文随筆	研究発表会年2回 第1回教育映画会(26年6月)

学 術 研 究 部	国語国文学研究会	定期週1回 その他随時研究	定期発行「国語国文」 論文随筆	研究発表会 国語国文学第1回講演会 (26年6月)
	地質研究会	定期週1回 その他随時研究	定期発行年2回 「地学質研究方法の 手引」	野外実験基礎教育年1回、県 内外各地野外実験第1回野外 実験(26年7月)大学祭行事展 覧会に出品(26年11月)
	歴史学会	定期月2回4時間 その他随時研究	定期発行、月刊論文 学術界ニュース「応研 月報」	史学講演会、年2回 研究発表会
文 化 部	文芸部	随 時	定期発行季刊「芝生」 論文、随筆、小説、詩、	
	映画研究会	定期週1回 その他随時	定期発行 「映研月報」 「鑑賞ガイド」	定期映画、鑑賞会、第1回映画 会(15年9月)大学祭行事映画 会(26年11月)市内各映画館の 割引券発行
	美術部	随 時		関東大学教育美術連盟展、学 内展、マチス展、鑑賞会、開学 祭美術展開会(25年10月)大学 美術展覧会(26年11月)
	写真部	定期月2回 その他随時		学内写真展、新入生用写真、大 学新聞用写真、開学記念写真 展(25年10月)、大学祭行事写 真展(26年11月)
	演劇部	随 時		開学記念演劇会(25年10月)、 演劇研究発表会第1回公演 (25年11月)満劇研究発表会第 2回公演(26年6月) 「こども劇場」第1回公演 (26年8月)
	音楽部	定期週1回 その他随時		第1回定期発表会(25年7月)、 第2回定期発表会(26年1月)、 開学記念音楽会(25年11月)、 定期レコードコンサート大学 祭行事音楽会(26年11月)
運 動 部	山岳部	定期集会 不定期集会		北関4 東大学対抗競技定期戦 年1回。北関東、奥日光、日光 湯沢スキー、北アルプス、奥久 慈登山、袋田男体山ハイキン グの会主催
	陸上競技部	定期週3回3時間 その他随時		国体、県民大会、北関東4 大学 対抗競技定期リーグ戦、関東 学生選手権大学に活躍、第1 回学内マラソン大会(26年12 月)
	排球部	定期週4回2時間 その他随時		北関東4 大学対抗競技定期リ ーグ戦、県総合選手権大会、 市長杯争奪戦、国民体育大会 に参加

県	ソフト ボール部	定期週2回 その他随時		春季秋季県下一般大会に参加 県下各団体戦に参加
	水泳部	期間中定期 その他随時		北関東4大学水泳大会、県民大会、全日本県予選、県選手権大会に参加
	サッカー部	定期週2回 その他随時		県下大会、北関東4大学リーグ戦、県下総合選手権大会に参加
	卓球部	定期週3回 その他随時		団体、県民大会、全日本選手権大会に参加、北関東4大学リーグ戦に優勝
	体操部	定期週4回3時間 その他随時		国体、県民体育大会、対栃木戦に次々活躍、北関東4大学定期戦に優勝、
	軟式 野球部	定期週2回 その他随時		北関東4大学リーグ戦に優勝 その他県下練習試合に参加
	硬式 野球部	定期週6回3時間 その他随時		25・6年度北関東4大学リーグ戦に優勝、全国新制大学関東甲信越大会に優勝、全国新制大学野球大会に参加
	籠球部	定期週6回3時間 その他随時		関東大学新リーグ、北関東4大学リーグ戦に優勝、県下一般選手権大会に優勝
	ラグビー部	定期週3回2時間 その他随時		北関東4大学リーグ戦、県下各団体戦、日製日立定期戦に参加
	軟式 庭球部	定期週6回4時間 その他随時		北関東4大学リーグ戦に団体及び個人優勝
県	新聞部	定期週6回5時間 その他随時	定期発行 月刊 「茨城大学新聞」	昭和25年12月に発足し、1月から発行、正確な報道と文化啓蒙を期し建設的使命のもとに著々充実し、12月第12号を発行
	応援団			全面的課外活動の積極的援助、運動競技の応援
	正風会	定期週13回時間 その他随時		定期座禅週2回、埼玉県平林寺において修業
県	Y.M.C.A.	定期週2回2時間 その他随時	定期発行 月刊 「ぶどう」	聖書研究会、講演会、第1回聖書研究会(27年1月)
	弁論部	定期週1回2時間 その他随時		県内4市対抗雄弁大会出場学内学術研究発表雄弁大会、県下高校雄弁大会主催(27年1月)

学生赤十字奉仕団	定期週 2 回 その他随時	定期発行 月刊 「団報」	茨城赤十字奉仕団に発展すべきもので、本学はそのカレッジユニットとなる、社会奉仕、日赤事務奉仕、社会福祉施設慰問、青少年赤十字運営助力
----------	------------------	-----------------	--

なお、上記団体以外の各団体（文化系……語学研究会、心理研究会、地理学研究会、教育研究会、数学研究会、化学研究会、法学研究会、英会話研究会、無線研究会、家政部、書道部、英米文学研究会、体育系……硬式庭球部、ボクシング部、ハンドボール部）においてもそれぞれ活潑な活動を展開。

学友会は発足以来健全な発展をとげてきたが、昭和 28 年 4 月、これらの部会に属さない学生も相当あり、これら学生の意思を反映してこそはじめて全学生の意思として運営され、設立の本旨にもそうとする理由から、クラス会を認めた。このことは、すでに当時から台頭しつつあった学生自治会結成の第一歩であったが、会務運営の大勢は、依然として学生課外活動を中心とした健全中正な動きをみせていた。

学友会を中心とする学生課外活動は、逐年めざましい発展をつづけ、加入者は昭和 27 年度において、水戸地区学生総数 2,237 名中 1,931 名 (86.5%)、部会数も文化部 15 (570名)、学術研究部 15 (734名)、体育部 20 (592 名)、学友会直轄団体として新聞局 (17 名)、応播団 (18 名) に達し、無所属学生は 306 名で全学生の 13.5% にすぎなかった。しかし会務の運営費はようやく不如意となり、これに反比例して加入学生の個人負担は逐次増加した。そこで昭和 28 年度、新入生から 1 人当 1,000 円 (年 250 円) を増加し、入会金 200 円をふくめて、3,000 円とした。年間約 100 万円の増加である。

その後、昭和 32 年に文理、教育両学部学生自治会が正式に発足し、自治会費として別に文理学部 800 円、教育学部 700 円を徴収することとなったので、学生の負担力を考慮して、両学部とも各 2800 円に値下げした。工・農両学部学生は、自治会がないので従来通りとし、現在に至っている。

#### 大学協例会議

課外活動の実施運営上、大学と学生諸団体との接触は各部会では顧問教官、学友会とは学生部を通じて行われたが、昭和 28 年 4 月に大学協例会議が設け

られた。この会議は学友会役員会が主催し、大学からは学生部長、関係課長、部長らが出席して、毎月1回定例に開かれ、当面の諸問題を協議し、厚生補給業務運営上、多大の成果をあげている。

### 三地区合同会議

学友会は、文理、教育両学部が所在する水戸地区を主体として発足したが、工学部では多賀工専以来の学生自治会があり、また農学部にも学友会があった。学友会是对内、対外的に大学一本の団体として出発したのであるから、当然工学部自治会、農学部学友会をも包含して、その間いろいろ連絡調整をはかる必要があった。そこで昭和28年度から正式に3地区合同会議が発足し、運営の円滑を期することとなった。現行の学友会規約は、その当時改正されたものである。

### 学友会改組と学生自治会結成の気運

昭和29年、初代学生部長沼尻源一郎教授が辞任し、教育学部の酒井清一教授が第2代学生部長に任ぜられた。このころから活発化してきた学生自治活動は、同年12月、大学に対する「当面の要求」となって現われ、一部の学生は所在の学友会を改組して、茨城大学学生自治会に改め、文化、学術、体育の3部門からなる学友会を、学生自治会中央執行委員会の下部機構に位置づけようとした。この構想は、当時全学連が地方大学の学友会に対する指導方針であることが明らかとなったので、本学でも補導委員会において10数次にわたり慎重審議の結果、これら目的及び方向を異にした学生有志からなる団体を新たに各部ごとに学生自治会として認め、大学の教育責任と管理責任の範囲内においてこれを補導し、学友会は従来通りの課外活動を中心とした学生団体として存続させることに決定した。過去10年を顧みて、学友会の危機はこの時期と思われるが、この渦中にあった酒井学生部長、林学生課長、学部補導委員及び学友会役員らの苦勞は並々ならぬものがあった。

### 主要な学友会活動

開学祭 本学は昭和24年5月31日に創立された。これを記念する文化、学術、体育各方面の行事である。第1回は昭和25年9月23日（秋分の日）に茨

城会館で、文部省、茨城県フランス映画協会後援のもとに映画会（「悪魔が夜来る」その他）、また同月 21 日は学友会演劇部第 1 回公演（「二十日鼠と人間」）があった。その後、第 2 回、第 3 回と回を重ねるにしたがい、また活動の内容範囲もようやく充実拡大し、映画、演劇のほか文化講演会、絵画、写真展、また学術研究発表会、学術講演会、さらにソフトボール、バレーボール大会などを開催してきた。この行事は、新入生をむかえた年度最初の全学的行事であるから、学友会役員会もつねに工夫苦心をかさねている。

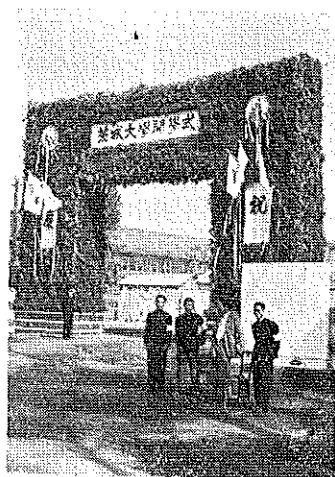
**関東甲信越地区大学体育大会** この行事は関東甲信越地区（東京都を除く）国公立大学における「学生スポーツの健全なる普及発達を図り、あわせて相互の親睦に資する」（体育協議会規約第 3 条）ことを目的として発足した。第 1 回は昭和 27 年 10 月 25・26 の両日、本学が当番校となって文部省後援、関東地区大学体育協議会主催の下に、千葉、群馬、新潟、信州、埼玉、東京水産、宇都宮、山梨、横浜国立、同市立各大学及び本学の 11 大学、学生教職員 1,516 名が参加して盛大に行われた。その後、第 2 回新潟、第 3 回埼玉、第 4 回宇都宮、第 5 回千葉、第 6 回信州、第 7 回群馬の各大学で行われ、今年の第 8 回は横浜国立、同市立・東京水産 3 大学が共催の予定。第 1 回は陸上競技以下 9 種目、参加学生 1,392 名であったが、昭和 34 年度の第 8 回大会では、おそらく 15 種目、参加学生 2 千数百名に達するであろう。本学では、第 1 回は全 9 種目に学生 200 名が参加、卓球（男子）に優勝した。その後種目の増加に伴い、毎年 230～250 名の学生が参加、第 2 回は卓球（男子）と軟式野球、第 4 回はラグビー、第 5 回は柔道、剣道、水泳、体操（女子）、第 6 回は硬式野球、水泳、軟式庭球（女子）、バレーボール（女子）、第 7 回は硬式野球、サッカーにそれぞれ優勝し、つねに指導的地位をえて今日に及んでいる。この大会は、当番大学の学長が会長、その他の学長が副会長、各大学学部長、学生部長、事務局長が参与、それに幹事、顧問若干名をもって構成する関東甲信越地区大学体育協議会が運営の大綱を決定して主催する。事業細部の運営は、その下部機構である当番大学学生部長を委員長、学生課長、体育主任教官、及び次年度当番大学本部課長を副委員長、関係大学体育教官を常任委員とする実行委員会がこれ



こ当る。この大会は逐年順調な発展をとげ、学生課外活動に大きな役割をはたしているが、毎年参加希望種目がふえ、本学でも、優秀な実績を収めている弓首、レスリング、ボクシング、ハンドボールなどは参加させたい種目である。一方、これを主催する当番大学としては、運動場、体育館などの施設、宿舍、交通その他整備のために多大の費用と労力を費す結果となり、ようやく各大学とも本大会の本質とそのあり方について反省し、真剣な検討を開始している。本学は昭和 36 年度に、各大学を 1 周して第 10 回大会の当番校となるが、この問題は来年度における学生部業務運営の中心課題となるであろう。

大学祭 この行事は、例年 11 月初旬を中心として催され、開学祭、関東甲信越地区大学体育大会とともに学生課外活動の華として内外から高く評価されてきた。学生は、大学祭を通じて文化、学術、体育の各分野における平素の研究成果を内外に発表し、その厳正な批判をうけて、今後の向上発展に資そうとする。第 1 回は昭和 24 年 11 月 5 日、本学構内グラウンドの整備完了を機会に、県市民多数を招待し、学生、教職員が一体となった体育祭の形で開催された。午前は合同体操、学部対抗の軟式野球、ソフトボール、バレーボール、バスケットボール、庭球、卓球及び陸上競技戦とし、午後はレクリエーション中心の種目であった。

その後、本学教育内容の整備充実と学生課外活動の躍進とは、大学祭の規模と内容がいよいよ充実した。水戸、多賀、阿見 3 区ごとに、内容、規模、日程などに多少の差はあるが、文化面では美術、音楽、演劇、雄弁などの各種大会、学術研究面では



開学祭（水戸地区）  
（第 1 回大学祭を同時に開催）

経済、法律、教育、地理、歴史、物理、化学など、人文、社会、自然各方面の研究会、講演会、また体育面では各部会紹介をふくめ、レクリエーションを主体とした体育祭が催されている。しかし、このような大学祭も、開学以来の経過

を顧みると、日程と行事をどのように配置すべきか、大学祭実施のための休講（現在は2日半）は本質的にどうあるべきか、大学祭が学生教職員を一体とすれば、運営の主体性を学生におくだけでよいか、等々の本質問題が残されている。

### 学生緑化推進委員会

学生の手で学園を緑化し、明るく、清く、美しい、勉学環境を整備しようとする気運は、昭和28年末から学園緑化募金運動として台頭した。翌29年5月、全日本学生平和会議に学友会から代表を選出することについて、学生間に賛否両論の対立があり、代表選出を時期尚早とする温健派学生が中心となって、学園の緑化運動を提唱した。たまたま建設省国土開発局の提唱する全国「緑の週間」行事が直接の口火となり、学園緑化募金運動が展開された。これは中央補導委員会の議題ともなり、教職員・学生一体となって推進すべしということになった。

この運動が一段落すると、学生側は「学生緑化推進委員会」を結成し、同時に大学側も学生団体と密接な連絡のもとに、昭和30年5月、各学部長、事務局長、図書館長及び本部各課長を委員とし、学生部長を委員長とする「学園緑化推進委員会」が発足した。当初の学園緑化計画は、学生の希望をいれ、3カ年計画であったが、諸種の事情により、計画第3年次からあらためて整備5カ年計画に変更し、今年度は計画第4年次にあたっている。緑化資金は、毎年度初め「緑の週間」と前後して学生緑化委員会が行う募金と、新生生の協力による学園緑化資金の寄付金（1人100円）が基礎となる。大学の援助は、むろんこれに数倍するわけであるが、緑化募金をめぐっては、茨大入試をあきらめた1女高生の涙ぐましい献金などもあり、今後ともこの協力体制の発展が期待される。緑化はやがて植物園化となり、学園美化、環境整備となって実を結ぶであらう。

### （2）新聞局・応援団と吹奏楽団

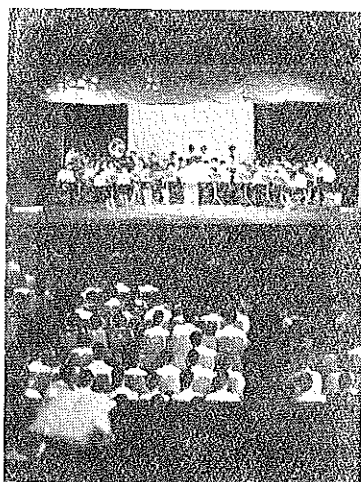
新聞局 新聞局は、はじめ新聞部といったが、公正中立の立場から、学友会所属の各部会とはやや異なった存在として発足し、「茨城大学新聞」を原則と

して毎月発行している。従来は学友会から一定の補助をうけていたが、新聞の生格上独立採算性が望ましいので、昭和 30 年度から自由購読制を予約制に改めた。なお、昭和 32 年の学部学生自治会の成立に伴って、学友会の直屬的地位から学友会と学生自治会の両者に直屬するという形式に改められた。しかし昭和 30 年全学新に加盟以来、とかく学生の政治活動面を重視する傾向がみうけられる。大学新聞の使命は、十分反省検討すべきであろう。

応援団 学友会直屬団体としての応援団は、各部会から選ばれた代表により構成され、学友会から一定の予算配付を受ける。

その活動は、主として関東甲信越地区本育大会、地区 4 大学大会などの対外試合において、選手の手当、宿舎、輸送の世話などもしている。

茨城大学吹奏楽団 この楽団は、昭和 3 年はじめ、石原学生部長の肝入りで誕生し、教育学部音楽科下野米教授の熱心な指導により内容、外観とも一応プラスバンドとしての体裁を整えるようになった。



茨城大学吹奏楽団

。楽器は、大部分が文部省の学生厚生指導特別助成費 100 万円により、3 年計画で購入されるもので、昭和 35 年は完成年度に当る。その活躍は学内外から大いに期待されている。現在は、学生部の直屬団体となっている。

#### 茨城大学吹奏楽団楽器購入一覧

	昭 34.5 現在	昭 34 度購入	昭 35 度予定	完成目標
楽器	13	8	(13)	(34)
ケース類	36	51	(24)	(110)
金額	432,930 円	317,000 円	(342,000円)	(1,091,930 円)

## 2. 工 学 部

現在工学部には 11 の運動部、6つの文化部があるが、ぎっしり詰った毎日の学課の間をぬって、それぞれのクラブ活動を楽しんでいる。また学友会が主催して毎年春と秋の2回、柔道・野球・籠球・卓球・庭球等のクラスマッチが行われ、学生が楽しみに待つ大きな行事となっている。

それと同時に最近では山岳競技と称して各クラスから何名かの選手を出し、工学部玄関前から出発、各自好きなコースを選んで高鈴山頂上まで登山し、選手の総所要時間の少ないクラスを勝とする行事が加えられ、学生の間に変人気がある。

なお学友会予算は学生数の関係で若干変ることもあるが、33年度予算は次の通りである。

33 年度 学友会予算 総額 230,000 円

### 各部配当額

総 務	34,025 円	ス キ ー 部	3,000 円
自 動 車 部	28,000 "	山 岳 部	12,000 "
柔 道 部	25,400 "	陸 上 競 技 部	6,300 "
ラ グ ビ ー 部	23,000 "	写 真 部	14,300 "
野 球 部	10,800 "	音 楽 部	12,800 "
蹴 球 部	10,350 "	映 画 研 究 部	525 "
籠 球 部	9,000 "	語 学 研 究 部	4,000 "
卓 球 部	8,000 "	聖 書 研 究 部	3,000 "
庭 球 部	10,000 "	美 術 部	7,000 "
水 泳 部	8,500 "		

## 3. 農 学 部

昭和 27 年 7 月、茨城県立農科大学が国立移管、茨城大学農学部となって、農学部学友会が生まれた。

県立時代は、庭球、野球、演劇など主として同好会的なものであった。しかし、農科大学の特徴はよく生かされ、なかでも年に1度の収穫祭は、学生のもっとも大きな行事として、盛大に行われた。

## 第4章 生活実態調査

### 本学における学生生活実態調査の経過

新制大学の創設にともない、学生の厚生補導業務を担当する学生部が設置され、厚生補導の適切な方策を樹立するための基礎的資料を得る手段として、学内の生活実態調査が広く行われるようになった。本学においては、はじめ新入生を対象とする実態の調査を基幹として、文部省が計画した諸調査に協力して生活実態の把握につとめてきた。

戦後の政治的にも経済的にも変動の甚しかった昭和28年頃までは、国民生活全体が極めて不安定であって、学生生活も必然的に動揺と窮乏の姿を反映していた。

昭和29年、文部省の学生生活実態調査の一環として、学生の年間生活費の動向および傷病発生の状況についての調査を行った。この調査は、水戸地区に在籍する学生を対象とするものであったが、標本抽出法による比較的組織的なものであった。

その後、世間で、もう戦後ではないといわれるほど、国内の諸情勢も安定してきた上に、厚生補導の任務に関する再吟味の機運も起ってきたので、昭和31年11月、酒井学生部長を中心に、本学独自の計画になる組織的な研究調査を始めるべく準備がなされた。昭和32年5月、学生部長の更迭があったが、前学生部長は、5月就任早々、調査企画委員会を組織した。林学生課長を中心として委員会は、調査項目を決定し、実施計画を立て、同年6月1日から生活実態調査を実施した。この調査は、全学生を対象として、標本抽出法により100名を選び、調査票を配布して記入させ、回収したものであった。その方法など相当改善すべき点は多かったが、学生の生活実態を把握するための組織的調査としては、最初のものであった。その調査結果によって後に述べるよう

に、本学学生の特長性を示す事実が明らかになった。

学生部においては、それ以後、隔年毎にこの種の調査を継続することになり、実施の時期、方法、内容を再検討してきたが、富岡学生課長を中心に、昭和 34 年実施の調査計画が目下進行中である。

### 調査結果の要点

調査項目は、生活環境、経済的生活、健康度、読書傾向、課外活動などに関する 12 項目からなっていた。昭和 32 年 5 月 1 日現在、在学生総数 3,103 名のうちから 1,000 名を無作為抽出して調査対象としたが、調査票の回収できたものは 923 名で、回収率は 94% であった。調査結果の主要な点をあげると、次のとおりであった。

家庭状況 学生の出身地別にみると、標本数 923 名中、58.6% までが、本県出身者で東京、福島、栃木、北海道の順に全国から学生が集っていた。特に工・農両学部においては、他府県出身者の比率が大であった。

これらの学生の家庭における職業別は、かなり多種多様であったが、農業の 30.6% がもっとも多く、公務員 15.7%、会社員 14.2%、教員 13.3%、商業 10.9%、その他 15.3% となっていたが、学部別にみると、教育学部と農学部では、農業・林業が多く、文理・工両学部は俸給生活者の家庭が多かった。

家庭の収入を適確に把握することはできなかったが、学生生活の基盤をなすもので、その影響するところが大きいので、その結果をみると、平均年収 277,143 円（月均 23,000 円）であった。年間 26 万円～30 万円が一番多

家庭の年収

学部	年収											計	標本平均 (円)
	10ま 万円 で	15ま 万円 で	20ま 万円 で	25ま 万円 で	30ま 万円 で	35ま 万円 で	40ま 万円 で	45ま 万円 で	50ま 万円 で	51以 万円 上	不 明		
文 理	10	13	21	32	23	12	22	8	16	24	1	182	298,576
教 育	23	63	66	64	80	41	47	16	26	27	14	467	255,960
工	3	16	24	22	23	11	21	13	15	34	5	187	289,700
農	1	3	11	12	15	6	14	2	8	8	7	87	319,500
計	37	95	122	130	141	70	104	39	65	92	27	923	277,143

、ついで 21 万円～25 万円，16 万円～20 万円，36 万円～40 万円の順に  
 っていて，約 48% が 21 万円～40 万円の所得階層であった。これは学生  
 の学資の支出に大きな影響を及ぼしていることは，見のがすことのできぬこ  
 であつた。

住居 学生の住居を，自宅，学寮，間借，下宿，親戚知人宅などに分類して  
 ると，自宅通学者が 58% で圧倒的比率を示し，学寮 19.2%，間借 14.6%，  
 下宿 5.1%，その他 3.1%となつていた。特に教育・文理両学部は県内身者が  
 りるので，自宅通学の比率が大であつたのに反して，工・農学部は学寮，間借  
 の比率が大きかつた。寮施設の小規模である農学部は，阿見町という所在地特  
 事情と合せて，他学部部に比べて間借比率が大ききことが注目すべき点であ  
 った。

学生個人の居室の広さは，平均 3.9 畳で，東京に在学する学生からみると，  
 とりがあるように思われた。居室は学生の勉学の場として，自由な生活空間  
 があるが，同居者の有無についてみると，40%の学生は同居であつて，22.9%  
 に一室に 3 人以上同居であつた。学寮生活をしてゐた学生が 19% であつたか  
 ら，3 人以上の同居者を学寮生活者と考えると，約 17% は間借，下宿も 2 人  
 の共同生活であると推定された。この点から考察すると，学生の生活が経済的  
 ゆとりのないことを反映してゐた。

同 室 者 数

人数 学部	0	1	2	3	4	5 以上	計	平均
文 理	135	25	6	10	5	1	182	0.55
教 育	290	85	26	40	20	6	467	0.78
工	86	20	13	55	11	2	187	1.42
農	50	12	3	15	7	0	87	0.93
計	561	142	48	120	43	9	923	0.89
百分率	60.8	15.4	5.5	13.0	4.7	1.0	100	

学部の所在地が異なつてゐるので，一様に考えることはできないが，住居と

関連のある通学状況の特徴をみると、交通機関（バス、電車、汽車）の利用者が多く、交通費が学費のなかでかなりの重みを持っていたことと、通学時間に相当負担をかけている者があったということである。交通機関の利用者の大部分が自宅からの通学者であって、その約 58% に当たっていた。通学時間では、2 時間以上（往復）かかるものが、全体の 40% を占め、5 時間以上もかかるものが 74 名で 8% に当たっていた。そのうち教育学部の学生が 46 名を占めていたことは注目すべき点であった。

通 学 時 間（片道）

時間 学部	5分 まで	10分 まで	15分 まで	20分 まで	40分 まで	60分 まで	90分 まで	120分 まで	150分 まで	180分 まで	180分 以上	計
文 理	13	21	20	12	33	19	25	26	9	2	2	182
教 育	55	47	26	20	38	52	89	94	36	10	0	467
工	5	26	62	18	16	9	21	26	3	0	1	187
農	22	12	7	14	5	0	9	7	8	3	0	87
計	95	106	115	64	92	80	144	153	56	15	3	923

学資の収入 学資の収入源を父兄からの仕送り、親戚知人からの仕送り、奨学金、アルバイト収入、借入金、その他の 6 項目に分けて集計した。同一人が種々の収入源にたよっている場合があったが、学資出所の大部分は父兄の仕送りであった。しかし若干のものは全く父兄の仕送りによらないものがあった。また奨学金、アルバイト収入が、全収入源のなかで重要な比率を示していると思われるものもかなりあった。

学資の総収入は授業料を除いて一カ月平均 4,519 円で、文理・教育両学部はほとんど差がなかったが、工・農学部はそれに比べて約 1000 円前後多かった。

住居別にみると、下宿の 7,108 円がもっとも多く、間借の 6,188 円、学寮の 5,601 円、親戚知人の 5,176 円、自宅の 3,454 円の順になっていた。以上の点から、どの学部でも下宿生活がもっとも金がかかるといえるようであった。しかし自宅通学者の中にも、1 万円以上の収入を得ているものもあることが注目された。



総収入と父兄の仕送りとの関係を見ると、次表のとおりで、各学生とも奨学金、アルバイト収入などで補充しているのであったが、奨学金が父兄の支出を軽減している額は、1,600～2,950 円になっていた。その軽減の程度は、自宅 1,520 円、学寮 1,857 円、間借 2,260 円、下宿 2,950 円と、生活費のかかる場所になるほど大きくなっていった。またアルバイト収入は、奨学生と非奨学生とで、父兄の支出への軽減度には差があって、奨学生では、300 円から 600 円、非奨学生では 1,200 円であった。

学資の総収入額と父兄からの仕送り額と平均比較

学部		住居					親 戚 知 人 宅	計
		自 宅	学 寮	間 借	下 宿			
文理	総収入額	3,294円	5,720	6,208	6,900	5,033	4,226 円	
	仕送り額	1,730	4,083	4,236	4,800	3,708	2,568	
教育	総収入額	3,590	5,475	5,902	6,241	5,413	4,289	
	仕送り額	2,073	3,909	4,264	4,611	3,778	2,743	
工	総収入額	3,005	5,812	6,592	8,014	4,866	4,902	
	仕送り額	2,178	4,073	5,536	7,025	3,422	3,654	
農	総収入額	4,065	5,257	6,511	7,375	5,757	5,533	
	仕送り額	3,192	3,932	5,417	6,637	940	4,424	
全学	総収入額	3,454	5,601	6,188	7,108	5,176	4,516	
	仕送り額	2,056	3,994	4,642	5,796	3,521	2,851	

学費の支出 学資の支出面では、一般的に黒字で健全な経済生活のあとがかわれていたが、文理学部の下宿者のみが赤字であった。

全支出に対する各種目別の比率は、次表のとおりであって、自宅通学者で、交通費と勉学のために要する直接的な支出とに比重がかかり、学寮その他者は、住居費と食費とに 60% 以上の支出をしていることが明らかとなった。後者については食べるのに追われているという生態がみられ、学生生活の難を如実に示していた。

住居費 自宅外居住者の重要な費目になっている。学寮、間借、下宿、親戚

各支出額の総支出額にしめる比率

住居	学部	住居費	食費	交通費	衣服費	勉学費	課外活動費	娯楽費	保健衛生費	その他
自宅	文理	—	7.0	18.1	9.6	38.6	5.0	7.6	1.9	12.7
	教育	—	6.6	27.3	9.5	30.7	4.9	6.2	1.6	12.7
	工	—	6.0	26.6	6.2	34.7	1.6	9.0	1.9	14.0
	農	—	6.1	30.1	10.3	31.1	2.1	5.8	1.0	13.5
学寮	文理	9.3	52.9	2.1	4.6	14.2	1.1	4.6	1.5	8.5
	教育	8.9	56.2	2.0	6.1	14.1	1.2	3.3	1.3	6.6
	工	8.5	52.2	2.1	3.4	16.3	1.0	5.1	1.6	9.8
	農	8.8	51.1	1.7	4.5	16.1	1.2	5.1	1.1	10.0
間借	文理	21.0	51.5	1.8	3.3	10.5	1.1	3.0	1.0	6.4
	教育	18.3	46.6	2.0	5.3	14.6	1.6	3.6	1.6	6.6
	工	20.2	51.3	1.7	4.3	10.3	0.4	3.3	1.3	6.7
	農	21.0	47.3	2.6	4.6	11.3	0.7	2.9	1.9	8.5
下宿	文理	19.6	56.2	2.0	3.5	9.4	0.3	3.0	1.3	3.8
	教育	16.0	54.2	1.6	3.2	14.1	0.8	3.0	1.5	5.5
	工	19.2	52.1	2.1	2.6	10.5	0.6	3.5	1.9	9.5
	農	18.6	58.1	2.2	2.6	9.3	0.3	3.3	1.1	4.0
親戚知人	文理	5.4	43.6	1.4	6.6	22.1	3.2	5.7	1.6	10.4
	教育	13.6	44.4	2.0	7.1	18.6	2.6	2.4	2.1	6.5
	工	7.9	27.3	2.8	9.2	22.6	1.6	9.8	3.8	14.4
	農	—	—	—	—	—	—	—	—	—

知人宅などその条件は異なるが、学寮は455円から466円程度、間借1,133円から1,270円、下宿1,247円から1,359円となった。学部別にみてもそれほどほどの差は認められなかった。

食費 自宅通学者の食費は、昼食代だけの者なので除外し、自宅外居住者についてみると、平均2,923円であったが、学寮2,758円、間借2,967円、下宿3,673円、親戚知人宅2,450円で、下宿者の食費が一番高かった。食費の

兼であるのは、一定の食事代の外に補食費を含んでいたからであった。

**交通費** 自宅通学者の支出のうちで大きな部分を占めているが、自宅外通学者の平均 192 円に対して、897 円となっていた。通学距離ならびに学部所在地の特殊性によって、各学部でかなりの差があったが、自宅通学者についてみると、平均して文理 771 円、教育 934 円、工 867 円、農 1,042 円となった。

**勉学費** 授業料を除いた一切の勉学費は、自宅通学者と自宅外居住者との間に平均 208 円の差があった。勉学費での余裕は、明らかに自宅通学者に有利であった。また自宅外居住者では、親戚知人宅、学寮、間借、下宿の順になり、下宿者は、生活のため勉学費を節約せざるを得ないもっとも不利の状態にあった。

勉学費の標本平均

学部	住居	自 宅	自 宅 外				計
			学 寮	間 借	下 宿	親戚知人	
文理	例 数	107	15	35	5	6	61
	標本平均	1,363	840	731	660	1,033	783
教育	例 数	306	63	55	18	13	148
	標本平均	1,088	800	925	883	785	861
工	例 数	72	71	12	16	9	107
	標本平均	1,065	976	809	863	844	941
農	例 数	25	22	28	8	1	61
	標本平均	1,296	909	811	725	2,000	861
全学	例 数	510	171	130	47	29	377
	標本平均	1,150	891	825	765	897	871

**果外活動費** 生活条件にほとんど関係なく、その支出の平均は約 200 円である。ただその支出額の範囲の逸脱が大きく、100 円未満の者が約 50% でありに対して、2,000 円から 4,000 円の支出を要したものがあつた。

**娯楽費** 娯楽費の平均は約 300 円で、400 円未満のものが 80.7% であつた。1000 円以上のものは標本例 783 名の中わずか 7 名であつた。住居の条件

によってかなりコントロールされ、自宅、親戚知人、学寮、間借、下宿の順に少なくなっていた。この点でも自宅通学者がもっとも有利であった。

アルバイト状況 アルバイトをしている学生の比率は、31.7%で、比較的勉学に余裕のある文理・教育両学部が多くなっていた。その職種は、きわめて多種多様であったが、固定的な家庭教師が大部分を占めていた。就労日数は平均1カ月10日、1日3時間であったが、最高30日というものがあって、勉学へのアルバイトの影響について考慮すべき事実が明らかとなった。

このようなアルバイトのあつ旋をどのような方法によって得たか調査の結果によると、知人、先輩の援助によつたものが52.2%で圧倒的に多く、直接あるいは厚生課のあつ旋によるものが、それぞれ17.6%でその次であった。

アルバイトと学業との関係について、支障の有無を求めた回答によると、約55%のものが、支障はないと答え、約36%のものは支障があると答えた。しかし57.8%のものはアルバイトを希望していることからみて、経済的な面における学生の実態が困窮していると思われた。

その他 経済的生活の実態からみて、学生の生活にはまだゆとりがあるとはいわれないので、課外活動の参加状況にも反映し、全然参加していなかった学生が28%に及んだ。殊に勉学期間に制約されることの多い工・農学部ではその比率が高く、41.1%、37.8%であった。

購読雑誌と新聞については各学部で大差なく、総合雑誌23.1%、娯楽雑誌19.8%、専門雑誌22.3%で、一般に読まれている雑誌は、文芸春秋、中央公論、世界、新潮、週刊誌、語学雑誌であった。ただ注目すべきことは、全然雑誌を読んでいないと答えたものが49.4%に及んでいた。また新聞は、朝日、毎日、読売、産経の中央新聞が圧倒的に多く、地方新聞はあまり読まれていなかった。新聞についても“常に読んでいる新聞なし”と回答したものが各学部ともに2%乃至5%あった。

# 付 録

## 1 茨城大学十年史略年表

### 昭和 24 年

- 5 月 31 日 昭和 24 年法律第 150 号国立学校設置法により文理学部、教育学部、工学部の 3 学部よりなる茨城大学として設置され、水戸高等学校、茨城師範学校、茨城青年師範学校および多賀工業専門学校の 4 校を包括した。  
 文部教官関泰祐学長事務取扱を命ぜられ、文理学部長に補せられ、兼ねて水戸高等学校長に補せられた。  
 文部教官斎藤儀重教育学部長に補せられた。  
 文部教官都崎雅之助工学部長に補せられ、兼ねて多賀工業専門学校長に補せられた。  
 文部事務官橋本道胤事務局長に補せられた。
- 6 月 1 日 開学、事務を開始した。
- 6 月 13 日 教育学部長斎藤儀重兼ねて茨城師範学校長に補せられた。
- 6 月 22 日 文部省令第 23 号（国立学校設置法施行規則）により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	学 部 長 及 び 主 事	教 授	助 教 授	講 師	助 手	付 属 学 校 事 務 技 の 長 及 び 術 教 務 教 員 職 員	計	
1	3	115	71	30	5	37	316	578

- 6 月 29 日 文部教官鈴木京平学長に補せられ、文部教官関泰祐学長事務取扱を免ぜられた。
- 7 月 22 日 第 1 回入学式を挙行し、学生 656 名の入学を許可した。（文理 153、教 345、工 158）
- 7 月 31 日 教育学部長斎藤儀重兼ねて茨城青年師範学校長に補せられた。
- 8 月 1 日 文部教官小川泰兼ねて付属図書館長に補せられた。  
 文部教官沼尻源一郎兼ねて学生部長に補せられた。
- 8 月 22 日 各学部の授業を開始した。
- 2 月 22 日 茨城大学学則を制定した。

## 昭和 25 年

- 3月31日 昭和 25 年法律第 51 号国立学校設置法の一部を改正する法律により、本学に包括された水戸高等学校が廃止され、文理学部長関泰祐水戸高等学校長の兼職を解除された。
- 4月30日 学長鈴木京平兼ねて文理学部長事務取扱に補せられ、文部教官関泰祐文理学部長の兼職を解除された。
- 5月10日 第 2 回入学式を挙行し、学生 597 名の入学を許可した。
- 5月16日 事務局新庁舎が竣工し、本部が移転した。
- 5月24日 文部省令第 17 号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	学部長及び主事	教 授	助教授	講 師	助 手	付属学校の長及び教員	事務、技術、教務職員	計
1	3	89	87	30	18	39	311	578

- 8月1日 文部教官倉橋治助文理学部長事務取扱に補せられ、学長鈴木京平文理学部長事務取扱の兼職を解除された。
- 10月20日 茨城大学開学祝賀式典を挙行した。

## 昭和 26 年

- 3月10日 第 1 回修了式を挙行した。修了生 144 名（教育学部 2 年課程）。
- 3月31日 昭和 26 年法律第 84 号国立学校設置法の一部を改正する法律により、本学に包括された茨城師範学校、茨城青年師範学校、多賀工業専門学校が廃止され、茨城師範学校の付属校は、教育学部付属校となる。教育学部長斎藤儀重茨城師範学校長および茨城青年師範学校長の兼職を解除された。  
工学部長都崎雅之助多賀工業専門学校長の兼職を解除された。
- 4月16日 第 3 回入学式を挙行し、学生 706 名の入学を許可した。
- 4月30日 教育学部土浦教場を廃止し、水戸に移転を完了した。
- 5月1日 本部処務機構の改正により、営繕係を廃止して施設課を設置し、補導課を教務補導課に改めた。
- 8月25日 文部省令第 19 号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 諭	養 護 教 諭	その他の職員	計
1	65	105	31	27	39	2	304	574

- 10月1日 文部教官二方義教育学部長に補せられ、文部教官斎藤儀重教育学部長の兼

職を解除された。

## 昭和 27 年

- 3月12日 第2回修了式を挙行了。修了生137名。
- 4月1日 昭和27年法律第22号国立学校設置法の一部を改正する法律および昭和27年文部省告示第10号により、茨城県立農科大学の国立移管に伴い本学に農学部が設置された。  
茨城県立農科大学学長田中貞次文部教官に採用され、農学部長に併任された。
- 4月15日 第4回入学式を挙行し、学生899名の入学を許可した(文理143,教523,工169,農64)。
- 9月13日 文部省令第23号(国立学校設置法施行規則の一部改正)により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 論	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	82	121	29	55	41	2	360	691

- 12月31日 文部教官大場千秋文理学部長に併任され、文部教官倉橋治助文理学部長専務取扱の兼職を解除された。

## 昭和 28 年

- 3月20日 第1回卒業式および第3回修了式を挙行了。卒業生457名(文理95,教91,工131,農40)。修了生227名。
- 4月15日 第5回入学式を挙行し、学生925名の入学を許可した。  
文部省令第10号(国立学校設置法施行規則の一部改正)により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 論	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	82	121	29	55	43	2	360	693

- 7月17日 文部省令第19号(国立学校設置法施行規則の一部改正)により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 論	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	82	121	29	55	43	2	360	693

- 9月5日 鈴木京平学長の辞意にしたがい、本学々長選考規則による選挙を行い、東

京大学名誉教授東龍太郎が選出された。

- 10月1日 東京大学名誉教授東龍太郎学長に補せられ、学長鈴木京平願により辞職を承認された。

### 昭和 29 年

- 3月20日 第2回卒業式および第4回修了式を挙行了。卒業生 357 名。修了生 264 名。
- 3月31日 文部省令第6号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 諭	養 護 教 諭	その他 の職員	計
I	84	120	27	55	43	2	352	684

- 4月1日 本学付属図書館長選考規則の施行により、文部教官小川泰付属図書館長に併任された。
- 4月15日 第6回入学式を挙行し、学生 950 名の入学を許可した。
- 5月1日 文部教官酒井清一学生部長に併任され、文部教官沼尻源一郎学生部長の併任を解除された。
- 6月1日 本学学部長選考規則の制定により、文部教官二方義教育学部長に、文部教官都崎雅之助工学部長に、文部教官田中貞次農学部長に併任された。
- 6月17日 茨城大学校歌を制定した。
- 9月1日 本学事務機構の改正により、学生部教務補導課を学生課に改めた。
- 12月16日 本学学部長選考規則により、文部教官大場千秋文理学部長に併任された。

### 昭和 30 年

- 3月18日 第3回卒業式および第5回修了式を挙行了。卒業生 451 名。修了生 251 名。
- 3月31日 教育学部友部教場を廃止し、水戸に移転を完了した。
- 4月15日 第7回入学式を挙行し、学生 917 名の入学を許可した。
- 7月1日 昭和 30 年法律第 44 号国立学校設置法の一部を改正する法律により、本学に工業短期大学部が設置された。  
文部教官（茨城大学学長）東龍太郎、茨城大学工業短期大学部学長に併任された。  
文部教官（工学部長）都崎雅之助、茨城大学工業短期大学部主事に併任された。  
文部省令第 13 号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により、本学職員の定員が次のように定められた。



学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 諭	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	87	120	26	54	43	2	344	677

7月15日 第1回茨城大学工業短期大学部入学式を工学部において挙行し、学生98名の入学を許可した。

### 昭和31年

3月20日 第4回卒業式および第6回修了式を挙行した。卒業生530名。修了生303名。

3月31日 学大第239号により本学工学部に工業化学科が増設され、原動工学科は機械工学科と合併し、在学生の卒業をまって廃止されることになった。

4月1日 文部省令第8号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 諭	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	89	120	26	55	42	2	342	677

4月16日 第8回入学式を挙行し、学生875名の入学を許可した。

4月22日 第2回茨城大学工業短期大学部入学式を工学部において挙行し、学生79名の入学を許可した。

3月1日 本学学部長選考規則により選挙を行い、文部教官中村巳喜夫文理学部長に文部教官二方義教育学部長に、文部教官都崎雅之助工学部長に、文部教官田中貞次農学部部長に併任され、文部教官大場千秋文理学部長の併任を解除された。

### 昭和32年

3月20日 第5回卒業式および第7回修了式を挙行した。卒業生604名。修了生216名。

3月31日 本学学部長選考規則により選挙を行い、文部教官中原重樹農学部部長に併任され、文部教官田中貞次定年退職により農学部部長の併任を解除された。

3月1日 本学付属図書館長選考規則により文部教官小川泰付属図書館長に併任された。

3月10日 文部省令第7号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 諭	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	89	121	25	57	44	2	343	682

- 4月11日 第9回入学式を挙行し、学生810名の入学を許可した。  
教育学部の中高等教育科2年課程は本年度から募集を中止した。
- 4月16日 第3回茨城大学工業短期大学部入学式を工学部において挙行し、学生79名の入学を許可した。
- 5月1日 文部教育石原道博兼て学生部長に補せられ、文部教官酒井清一学生部長の兼職を解除された。
- 11月28日 文部事務官田中米喜事務局長に補せられた。

### 昭和33年

- 3月19日 茨城大学工業短期大学部の校舎が完成し落成式を挙行した。  
茨城大学工業短期大学部第1回卒業式を挙行した。卒業生71名。
- 3月20日 第6回卒業式および第8回修了式を挙行した。卒業生620名。修了生152名。
- 3月31日 学大第126号により、本学工学部に専攻科が増設された。
- 4月10日 第10回入学式を挙行し、学生760名の入学を許可した。  
教育学部の初高等教育科2年課程は本年度から募集を中止した。
- 5月1日 文部省令第13号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により本学職員  
の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 論	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	90	120	25	56	45	2	344	683

- 6月1日 本学学部長選考規則により、文部教官中村巳喜夫文理学部長に、文部教官二方義教育学部長に、文部教官都崎雅之助工学部長に併任された。
- 9月18日 学長東龍太郎の辞職が承認された。教育学部長二方義本学学長事務取扱並に茨城大学工業短期大学部学長事務取扱を命ぜられた。
- 12月19日 学長東龍太郎の辞職にしがたい、本学学長選考規則による選挙を行い、工学部長都崎雅之助が選出された。
- 12月26日 文部教官都崎雅之助本学学長に補せられ、同日茨城大学工業短期大学部学長に併任された。教育学部長二方義学長事務取扱の兼職を解除された。  
学長都崎雅之助兼て工学部長事務取扱並に工業短期大学部主事事務取扱を命ぜられた。

### 昭和34年

- 3月1日 本学学部長選考規則により選挙を行い、文部教官真野克巳工学部長並に工業短期大学部主事に併任され、学長都崎雅之助工学部長事務取扱並に工業短期大学部主事事務取扱の兼職を解除された。
- 3月20日 第7回卒業式、第9回修了式および第2回工業短期大学部卒業式を挙行し

- た。卒業生 672 名。修了生 47 名。短大卒業生 60 名。
- 3 月 31 日 本学学部長選考規則により選挙を行い、文部教官広沢吉平農学部長に併任され、文部教官中原重樹定年退職により農学部長の併任を解除された。学大第 147 号により、本学農学部にて専攻科が増設された。大学第 164 号により、本学工学部に精密工学科が増設された。事務局長田中米喜の辞職が承認された。
- 4 月 1 日 本学付属図書館長選考規則により文部教官大場千秋付属図書館長に併任され、文部教官小川泰付属図書館長の併任を解除された。文部事務官藤田忠事務局長に補せられた。
- 4 月 10 日 第 11 回入学式を挙行政し、学生 779 名の入学を許可した。
- 5 月 1 日 本学学生部長選考規則の制定により、文部教官石原道博学生部長に併任された。
- 5 月 16 日 文部省令第 16 号（国立学校設置法施行規則の一部改正）により、本学職員の定員が次のように定められた。

学 長	教 授	助教授	講 師	助 手	教 諭	養 護 教 諭	その他 の職員	計
1	91	119	25	56	45	2	344	683

- 5 月 30 日 本学創立 10 周年記念式典を挙行政した。

## 2. 職員名簿

### 旧職員名簿

水戸高等学校  
茨城師範学校  
茨城青年師範学校  
多賀工業専門学校

事務局  
学生部  
文理学部  
教育学部  
工学部  
農学部  
図書館  
工業短期大学部

### 現職員名簿

事務局  
学生部  
文理学部  
教育学部  
工学部  
農学部  
図書館  
工業短期大学部

旧 職 員

水戸高等学校（教官のみ）

○印学内転出

氏 名	退職時の職名	就 職 年 月 日	職 年 月 日	退職又 は転職 年 月 日	氏 名	退職時の職名	就 職 年 月 日	職 年 月 日	退職又 は転職 年 月 日
余野 康雄	講 師	大 9. 9. 9	大 10. 6. 8		木宮 泰彦	教 授	大 12. 3. 31	昭 2. 8. 15	
トマス・イー ジョオンズ	"	10. 4. 18	10. 10. 8		ウイル・ヘルム グンデイルト	教 師	11. 4. 7	2. 9. 5	
菊部 平大	"	10. 3. 31	10. 10. 15		ハーバート ニコルソン	講 師	昭 2. 5. 1	3. 1. 31	
日 口 環	"	10. 4. 7	10. 11. 12		桑田 六郎	教 授	大 10. 9. 24	3. 2. 13	
山内 二郎	教 授	9. 8. 2	11. 1. 31		小 沢 健	講 師	昭 2. 3. 18	3. 2. 29	
又村 秀雄	講 師	10. 11. 21	11. 2. 21		ジヨニセフ・ エスケナド	講 師	3. 1. 31	不 明	
野沢 俊樹	"	10. 9. 10	11. 5. 31		佐藤 信一	"	大 15. 4. 2	3. 3. 31	
市毛 太成	助 手	10. 11. 10	11. 6. 28		伊藤 法準	教 授	13. 4. 7	3. 4. 14	
長倉 武男	講 師	11. 4. 10	11. 12. 11		井上 忠藏	助 教	15. 12. 23	3. 4. 23	
島坂 無為	教 授	9. 6. 21	12. 3. 16		松 村 伝	校 長	昭 15. 9. 11	3. 9. 8	
女野 純一	"	9. 7. 8	12. 4. 7		大 岩 誠	助 教	昭 3. 10. 15	3. 11. 2	
木 善作	助 教	11. 4. 13	12. 8. 6		皆川 正禧	教 授	大 9. 6. 7	4. 1. 21	
島井 高孝	教 授	9. 7. 5	12. 8. 20		四野宮 豊治	"	10. 5. 16	4. 3. 13	
島 沢 雅彦	助 手	11. 7. 5	13. 1. 31		小野島 右左雄	"	9. 6. 30	4. 4. 20	
島 島 一郎	教 授	10. 3. 31	13. 3. 12		池田 嘉吉	"	9. 7. 26	2. 3. 17	
島 田 真治	"	9. 9. 12	13. 5. 2		埴 鉄雄	助 手	昭 2. 4. 3	4. 5. 7	
島 良 守峯	"	10. 9. 10	13. 5. 19		岡村 喜代志	教 授	大 10. 3. 5	4. 6. 21	
島 野 親美	"	11. 4. 7	13. 9. 30		樫崎 正雄	講 師	昭 3. 4. 3	4. 5. 25	
ジョン・エフ・ リチャーツ	教 師	10. 10. 1	13. 11. 22		西川 五郎	教 授	大 12. 12. 28	4. 3. 7	
川 重定	助 手	12. 11. 19	13. 12. 27		徳田 弥	講 師	昭 3. 10. 31	5. 4. 7	
吉 捷郎	教 授	9. 9. 1	14. 3. 31		栗原 武一郎	教 授	大 9. 8. 2	5. 6. 25	
、牧 健夫	"	9. 7. 9	14. 7. 31		小松 倍一	校 長	昭 3. 9. 8	6. 1. 10	
、田 順助	講 師	14. 8. 31	15. 2. 28		山田 伊三郎	教 授	大 12. 8. 20	6. 5. 6	
、藤 高德	"	14. 8. 31	15. 3. 31		大河内 秀文	"	6. 7. 28	7. 3. 31	
、川 鋭二	"	9. 6. 8	15. 4. 5		高島 権一	"	5. 8. 22	不 明	
、沢 忠雄	助 教	13. 1. 15	15. 7. 13		菊 池 一	"	10. 10. 13	8. 4. 2	
、辺 又次郎	校 長	9. 4. 19	15. 9. 11		大久保 進一	"	13. 4. 7	9. 1. 12	
、上 竜英	教 授	9. 8. 2	15. 9. 11		富樫 鉄次郎	講 師	10. 5. 31	9. 4. 13	
、治見 国司	講 師	9. 6. 8	昭 2. 3. 11		近 沢 通元	校 長	昭 6. 1. 10	9. 8. 22	
、藤 直	"	13. 5. 14	2. 3. 11						
、羽田 卓	助 教	9. 6. 30	2. 3. 31						
、永 源作	教 授	12. 2. 1	2. 3. 31						
ジョン・アール ステイール	教 師	13. 11. 24	2. 3. 31						

清水谷隆寛	教授	11.10.23	2.4.11	齋藤卯内	助教授	2.4.10	10.3.26
小貫義久	配属校	14.4.24	2.7.26	関口信	"	4.5.10	12.3.31
青山儷一	講師	15.4.5	12.4.2	久保謙	教授	9.6.12	16.6.14
川上千代松	助手	3.3.31	12.5.19	泉田忠昭	助手	19.4.30	19.7.31
野原茂六	教授	9.9.6	12.7.30	寺門孝徳	助教授	15.10.12	18.9.23
富森修三	助教授	4.7.10	12.11.3	本間七郎	教授	2.4.13	20.4.30
石中広次	教授	4.4.5	12.10.30	団井豪	"	15.3.26	20.6.6
中村誠之進	講師	3.2.29	13.5.8	窪田敏夫	"	7.8.31	20.6.18
大内良三	"	13.3.31	13.8.31	平根寛	助教授	16.4.9	20.9.30
赤津五郎	助手	12.10.11	13.9.21	安井章一	校長	19.3.31	20.10.15
相馬良馬	教授	10.4.7	13.9.17	野村琢一	教授	15.11.26	18.10.23
相良益次郎	"	4.1.31	13.9.29	小池行松	教授	19.6.2	20.11.7
大野和男	講師	12.11.9	14.7.31	住谷球次郎	講師	12.10	20.11.10
山内雄太郎	校長	9.8.22	14.9.16	岡野源次郎	"	11.10.3	20.11.10
君島良雄	助手	12.4.5	14.11.20	大内義平	"	2.4.12	20.11.10
生沼豊彦	教授	9.9.1	2.9.19	大田義之輔	"	19.3.12	20.11.10
内田浩	講師	14.9.1	15.4.10	鈴木文治	"	12.4	20.10.12
柏忠夫	"	14.9.1	15.4.10	菊池五郎	"	4.4	20.12.31
山本永作	助手	14.11.6	15.4.18	吉田良次	教授	11.10.7	18.3.30
上原覚	助教授	3.3.31	15.6.5	吉野惺	"	2.4.10	20.12.22
高木茂	講師	14.2.23	15.10.31	三好晋	"	9.4.22	21.3.30
安藤熙	教授	9.4.7	15.4.20	藤沢誠	教授	3.4.22	20.12.22
島野誠一郎	"	2.2.3	13.4.8	望月健夫	"	17.9.22	20.10.9
飯村勉	助手	14.4.19	16.4.2	今村孝三	教授	2.8.15	21.3.30
朝野虎治	"	13.3.31	15.4.15	竹内伊一郎	教授	4.3.25	21.12.27
石川勉	"	15.3.25	16.4.5	湯原二郎	講師	21.4.30	21.12.31
クロード・ ヴェンロッセ	教師	6.4.1	16.3.31	三浦一郎	"	21.4.30	22.3.31
青山博次郎	教授	14.4.6	17.4.23	高野惣太郎	文部官 3級教授	20.9.20	22.7.30
莊直一	"	2.8.10	18.3.31	徳沢得二	教授	15.3.13	23.4.15
仲栄太郎	"	3.4.14	18.4.1	田中俊夫	講師	21.5.26	23.5.31
佐藤瑞穂	"	2.3.31	18.7.15	高岡美郎	"	22.4.21	23.8.31
小貫義久	講師	13.3.31	13.12.31	藤木美夫	"	22.9.5	23.8.31
塚原武人	助手	18.4.12	19.3.31	森島太郎	教授	21.10.10	23.6.30
高島規孝	校長	14.9.16	19.3.31	佐藤正義	"	17.5.27	23.7.31
				金沢優	助手	16.7.1	23.9.15

エル・デイ・ シー・トーマス	教 師	水高同窓会名簿に記載あるも資料なし
クルト・ バイエル	教 師	〃
片山理一郎	配属将校	〃
湯瀬剛一郎	〃	〃
川田修三郎	〃	〃
千葉小太郎	〃	〃
高木 喬	〃	〃

茨城師範学校 (教官のみ)

氏 名	退職時 の職名	就 職 年月日	退職又 は転職 年月日	氏 名	退職時 の職名	就 職 年月日	退職又 は転職 年月日
藤 仲次	講 師	18. 4. 1	18. 7. 15	関野 豊三	教 授	18. 4. 1	20. 4. 1
黒 彰二	教 諭	〃	18. 9. 30	郡 司 正一	助 教 授	〃	〃
橋 健夫	講 師	18. 5. 24	〃	橋 は や	教 諭	〃	20. 6. 12
崎 紋次郎	〃	18. 5. 1	18. 12. 31	高 柳 誠次	教 諭	19. 4. 27	20. 6. 30
山 義雄	〃	18. 5. 15	〃	岩 淵 進	教 授	18. 6. 11	20. 7. 18
野 安満	副 手	18. 4. 1	19. 2. 2	古 川 丈夫	〃	18. 4. 1	20. 7. 28
東 暢彦	訓 導	〃	19. 3. 31	黒 須 道夫	教 諭	18. 5. 14	20. 9. 24
口 亨藏	講 師	〃	19. 7. 31	菊 本 重二	教 授	18. 4. 1	20. 9. 25
野 清	学 校 長	〃	19. 8. 30	富 田 重裕	訓 導	〃	20. 9. 30
崎 款司	教 諭	〃	19. 8. 31	柳 生 四郎	講 師	20. 4. 23	20. 9. 30
村 正雄	講 師	19. 4. 26	19. 9. 30	須 能 徳	教 諭	18. 4. 1	20. 10. 31
見 てい	教 授	18. 4. 1	19. 10. 5	小 川 てう	訓 導	〃	20. 10. 31
木 専之介	〃	〃	19. 10. 27	川 澄 七郎	教 諭	〃	〃
藤 孝一	助 教 授	〃	19. 10. 28	藺 部 寿之助	講 師	19. 9. 30	〃
林 兵治	教 諭	18. 9. 25	19. 11. 14	小 室 平一	教 諭	18. 4. 1	20. 11. 15
口 田鶴	教 授	18. 9. 10	20. 1. 30	大 西 癒	学 校 長	19. 9. 27	20. 11. 24
塚 喜久	〃	18. 4. 1	〃	斎 藤 儀重	教 授	18. 4. 1	20. 11. 24
沼 俊平	講 師	18. 4. 1	20. 1. 31	門 井 善四郎	訓 導	18. 4. 1	20. 12. 28
川 浩	教 諭	18. 4. 1	20. 3. 10	阿 部 悟郎	教 授	〃	21. 1. 25
里 修	教 諭	19. 6. 24	20. 3. 11	藤 田 実	訓 導	〃	21. 1. 31
町 猷	教 諭	18. 4. 1	20. 3. 17	益 子 清	助 教 授	19. 3. 31	21. 2. 5
川 三郎	訓 導	〃	20. 3. 25	小 野 寿	教 諭	18. 4. 1	21. 2. 20
老沢 格	〃	〃	〃	長 嶋 操	教 授	20. 9. 4	21. 3. 30
賀 繁子	〃	〃	20. 3. 31	小 祝 正	〃	18. 4. 1	21. 3. 30
須 フミノ	講 師	〃	〃	小 沢 武	教 諭	18. 4. 1	21. 3. 30

森田 富夫	"	18. 5. 17	21. 3. 30	桑名 ミエ	講 師	21. 5. 31	22. 9. 30
白工 為佐男	訓 導	18. 4. 1	21. 3. 31	荷見 重泰	"	21. 2. 28	"
野口 敏雄	"	"	"	菊地 清三	"	20. 3. 31	"
真船 始	教 授	"	"	井上 みね	副 手	21. 5. 14	22. 10. 31
山本 英	"	"	"	志賀 恒治	"	20. 2. 28	23. 1. 15
蓮田 美香	薙刀教師	"	21. 3. 31	小沢 千奈美	養護訓導	19. 2. 26	23. 1. 20
稲川 浅二郎	講 師	"	"	片平 勝	教 諭	19. 9. 30	23. 1. 31
山口 登美子	訓 導	18. 5. 17	21. 4. 30	高橋 八十平	教 授	20. 6. 11	23. 2. 3
菅原 貞男	教 授	18. 6. 11	"	鹿島 一男	講 師	22. 5. 10	23. 3. 31
宇中 喜久子	副 手	18. 5. 20	"	島田 茂	文部教官 (兼)	23. 1. 31	"
伊藤 達郎	助 教	19. 9. 30	21. 5. 1	岡部 ヒロ子	訓 導	20. 6. 30	"
杉浦 芳	茶道講師	18. 4. 1	21. 5. 31	古川 清彦	文部教官 三	22. 9. 30	23. 3. 31
根本 カツ	華道講師	"	"	青戸 兵司	"	21. 11. 30	23. 4. 15
金子 敏	文部教官 三	18. 9. 30	"	田中 清	"	22. 4. 30	23. 4. 30
因根 治	訓 導	18. 4. 1	21. 6. 7	伊藤 寅八郎	訓 導	18. 5. 17	23. 6. 30
菊地 義	"	18. 6. 8	"	飛田 キン	副 手	23. 4. 15	"
白幡 兼	講 師	18. 5. 15	21. 6. 30	蓑輪 勇	訓 導	18. 11. 30	"
小泉 一二	訓 導	19. 3. 31	21. 7. 23	近藤 英雄	教 授	20. 8. 3	23. 7. 30
神永 その子	"	18. 4. 1	21. 9. 30	田口 鷹亀	"	18. 4. 1	23. 8. 5
楠見 貞男	助 教	"	21. 10. 9	駒木根 よしの	教 諭	19. 9. 30	23. 9. 30
香川 正健	"	"	21. 10. 16	笹木 力男	教 授	18. 4. 1	"
萩原 二郎	教 諭	19. 9. 30	21. 10. 29	山本 満男	文部教官 三	23. 3. 31	"
車田 徳司	助 教	18. 8. 15	21. 11. 24	坂井 晴彦	"	"	23. 10. 31
寺門 孝徳	"	15. 10. 12	21. 11. 29	会沢 勇三	教 諭	18. 6. 2	"
大武 フミ子	養護訓導	19. 2. 26	22. 1. 26	鶴町 猷	講 師	20. 3. 31	"
小林 てる子	副 手	20. 10. 31	22. 3. 25	藤城 菊麿	文部教官 (兼)	23. 1. 31	24. 1. 11
。瀬谷 義彦	教 授	18. 6. 11	22. 3. 31	中島 英敏	"	"	"
稲葉 信次	助 教	18. 9. 30	"	飯塚 広	"	"	"
増尾 武	講 師	18. 4. 1	"	石引 あい	"	"	"
高知 智子	"	19. 9. 30	"	小松 沢重夫	"	"	"
武藤 孝太郎	訓 導	18. 4. 1	"	今泉 嘉広	文部教官 二	18. 4. 1	24. 1. 14
根岸 孝一郎	講 師	20. 10. 23	22. 3. 31	鈴木 茂乃夫	文部教官 二	18. 5. 31	24. 1. 14
鈴木 準一	教 諭	18. 7. 31	"	沢 辺 せつ	文部教官 三	2. 3 9. 30	24. 1. 31
浅香 てる	訓 導	18. 4. 1	"	栗山 玄吾	教 授	18. 7. 10	24. 2. 15
枝村 吉三	教 授	19. 3. 31	22. 4. 1	宮本 正心	"	18. 4. 1	"
嶺岸 耐七郎	"	18. 4. 1	22. 4. 30	本 田 実	文部教官 三	22. 3. 31	24. 3. 20
高井 悌三郎	"	"	22. 6. 18				
佐藤 睦治	"	"	22. 7. 10				
小島 あい	訓 導	"	22. 7. 19				
鈴木 みよ子	文部教官 三	22. 1. 31	22. 9. 30				



佐久間 敏行	文部教官 三級	23. 3. 31	24. 3. 31	久保田清太郎	教 授	18. 4. 1	24. 6. 30
小泉 武雄	講 師	23. 4. 1	"	富岡 健次郎	"	22. 3. 31	"
富田 裕行	"	"	24. 4. 1	山口 正	"	22. 8. 26	"
山口 美雄	教 授	18. 4. 1	24. 4. 15	福富 啓泰	"	23. 6. 8	"
左藤 匡	文部教官 三級	23. 10. 31	"	大野 一郎	"	22. 3. 31	"
野村 千尋	教 授	22. 11. 24	24. 4. 30	関 誠一	"	22. 8. 10	"
岸 初見	学 校 長	20. 3. 31	24. 5. 31	北垣 篤	"	23. 9. 30	"
野井 ふさ	文部教官 三級	21. 12. 31	"	長塚 衝暹	訓 導	21. 3. 31	"
野林 歳	教 授	18. 4. 1	24. 6. 30	西野 稔	文部教官 三級	24. 9. 15	24. 12. 17
中山 俊郎	"	19. 3. 17	"	鈴木 孝卓	教 授	24. 3. 31	25. 3. 1
所 一夫	"	20. 1. 13	"	豊崎 正二	"	23. 9. 14	"
黒 光治	"	18. 4. 1	"	桜井 明俊	"	24. 2. 28	"
渡 武	"	20. 10. 16	"	岩下 己伸	"	20. 12. 28	26. 3. 30
木 隆男	"	20. 10. 8	"	高野 千石	"	23. 5. 31	26. 3. 31
岩 嘉納	"	18. 4. 1	"	横瀬 政之助	"	19. 4. 1	"

茨城青年師範学校 (教官のみ)

氏 名	退職時 の職名	就 職 年月日	退職又 は転職 年月日	氏 名	退職時 の職名	就 職 年月日	退職又 は転職 年月日
野 清	学 校 長 (兼)	19. 4. 1	19. 8. 30	高 久 孝	講 師	19. 4. 30	20. 3. 31
和田 豊	講 師	19. 4. 30	19. 9. 30	豊 島 敏夫	"	"	"
村 武保	"	"	"	牧 可 能	"	"	"
谷 明	"	19. 10. 31	20. 1. 10	須 田 力男	"	"	"
田 義夫	教 授	19. 4. 1	20. 2. 27	中崎長治右衛門	"	"	"
野田 定	助 教 授	"	20. 3. 31	斎 藤 進	"	19. 9. 30	"
須賀 力雄	副 手 師	19. 4. 30	"	庄 司 栄一	"	19. 4. 30	"
部 知	講 師	19. 4. 1	"	山 川 勇藏	"	"	"
野 芳三郎	"	"	"	小 川 潔臣	"	"	"
祭 勝夫	助 教 授	"	"	内 藤 信季	"	"	"
野 七郎	講 師	19. 4. 30	"	丹 尾 繁夫	"	"	"
沢 康雄	"	"	"	所 正二	"	19. 11. 30	"
門 賛之介	"	"	"	松 本 寅三	"	"	"
島 政親	"	"	"	沼 崎 欸司	"	19. 6. 30	"
田 一雄	"	"	"	知 清	"	19. 9. 30	"
敬 敏行	"	"	"	大 内 保男	"	19. 4. 30	"
藤 省三	"	"	"	猿 田 秋穂	"	"	"
原 達夫	"	"	"	大 西 薮	学 校 長 (兼)	19. 4. 1	20. 4. 1

丸山 繁男	副手	19. 4. 30	20. 9. 15	佐藤 秋太郎	講師	23. 4. 1	23. 9. 30
沼尻 与四郎	講師	20. 12. 31	21. 9. 30	岡田 一郎	"	20. 4. 1	"
坂入 匡	副手	20. 11. 20	21. 4. 30	山崎 隆	"	"	"
瀬尾 藤吾	"	20. 10. 25	21. 6. 9	渡辺 好道	"	"	"
高橋 義男	助教授	20. 9. 30	21. 6. 30	中山 喜久馬	"	"	"
穴原 栄三郎	教授	19. 7. 31	21. 7. 31	松本 泰三	"	21. 12. 31	"
木村 宏夫	副手	21. 3. 31	22. 3. 31	坂本 光男	"	22. 3. 31	"
小園江 義道	講師	19. 8. 31	"	大川 福市	"	23. 4. 1	"
真壁 博	"	20. 3. 31	"	未至 啓大洲	"	20. 4. 1	"
森 弘	"	21. 9. 30	"	中島 錦一郎	"	"	"
米川 富秀	"	20. 10. 24	"	垣本 誠	"	22. 10. 31	"
大垣 淳司	"	21. 9. 30	"	星野 徳次郎	"	22. 3. 31	23. 10. 31
衣笠 幸雄	"	"	"	坪井 正庫	教授	21. 2. 7	24. 2. 28
泉田 利人	教授	19. 4. 1	22. 5. 31	竹江 信一	"	19. 4. 1	24. 5. 31
中島 次郎	講師	22. 4. 19	22. 8. 18	大川 濶	講師	21. 6. 21	24. 5. 30
粂山 重広	助教授	20. 12. 28	22. 9. 15	○広郡 亮太郎	教授	21. 9. 30	24. 6. 30
池田 秀雄	講師	21. 9. 30	22. 9. 30	○古田 仁	"	23. 3. 31	"
飯村 登	"	"	"	○柴原 定雄	"	21. 8. 31	"
町田 二郎	助教授	21. 3. 31	22. 12. 9	森 幸夫	文部教官 三級	22. 12. 31	24. 9. 28
結束 延一	講師	20. 4. 1	23. 3. 31	川崎 はな	"	22. 2. 28	25. 3. 31
谷島 源十郎	"	21. 3. 31	23. 6. 30	森戸 達雄	講師	19. 4. 30	25. 5. 31
片岡 五郎	教授	13. 6. 28	23. 9. 10	町田 登美子	文部教官 三級	23. 3. 31	25. 7. 31
増田 誠	講師	22. 4. 19	23. 9. 30	山田 正雄	副手	22. 3. 31	26. 3. 31
藤沢 ひと里	教授	21. 11. 30	"				
初鹿野 清	講師	23. 4. 30	"				

多賀工業専門学校 (教官のみ)

氏名	退職時の職名	就職年月日	退職又は転職年月日	氏名	退職時の職名	就職年月日	退職又は転職年月日
佐藤 正	剣道講師	14. 8. 14	15. 8. 31	沼尻 源一郎	教授	14. 6. 14	17. 5. 2
山内 不二雄	校長	14. 5. 23	16. 1. 29	亀谷 俊司	"	14. 6. 24	17. 7. 29
彦坂 重亥	教師 練講 師嘱託	14. 8. 15	16. 1. 30	三串 一士	"	15. 11. 12	17. 7. 31
○伊豆山 善太郎	講師 師嘱託	14. 7. 27	16. 1. 31	杉 牧 夫	"	16. 5. 6	17. 8. 31
近藤 春文	教授	14. 6. 14	16. 5. 16	吉田 健志	剣道講師	16. 11. 30	17. 8. 31
金尾 正義	"	14. 6. 14	17. 2. 7	小林 直之	講師	16. 5. 24	17. 9. 30
土山 一雄	講師	16. 4. 9	17. 3. 31	牧 直 忠	教授	16. 1. 16	17. 10. 12
亀岡 武	生徒主 事 徒補	14. 9. 30	17. 4. 30	吉川 潜之	講師	15. 9. 3	17. 11. 30
田中 太郎	講師	16. 4. 23	17. 4. 30	有竹 秀	講師	17. 10. 31	18. 1. 31
柏 忠夫	教授	14. 6. 14	17. 4. 30	内田 浩	教授	14. 6. 14	18. 3. 22
				斎藤 哲夫	講師	15. 5. 20	18. 5. 31
				大内 義平	"	17. 9. 14	18. 5. 31

龜川	春夫	助教授	15. 11. 30	18. 7. 30	西本	順一	教授	17. 2. 26	21. 3. 27
与川	哲人	"	15. 8. 31	18. 9. 22	桑原	忠一	助教授	17. 4. 30	21. 3. 31
魚辺	正之	教授	14. 7. 8	18. 9. 30	岩本	繁人	講師	20. 11. 22	21. 4. 20
前田	正三	講師	16. 4. 9	18. 9. 30	岡本	昌夫	教授	14. 7. 8	21. 4. 18
川崎	忠三郎	"	16. 4. 30	18. 9. 30	萩野	正雄	助教授	18. 11. 10	21. 5. 1
三川	登	教授	16. 9. 1	19. 2. 24	猿渡	元義	文部教官	17. 1. 6	21. 4. 30
早取	松若	講師	18. 3. 31	19. 6. 30	奥村	正爾	二級	16. 5. 16	21. 6. 12
与野	正則	教授	16. 3. 31	19. 8. 23	奥村	正爾	三級	18. 11. 24	21. 4. 30
与瓶	静夫	助教授	18. 8. 30	20. 1. 15	大橋	千登	講師	19. 1. 31	21. 8. 31
卜川	良一	軍事教官	20. 7. 19	20. 2. 19	鳥海	武夫	二級	14. 6. 30	21. 12. 5
大川	敏雄	教授	17. 7. 29	20. 3. 31	松原	武雄	二級	17. 2. 19	22. 3. 31
与削	達雄	"	15. 4. 19	20. 7. 23	高尾	菊雄	一校	20. 8. 29	22. 6. 20
与辺	倉之助	講師	14. 8. 31	20. 7. 2	橋本	宇一	二級	19. 1. 19	22. 8. 30
与川	富正	校長	16. 1. 29	20. 7. 17	相沢	実	二級	16. 10. 22	22. 8. 31
与辺	軍治	講師	16. 1. 8	20. 6. 10	岩田	寿郎	講師	19. 1. 4	22. 8. 31
与木	保	"	18. 3. 31	20. 10. 31	川村	文雄	"	21. 5. 21	22. 8. 31
与正	門	教授	14. 7. 9	20. 10. 22	益田	森治	"	21. 6. 30	22. 10. 31
与笠	淳雄	講師	17. 3. 31	20. 10. 31	新明	治郎	三級	20. 12. 1	22. 11. 10
与上	勇次郎	"	17. 5. 31	20. 10. 31	国司	二郎	三級	14. 9. 21	22. 12. 31
与山	義雄	教授	14. 6. 14	20. 12. 5	福井	清久	文部教官	20. 10. 29	23. 3. 18
与山	嘉雄	"	17. 1. 24	20. 10. 31	片岡	久	三級	22. 6. 30	23. 4. 15
与元	亀久男	教授	14. 11. 13	20. 12. 7	長谷川	正平	三級	21. 1. 31	23. 4. 30
与谷	金剛	"	17. 4. 20	20. 12. 16	服部	正夫	三級	21. 4. 1	23. 4. 15
与立	元衛	"	18. 3. 31	20. 12. 16	田中	晃	二級	17. 8. 10	23. 5. 10
与門	康伸	生主	17. 7. 5	20. 12. 28	森岡	貞篤	三級	21. 10. 14	23. 4. 30
与本	幸郎	講師	17. 9. 30	21. 1. 31	中村	仁	二級	21. 5. 5	23. 3. 31
与藤	文雄	"	15. 4. 1	21. 1. 31	今野	望隆	講師	21. 3. 1	23. 3. 31
与茂	正雄	"	16. 9. 1	21. 1. 31	志村	繁隆	三級	20. 9. 30	23. 3. 20
与部	貞一	"	18. 8. 31	21. 1. 31	吉久	信幸	講師	21. 7. 2	23. 9. 1
与沢	信一	"	18. 10. 30	21. 1. 31	篠原	広雄	三級	21. 8. 31	24. 4. 30

茨城大学事務局

名	退職時の職名	就年月日	職名	退職又は転職年月日	氏名	退職時の職名	就年月日	職名	退職又は転職年月日
泰祐	学務部長	24. 5. 31	長	24. 6. 29	稲田 秀義	用度係長	24. 7. 16	長	25. 5. 20
藤利	巡視	24. 10. 31	視	25. 2. 4	嶋藤 吉三	文書掛長	24. 6. 30	長	25. 5. 20
野恭子	雇	24. 7. 21	雇	25. 2. 28	佐藤 克子	雇	24. 9. 30	雇	25. 7. 31
生明法	"	24. 7. 16	"	25. 3. 31	松崎 隆	給仕	24. 9. 30	給仕	25. 7. 31

川井 徳義	雇	24.	3.31	226.	3.3	井上 勤	技官	24.	9.30	29.	1.30
山田 幽香子	"	25.	5.15	6.	3.311	田中 亀吉	雇	24.	10.31	29.	3.4
菊地 義雄	事務官	24.	7.16	26.	4.15	川又 せい	給仕	28.	9.1	29.	3.31
○大和田 正明	文書掛長	24.	7.16	26.	5.7	大嶺 とみ	炊夫	24.	5.31	29.	3.31
岡野 幸枝	雇	24.	9.30	26.	5.31	宮崎 留五郎	作業員	24.	7.16	29.	4.15
口町 信作	"	25.	7.31	26.	6.4	長山 礼子	雇	24.	7.16	29.	4.15
根本 寅吉	小使	26.	5.7	26.	9.15	○松田 政雄	文書掛長	24.	7.16	29.	5.1
○加藤 礼子	雇	24.	8.2	26.	9.20	柴沼 裕子	雇	25.	9.15	29.	6.30
山口 恵子	作業員	26.	5.7	26.	12.31	渡辺 頼子	"	25.	6.15	29.	9.18
安巳 之吉	雇	24.	6.16	27.	3.31	向手 円隆	庶務課長	27.	12.8	29.	11.5
打越 ふさ子	"	24.	9.30	27.	3.31	小田野 実	文書係長	25.	1.31	30.	2.1
檜山 明永	給仕	26.	5.7	27.	3.31	兼子 初太郎	小使長	25.	4.1	30.	2.15
石井 午太郎	清掃夫	26.	6.1	27.	3.31	長谷川又四郎	作業員	24.	5.31	30.	3.31
○寛田 玄吉	用度係長	24.	6.30	27.	4.1	○野口 豊就	調査係長	28.	6.8	30.	4.1
○佐藤 清之助	雇	24.	7.16	27.	4.17	上野 一郎	事務官	25.	7.16	30.	4.1
○松本 公志	"	26.	5.7	27.	4.1	○村山 三郎	雇	26.	5.7	30.	4.1
○吉田 六郎	備人	26.	5.7	27.	4.1	○小林 敬二	"	26.	5.16	30.	4.1
○一本 久	雇	25.	7.10	27.	4.1	○佐川 正明	"	25.	9.5	30.	4.1
○飯島 新衛	管財係長	24.	7.16	27.	4.1	金川 金太郎	巡視	24.	8.9	30.	6.30
○川井 徳次	清掃夫	26.	6.1	27.	6.16	菊地 賢	雇	24.	7.14	30.	7.19
○関口 滋次	小使	26.	5.7	27.	6.16	鈴木 常之介	"	28.	12.7	30.	7.19
荒木 五六	会計課長	24.	6.30	27.	6.30	○栗山 愛子	"	24.	7.16	30.	9.1
樫村 綏子	雇	24.	7.19	27.	6.30	○品川 暁	"	30.	6.1	30.	9.16
虎口 長松	清掃夫	26.	6.1	27.	7.1	加藤 俊夫	事務官	27.	4.16	30.	10.1
黒尾 典美	雇	26.	6.25	27.	8.31	佐藤 文一	作業員	29.	4.6	30.	10.12
○竹内 喜平	備人	26.	6.1	27.	9.16	久保田 清子	雇	26.	6.1	30.	11.15
堀江 ふみ子	常勤	27.	5.1	27.	10.1	○山口 茂	事務官	25.	2.15	31.	2.1
石原 秀夫	庶務課長	24.	7.31	27.	10.16	坏 立己	雇	30.	8.16	31.	2.29
相原 誠	備人	27.	6.16	27.	12.25	○清水 照子	"	26.	5.16	31.	3.1
星野 礼子	雇	24.	9.30	27.	12.15	大久保平三郎	"	28.	10.1	31.	3.31
○加藤 木美代	"	24.	7.16	28.	1.1	野口 重義	巡視	24.	8.9	31.	3.31
鳴海 春吉	清掃夫	24.	9.30	28.	3.31	○中山 徳行	事務官	30.	10.1	31.	4.1
浅尾 篤未	作業員	26.	1.1	28.	4.22	安見 栄	施設課長	24.	7.15	31.	4.7
○入江 美輝	総務係長	24.	6.30	28.	5.1	○中村 英夫	雇	27.	5.16	31.	9.4
戸島 勝子	雇	26.	6.25	28.	6.30	○大木 三四郎	事務官	30.	9.5	31.	9.4
柳田 不美	"	24.	7.16	28.	8.15	森島 和次	雇	28.	1.1	31.	9.16
桑名 包子	"	28.	1.1	28.	8.31	森 一	作業員	26.	5.7	31.	12.17
○生田 目徳子	備人	27.	7.16	28.	10.1	○柴沼 信子	雇	26.	6.25	32.	2.1
鈴木 京平	学長	24.	6.29	28.	10.1	宇津野由五郎	巡視	26.	5.7	32.	2.15
関田 卓郎	事務官	24.	4.16	28.	11.11	内田 英雄	事務官	30.	9.5	32.	2.28
仁平 克子	"	24.	7.16	29.	1.10	木本 秀子	雇	31.	3.1	32.	4.15

飯島とも子	"	28. 9. 1	32. 4. 30	大竹茂一	技官	25. 8. 15	33. 4. 1
吉川平太郎	事務官	25. 7. 20	32. 6. 29	橋本幸子	雇	26. 5. 16	33. 4. 1
高橋照明	雇	31. 9. 1	32. 7. 1	檜山多美江	事務員	32. 4. 11	33. 4. 1
綿引竜英	雇	30. 9. 16	32. 8. 31	加藤俊次	司計係長	24. 7. 15	33. 7. 16
飛田三郎	企画係長	30. 7. 16	32. 9. 1	鯨猛	事務員	28. 1. 1	33. 7. 16
山田益雄	事務官	26. 5. 7	32. 9. 27	飯田文弥	作業員	24. 5. 31	33. 8. 19
石塚直記	"	24. 9. 30	32. 9. 27	東竜太郎	学長	28. 10. 1	33. 9. 18
内田芳夫	"	25. 5. 15	32. 9. 27	石島謹静	事務員	31. 4. 16	33. 11. 17
島賢昭	雇	27. 9. 1	32. 10. 1	二方義	学務長	33. 9. 18	33. 12. 26
佐野高	事務官	25. 5. 31	32. 10. 6	田中米喜	局員	32. 11. 28	34. 3. 31
横須賀信彦	雇	24. 8. 9	32. 11. 8	金沢喜源	会計課長	27. 8. 16	34. 4. 1
橋本道胤	局長	24. 5. 31	32. 12. 31				

学 生 部

氏名	退職時の職名	就職年月日	退職又は転勤年月日	氏名	退職時の職名	就職年月日	退職又は転勤年月日
沼尻源一郎	(併)学生部長	24. 8. 1	29. 5. 1	袖山新一	"	4. 4. 1	29. 8. 30
酒井清一	(併)学生部長	29. 5. 1	32. 5. 1	介川貢一	"	26. 6. 25	29. 9. 1
宮田俊彦	(併)補導課長	24. 8. 1	25. 6. 26	名越二郎	教務係長	24. 9. 30	29. 4. 30
豊崎卓	(併)補導課長	25. 6. 26	26. 3. 31	桜井博信	厚生係長	25. 7. 31	30. 2. 1
鈴木正毅	(併)補導課長	26. 7. 1	29. 5. 1	桜井盈	奨学係長	5. 5. 29	30. 4. 1
定形善次郎	(併)学生課長	29. 5. 1	31. 5. 1	高島邦子	雇	24. 10. 31	30. 6. 30
林正邦	(併)学生課長	31. 5. 1	33. 4. 30	所治夫	"	24. 9. 30	31. 3. 31
中島季子	看護婦	25. 3. 15	26. 2. 28	鈴木澄江子	"	22. 11. 5	31. 5. 1
鯨岡信夫	雇	24. 9. 30	26. 5. 7	志賀倭夫	"	26. 6. 25	31. 5. 7
宮本弘	"	"	"	高市小四郎	"	21. 11. 11	31. 7. 31
中野広	厚生係長	24. 8. 3	26. 6. 15	山口茂	奨学係長	25. 2. 15	31. 8. 31
佐久間和子	雇	26. 5. 16	27. 4. 15	加藤陸郎	常勤職員	30. 4. 10	31. 12. 22
工藤栄子	炊夫	22. 11. 5	27. 4. 30	鈴木とみ子	雇	24. 12. 31	31. 12. 31
森川浩	雇	24. 8. 2	27. 7. 31	内田英雄	厚生係長	26. 5. 16	32. 2. 28
長崎憲之	厚生課長	24. 8. 31	27. 9. 15	朝比奈一彦	事務官	24. 8. 10	32. 9. 1
長野匡平	雇	24. 9. 1	28. 3. 15	一木久	雇	25. 7. 10	32. 9. 27
平山三郎	炊夫	27. 6. 16	28. 6. 30	小坪武夫	"	26. 5. 16	32. 9. 27
石川孝雄	雇	28. 4. 16	29. 1. 14	渡辺友二郎	"	27. 9. 1	33. 10. 7
				松平潔	厚生課長	27. 11. 1	34. 4. 1
				木村茂	事務官	23. 5. 31	34. 4. 1
				横山有	常勤職員	32. 3. 1	34. 4. 16

茨城大学文理学部

氏名	退職時の職名	就年月日	職日	退職又は は転勤 年月日	氏名	退職時の職名	就年月日	職日	退職又は は転勤 年月日
関原 猛夫	水高教授	15. 3. 26	24. 6. 30		石川 勤助	助手	24. 12. 31	28. 4. 30	
小泉 一郎	文部教官 助教	21. 3. 31	25. 3. 31		○丹 静子	雇	26. 5. 16	28. 4. 16	
渡辺 美知雄	"	24. 6. 30	25. 3. 31		佐藤 清之助	"	27. 4. 14	28. 3. 15	
西田 晃二郎	講師	23. 9. 15	25. 3. 31		朝倉 秀雄	文部教官 助教	24. 6. 30	28. 7. 1	
星 昭行	物理助手 雇	19. 5	25. 4. 15		○関 沢 義光	文部教官 文部事務係 會計係長	27. 4. 1	29. 1. 1	
関 泰祐	学部事務 取次	20. 10. 15	25. 4. 30		川崎 隆男	文部教官 講師	27. 4. 1	29. 5. 25	
梅本 克己	文部教官 二級	17. 10. 28	25. 5. 19		山口 弥輔	教授	25. 4. 5	29. 7. 15	
関 楠生	助教授	23. 4. 1	25. 8. 31		戸沢 秀寿	助教授	21. 3. 31	29. 12. 31	
山口 太郎	教授	24. 6. 30	26. 3. 31		渡辺 勇	教授	26. 9. 1	30. 3. 31	
滝沢 敏雄	"	25. 5. 31	27. 4. 1		渋谷 徳義	講師	27. 4. 1	30. 4. 5	
西田 正一	講師	25. 5. 31	26. 5. 1		福田 宏年	"	27. 5. 1	30. 4. 1	
西田 越郎	助教授	19. 9. 30	26. 3. 31		高 崑 邦子	雇	29. 9. 1	30. 6. 30	
寺門 孝徳	助手	21. 11. 29	26. 3. 31		羽賀 良一	文部教官 助教	15. 3. 26	30. 7. 25	
佐藤 省吾	教授	大昭 11. 3. 22	26. 3. 31		中山 俊郎	"	24. 6. 30	30. 10. 26	
柴原 定雄	講師	24. 5. 31	27. 1. 31		○瀬谷 義彦	"	25. 4. 1	30. 11. 16	
三浦 昭	"	26. 11. 1	27. 3. 31		○長山 秀子	雇	25. 7. 20	31. 3. 1	
西野 稔	"	25. 4. 2	27. 6. 27		新井 益太郎	文部教官 助教	27. 10. 16	31. 3. 31	
久保田清太郎	"	14. 6. 30	27. 5. 31		羽田 久子	雇	23. 11. 30	31. 3. 31	
広部 亮太郎	助教授	24. 6. 30	27. 8. 15		○大和田 正明	文部事務係 庶務係長	26. 5. 7	31. 8. 16	
埴藤 吉三	文部事務 官事務長	3. 4. 13	27. 3. 31		高本 研一	文部教官 講師	28. 6. 1	31. 8. 5	
館 敬司	雇	23. 11. 30	27. 3. 31		富田 真次	雇	26. 6. 1	31. 8. 31	
○稻田 秀義	文部事務 官會計係長	18. 6. 2	27. 4. 1		○朝比奈 一彦	文部事務 官	29. 9. 1	31. 9. 22	
飯村 一雄	実験実習 指導員	25. 5. 31	27. 4. 15		○青柳 正明	雇	29. 9. 1	31. 9. 22	
○湯沢 清澄	文部教官 助教	21. 12. 31	24. 6. 30		内藤 珍濟	文部教官 助教	大昭 12. 4. 7	32. 1. 11	
○山崎 芳夫	助教授	24. 6. 30	25. 4. 1		中沢 悦三	助手	15. 1. 4	32. 3. 31	
○満井 隆行	教授	24. 6. 30	25. 4. 1		高 榎 三京	"	29. 4. 16	32. 3. 31	
○高橋 栄	講師	24. 6. 30	26. 3. 31		長谷川 四郎	教授	大昭 10. 4. 25	32. 3. 31	
今井 忍	文部教官 助教	26. 4. 16	28. 3. 31		磯崎 照子	雇	大昭 31. 3. 1	32. 9. 15	
今野 望	助教授	24. 6. 30	28. 4. 16		○白土 次男	文部事務 官會計係長	29. 1. 1	32. 9. 27	
松木 豊雄	講師	27. 4. 1	28. 4. 30						
熊谷 恒雄	講師	26. 4. 6	28. 4. 30						

大石 浩	文部 事務 官	31. 9. 4	32. 9. 27	椎名 力之助	助 教 授	26. 3. 31	32. 4. 1
木村 喜久雄		28. 4. 1	33. 4. 1	河村 良吉		"	26. 5. 1
宮本 陽吉	文部 官 講 教 師	28. 9. 1	33. 3. 31	吉野 昌甫	"	28. 5. 16	34. 4. 1
				栗原 兵吾	"	26. 9. 1	34. 5. 1

非常勤講師

江見 洋甫		26. 5. 1	29. 3. 31	清水 博		29. 4. 1	30. 3. 31
岡田 忠軒		26. 5. 1	27. 3. 31	駒井 和愛		29. 4. 1	30. 3. 31
鈴木 豊次郎		26. 6. 1	27. 3. 31	神田 茂		29. 7. 1	30. 3. 31
石田 正次		26. 5. 1	30. 3. 31	薬師寺英次郎		29. 11. 1	33. 3. 31
大田 正次		26. 5. 1	29. 3. 31	ヂエームス		29. 10. 16	31. 3. 31
杉本 栄一		26. 10. 1	27. 3. 31	ニールグリーヤ			
大石 泰彦		27. 5. 1	30. 3. 31	野村 平弥		30. 10. 20	32. 3. 31
中川 善之助		26. 6. 1	27. 5. 30	桜井 武雄		30. 4. 1	32. 3. 31
久保 謙		27. 5. 1	30. 3. 31	大野 真弓		30. 4. 1	31. 3. 31
加藤 惣兵衛		27. 5. 16	30. 3. 31	中村 通夫		30. 4. 1	31. 3. 31
高橋 年次		27. 4. 1	28. 3. 31	浦口 勇三		30. 4. 1	33. 3. 31
鶴 常夫		27. 5. 1	28. 3. 31	秋田 康一		30. 10. 1	31. 3. 31
佐藤 正巳		27. 5. 16	28. 3. 31	藤原 康志		31. 5. 1	33. 3. 31
内田 亨		27. 5. 16	30. 3. 31	新井 益太郎		31. 6. 1	34. 3. 31
清水 新		28. 4. 1	30. 3. 31	村瀬 興雄		31. 11. 1	32. 3. 31
今井 忍		28. 5. 1	33. 3. 31	鶴田 四郎		31. 11. 1	32. 3. 31
岩間 徹		28. 5. 1	29. 3. 31	長洲 一二		31. 10. 1	34. 3. 31
赤松 要		28. 5. 1	30. 3. 31	早坂 一郎		32. 2. 1	32. 3. 31
古川 栄一		28. 5. 1	31. 3. 31	柴田 三千雄		32. 10. 1	33. 3. 31
宝月 圭吾		28. 5. 1	31. 3. 31	勝部 真長		32. 10. 1	33. 3. 31
小倉 謙		28. 5. 1	29. 3. 31	小笠原 慈英		33. 1. 10	33. 3. 31
藤井 隆		28. 10. 1	29. 3. 31	内田 恒久		33. 4. 1	34. 3. 31
和田 文吾		28. 10. 1	31. 3. 31	中村 英勝		33. 5. 1	34. 3. 31
大山 義年		28. 4. 1	29. 3. 31	斎藤 定良		33. 7. 1	34. 3. 31
盛永 四郎		29. 1. 1	30. 3. 31	横山 祐之		33. 11. 16	34. 3. 31

茨城大学 教育学部

氏 名	退職時の職名	就 職 年月日	退職又は転職年月日	氏 名	退職時の職名	就 職 年月日	退職又は転職年月日
田中 喜三郎	文部 官 三 教 官 級	22. 6. 30	24. 7. 20	木戸 罔子	"	22. 9. 30	25. 3. 31
菊池 みさを	"	22. 10. 31	24. 11. 30	塩 沢 勇	文部 官 教 官 訓 導	21. 3. 31	"
安藤 勝敏	"	23. 3. 31	25. 3. 1	伊豆山善太郎	教 授	24. 6. 30	25. 4. 1
鈴木 孝	"	24. 3. 31	"				

宗田 克己	文部教官	19. 1. 15	25. 4. 1	森 一子	小使	23. 8. 16	"
瀬下 照子	"	24. 3. 31	25. 8. 30	川島 恵子	作業員	23. 12. 15	"
谷津 正一	文部教官	17. 3. 31	26. 3. 31	根本 恵似	小使	21. 6. 13	"
入江 久	文部教官	21. 11. 30	"	長谷川 すい	炊事夫	22. 7. 1	"
栗又 信行	文部教官	24. 2. 28	"	堀井 いね	"	"	"
戸祭 春子	文部教官	22. 9. 30	"	宇津野 由五郎	巡視	20. 12. 1	"
木戸 清平	文部教官	23. 3. 31	26. 3. 31	松本 公志	雇	21. 6. 30	"
笹沼 ひさ	"	"	"	根本 寅吉	小使	21. 4. 1	"
藤田 とき	看護婦	23. 8. 31	26. 4. 10	吉田 六郎	作業員	22. 8. 9	"
国井 多吉	巡視	25. 2. 15	26. 4. 15	川村 繁三	農夫	24. 9. 30	26. 5. 15
新井 美世	文部教官	22. 3. 31	26. 4. 16	佐藤 忠三	小使	23. 9. 1	"
渋沢 要	文部教官	20. 3. 31	26. 4. 30	高橋 清	傭人	23. 8. 2	"
松田 崇	文部教官	22. 10. 31	"	草間 芳之助	"	25. 2. 15	"
丹羽 正美	巡視	22. 8. 9	26. 4. 30	長南 東逸	作業員	21. 11. 27	"
高谷 昇	作業員	24. 7. 15	"	伊藤 福治	雇	23. 5. 15	26. 5. 31
栗原 良子	雇	20. 9. 1	"	梅沢 賢之助	巡視	23. 1. 31	26. 7. 31
矢沢 次郎	小使	21. 10. 31	"	平久 重利	傭人	26. 4. 16	26. 10. 15
矢沢 モヨ	"	22. 3. 31	"	小林 二三	文部教官	22. 10. 10	26. 11. 5
鈴木 恵美子	給仕	24. 9. 5	26. 5. 7	前島 幸子	文部教官	22. 3. 31	27. 3. 31
中村 二三治	文部教官	22. 3. 31	"	福井 一男	文部教官	20. 9. 30	27. 3. 31
大竹 仁	"	21. 5. 18	"	江幡 とき	雇	21. 4. 15	"
大木 三四郎	"	21. 6. 18	"	飛田 源之助	小使	5. 4. 3	"
山田 益男	"	21. 4. 15	"	松田 政太郎	"	19. 9. 15	"
荒川 秀夫	雇	21. 1. 7	"	内山 寛純	"	18. 4. 15	"
菅谷 文子	"	25. 5. 31	"	友部 美恵	雇	23. 9. 30	"
前島 義三郎	文部教官	21. 6. 20	"	大谷 利彦	文部教官	24. 9. 15	"
吉岡 進一	"	18. 4. 22	"	伊藤 暢彦	文部教官	25. 5. 31	"
根本 寛	雇	21. 2. 18	"	塩川 一雄	"	21. 5. 31	"
村山 三郎	"	24. 8. 31	"	矢口 武正	"	20. 3. 31	"
広瀬 茂	作業員	22. 10. 1	"	左田本 互	文部教官	24. 5. 19	"
堀越 了	"	24. 4. 30	"	片倉 正三	雇	23. 7. 31	27. 4. 1
袖山 新一	炊事夫	4. 4	"	大野 勝治	"	22. 3. 31	"
工藤 案子	"	22. 11. 5	"	吾妻 実	"	26. 5. 1	"
石井 午太郎	"	22. 4. 22	"	郡司 治男	文部教官	23. 3. 19	27. 4. 15
				浜口 徳治	文部教官	13. 3. 19	"
				室町 初太郎	小使	23. 12. 1	"



石川 与五郎	"	23. 12.	127. 8. 15	篠塚 方子	雇	23. 3. 31	29. 10. 14
一木 千枝	文部 教	26. 4.	127. 8. 31	大嶺 武寿	炊事 大	23. 9. 26	29. 12. 15
松永 真弥	文部 事務 部 官	21. 6. 21	27. 9. 15	飯村 寅次	雇	22. 4. 1	30. 3. 31
高島 永幹	文部 助 教 官 授	24. 12. 31	27. 10. 1	吉田 四郎	文部 教 官 諭	16. 8. 31	"
石原 光子	雇	25. 5. 31	27. 11. 1	稲葉 秀夫	文部 教 官 訓 導	11. 3. 31	"
大谷 滋之助	文部 教 官 授	20. 11. 24	27. 11. 5	柄木 正雄	文部 教 官 諭	14. 5. 31	"
小林 一雄	文部 講 教 官 師	21. 11. 30	28. 3. 31	桜井 よし	文部 教 官 講 師	5. 3. 20	30. 3. 31
高野 惣太郎	文部 授 教 官	20. 9. 20	"	富永 信定	文部 教 官 授	14. 8. 18	"
広瀬 金之助	雇 (会 係 長)	22. 4. 30	"	木村 茂	雇	23. 5. 31	30. 4. 1
大貫 三千男	雇	16. 1. 8	"	狩谷 論	"	27. 5. 16	30. 4. 14
斎藤 守吉	"	18. 8. 10	"	草間 督郎	文部 講 教 官 師	25. 6. 10	30. 5. 1
高倉 知義	文部 教 官 諭	27. 4. 10	"	中野 恵美子	文部 技 官 諭 護 教	26. 7. 16	30. 8. 14
和田 正	"	24. 2. 28	28. 4. 15	加藤木 澄子	文部 教 官 諭	24. 3. 31	30. 8. 31
佐藤 武男	"	18. 4. 1	28. 4. 30	介川 早苗	雇	26. 5. 16	30. 10. 31
野口 豊就	文部 事務 部 官	23. 4. 30	28. 6. 8	佐川 正明	"	25. 9. 5	31. 2. 9
飯島 とも子	雇	27. 5. 26	28. 9. 1	飯島 新衛	文部 事務 部 官	14. 6. 9	31. 9. 4
川又 せい	給 仕 任	24. 1. 14	"	宮本 直	"	21. 11. 30	"
大久保平三郎	雇 (友 務 部 教 場 室 主 任)	22. 11. 10	28. 10. 1	安原 博純	文部 助 教 官 授	24. 7. 25	31. 10. 16
関口 滋次	小 使	23. 9. 16	29. 3. 31	鈴木 とみ子	雇	24. 12. 31	31. 12. 31
川又 丑次郎	清 掃 人	24. 1. 14	29. 3. 31	佐藤 政男	文部 教 官 諭	18. 6. 17	32. 3. 31
所 克己	雇	28. 1. 1	"	寺門 光輝	"	17. 3. 31	"
秋葉 義男	作 業 員	23. 3. 31	"	斎藤 儀重	文部 教 官 授	24. 5. 31	"
大嶺 とみ	炊 事 夫	23. 9. 26	"	檜山 多美江	雇	30. 2. 16	32. 4. 1
高久 清吉	文部 教 官 諭	21. 3. 31	29. 3. 31	藤江 恭	文部 講 教 官 師	30. 8. 1	32. 5. 15
村山 順子	文部 助 教 官 手	27. 5. 1	"	吉川 平太郎	文部 事務 部 官 長	25. 7. 20	32. 11. 25
大野 秋男	雇	6. 6.	29. 4. 10	豊田 てる子	事 務 員	30. 2. 1	33. 1. 15
名越 二郎	文部 事務 部 官	24. 9. 30	29. 4. 30	桂 近乎	文部 教 官 授	23. 10. 10	33. 2. 7
近藤 みさを	文部 教 官 諭	26. 4. 1	29. 9. 30	根本 トキエ	事 務 員	22. 3. 31	33. 3. 31
神生 朋法	文部 事務 部 官	21. 3. 1	29. 10. 1	赤根 宏	文部 教 官 諭	21. 3. 31	"
塚田 普	文部 教 官	28. 4. 1	"				

小泉利幸	"	22. 3. 31	"	茂木平八	技能員	25. 2. 15	34. 3. 31
沼尻美代	事務員	17. 5. 5	33. 4. 30	小林利男	文部教官	16. 8. 31	"
河野晴美	"	32. 11. 1	33. 9. 9	深谷千枝子	文部技官	22. 4. 15	34. 3. 31
○丹羽宏	文部技官	20. 11. 18	33. 11. 13	根本昌子	文部技官	28. 12. 1	"
○石川又雄	事務員	29. 5. 12	34. 2. 1				
山口好明	事務員	21. 12. 28	34. 3. 31				

茨城大学工学部

氏名	退職時の職名	就年月日	退職又は転勤年月日	氏名	退職時の職名	就年月日	退職又は転勤年月日
島崎勝藏	警務員	21. 3. 31	24. 6. 30	大森アキノ	作業員	23. 9. 14	25. 5. 18
南条アト	作業員	20. 10. 1	24. 8. 31	栗林美咲	"	23. 3. 31	25. 5. 18
井坂照子	"	23. 2. 13	24. 9. 20	中村千代吉	雇	15. 4. 1	25. 7. 7
日下田静江	"	22. 9. 30	24. 10. 5	○遠藤次男	文部技官	20. 10. 15	25. 7. 15
山口太三郎	文部教官	21. 10. 10	24. 6. 30	小森谷実	雇	22. 12. 31	25. 8. 31
○飯島新衛	雇	14. 6. 9	24. 7. 16	林五郎	文部教官	21. 1. 19	25. 8. 31
○安己之吉	"	14. 6. 22	24. 7. 16	坂本たつ	作業員	20. 10. 18	26. 1. 31
○上野一郎	"	24. 1. 9	24. 7. 16	蛭田義房	雇	25. 5. 31	26. 1. 15
○佐藤清之助	"	23. 4. 3	24. 7. 16	水野育雄	非常勤員	20. 2. 5	25. 11. 27
○助川勝一	"	23. 3. 31	24. 7. 16	池田吉堯	文部教官	24. 11. 30	26. 3. 31
○松田政雄	文部教官	15. 9. 2	24. 7. 16	太田信之	"	21. 6. 7	26. 3. 31
○横瀬政之助	文部教官	18. 3. 31	24. 9. 30	川上和夫	三級	21. 7. 1	26. 3. 31
伯耆信彦	雇	24. 6. 20	24. 7. 15	大塚篤	雇	22. 5. 24	26. 3. 31
岡正一	文部技官	16. 7. 2	24. 6. 30	須藤徹雄	"	23. 7. 12	26. 3. 31
鈴木正夫	文部教官	21. 5. 7	24. 11. 7	戸辺芳子	作業員	23. 3. 31	26. 3. 31
助川みつ子	雇	22. 3. 24	24. 11. 21	○広瀬茂雄	文部技官	14. 6. 14	26. 3. 31
岩瀬慶三	講師	21. 3. 31	24. 3. 31	○高橋善治	"	21. 6. 21	"
山下英男	"	21. 3. 31	24. 3. 31	○小泉英彦	"	18. 2. 24	"
茂木清文	"	23. 10. 31	24. 9. 5	○瀬谷義彦	"	22. 3. 31	"
森永卓一	"	24. 1. 10	25. 3. 31	○宇梶剛	三級	18. 9. 30	"
近藤恭三	"	23. 11. 18	24. 3. 31	塚谷武夫	二級	20. 11. 24	26. 4. 11
○核井益雄	文部技官	23. 9. 15	24. 6. 30	鈴木愛子	雇	21. 12. 19	26. 7. 16
渡辺美知夫	"	23. 4. 30	25. 3. 31	鈴木正敏	文部教官	21. 10. 7	26. 7. 1
○木村俊夫	"	17. 7. 10	24. 6. 30	瀬谷清忠	警務員	21. 4. 10	26. 10. 8
吉田勝彦	三級	22. 4. 10	25. 3. 31	官本忠	雇	22. 6. 8	26. 12. 31
関鋼次郎	"	20. 11. 12	25. 5. 6	高玉績	文部技官	20. 9. 30	26. 10. 31
水庭よ志	雇	19. 3. 23	25. 5. 16	助川徳太	雇	16. 5. 18	27. 3. 31
富田秋子	作業員	22. 9. 30	25. 5. 18	下村鉄吾	作業員	15. 4. 22	"

鈴木秋寿	工務員	17. 4. 22	27. 3. 31	南条義三	作業員	20. 10. 1	30. 2. 15
村山あ	雇	23. 6. 7	"	山田清吉	技術員	21. 4. 24	30. 3. 31
黒沢嘉	"	19. 4. 19	"	町野こ	作業員	22. 10. 30	"
広瀬重吉	"	14. 6. 29	"	川崎陸男	講師	29. 5. 26	"
黒沢源吉	警務員	19. 10. 20	"	瀬谷伊勢次郎	作業員	23. 10. 23	30. 6. 9
助川幸恵	雇	23. 12. 10	27. 3. 31	鴨志田淳子	雇	24. 1. 10	30. 12. 15
有賀久	助手	26. 6. 1	"	磯崎美登里	"	21. 2. 4	31. 4. 30
原田貞江	文事務官	14. 5. 31	27. 4. 1	市毛進	助手	26. 11. 16	31. 8. 31
田村豊造	文部教官	18. 9. 20	20. 8. 9	藤村理人	"	27. 4. 1	31. 10. 1
東出英一	助手	27. 9. 1	28. 4. 30	福士昌子	雇	19. 3. 23	31. 12. 31
古沢佑行	雇	26. 4. 16	28. 4. 16	綿引みよの	"	20. 4. 20	31. 12. 31
青木茂	文事務官	23. 6. 7	28. 5. 1	瀬谷ヒデ子	"	20. 4. 10	"
長畑康夫	助教授	21. 4. 20	29. 5. 15	川上秀雄	"	27. 5. 26	"
小野訓	雇	26. 5. 1	28. 4. 30	田中隆平	"	16. 10. 1	32. 3. 31
渡辺彦	助手	25. 5. 15	28. 3. 31	安宅彦三郎	教授	21. 3. 31	32. 4. 1
斎藤良平	工務員	19. 2. 15	28. 3. 31	安藤良夫	非常勤講師	30. 4. 1	31. 3. 31
木内俊二	助教授	21. 3. 27	28. 7. 16	大和田幡市郎	"	30. 4. 1	"
橋本治久	助手	27. 4. 1	28. 10. 31	小林勇二	雇	32. 2. 1	32. 8. 31
酒主義照	文事務官	22. 9. 30	29. 1. 1	大貫万吉	用務員	15. 10. 27	32. 9. 30
大森侃	雇	28. 7. 16	29. 3. 31	原田幸夫	教授	20. 11. 26	32. 10. 16
千田アヤ子	"	21. 4. 14	29. 1. 31	斎藤宮二	助教授	15. 3. 11	32. 10. 16
佐藤孝雄	助手	28. 10. 16	29. 4. 15	根本球江	事務員	23. 4. 9	32. 10. 31
小川鼎	警務員	21. 3. 31	29. 6. 13	田代亀之助	用務員	18. 9. 15	33. 3. 31
大高和子	雇	20. 5. 28	29. 5. 31	菊地保平	"	23. 10. 7	"
瀬谷すみ江	"	19. 3. 23	29. 8. 15	松田正一	教授	21. 4. 15	33. 7. 15
松下朝夫	助教授	21. 3. 12	29. 5. 15	徳江洋子	助手	32. 4. 1	33. 6. 16
久下谷いつ子	事務見習	19. 3. 23	29. 8. 31	山口正夫	事務員	27. 7. 16	32. 10. 31
塩田信雄	講師	22. 4. 10	29. 9. 10	都崎雅之助	教授	22. 6. 28	33. 12. 26
助川新一	警務員	17. 3. 1	29. 10. 31	浜野治人	講師	23. 7. 6	33. 12. 31
柿本豊子	雇	23. 4. 17	30. 1. 25	宮本愛子	事務員	21. 3. 10	34. 2. 5
				高瀬あけみ	"	33. 11. 1	34. 3. 7
				吉谷竜一	助教授	27. 4. 1	34. 3. 10

茨城大学農学部

氏名	退職時の職名	就年月日	退職又は転職年月日	氏名	退職時の職名	就年月日	退職又は転職年月日
鈴木慶康	雇	25. 3. 31	27. 7. 19	鴻巣均	雇	27. 5. 16	27. 8. 31

本橋 定直	備 人	27. 5. 16	27. 9. 23	木村 節子	備 人	26. 6. 14	31. 6. 30
大井 澄雄	助 手	25. 4. 30	宇都宮大 学へ転任 27. 12. 1	嶋村 雅三郎	助 教 授	23. 12. 5	31. 7. 15
長倉 義夫	教 授	25. 5. 31	27. 9. 30	大野 勝治	雇	22. 3. 31	32. 3. 31
片倉 正三	雇	23. 6. 2	28. 3. 31	田中 貞次	農学部 教 授	24. 12. 24	32. 3. 31
杉原 一男	実 験 員	27. 8. 16	28. 4. 30	榑原 儀昌	備 人	27. 4. 1	32. 3. 31
桐原 良賢	"	28. 7. 16	28. 12. 15	小松沢 正徳	雇	27. 5. 16	32. 4. 1
橋本 喜久也	助 手	27. 4. 16	28. 5. 81	鈴木 よ志の	備 人	28. 2. 1	32. 6. 30
工藤 きよ	備 人	25. 3. 31	28. 10. 15	多田 栄子	雇	25. 1. 31	32. 9. 30
板垣 金吾	"	25. 3. 31	28. 12. 31	金子 昭二	技 術 員	27. 4. 1	32. 10. 31
釘田 芳文	助 手	28. 3. 16	29. 5. 31	木村 滋子	技 能 員	30. 4. 1	33. 3. 31
松浦 正	雇	25. 3. 31	29. 1. 31	古橋 栄一	技 官	25. 11. 30	施設課に 配置換 33. 4. 1
川島 正彦	助 教 授	25. 3. 31	高知大学 へ配置換 29. 1. 31	金光 達太郎	助 教 授	28. 4. 1	千葉大学 に配置換 33. 4. 1
和知 通男	雇	25. 10. 31	29. 12. 31	大原 嘉典	助 手	28. 7. 16	33. 4. 15
桜井 博信	事 務 官	25. 7. 31	30. 2. 1	藤田 一二三	教 務 員	29. 3. 2	33. 7. 31
堀米 隆男	助 手	26. 4. 10	宮崎大学 へ出向 30. 3. 16	湯原 すい子	用 務 員	31. 7. 20	33. 12. 31
栗田 富次	"	25. 7. 1	30. 6. 30	飛田 三郎	事 務 長	30. 7. 16	東京工大 へ出向 34. 1. 1
谷口 軍次郎	備 人	21. 11. 5	30. 3. 31	池田 静喜	事 務 長	24. 10. 31	34. 2. 28
松井 久恵	雇	24. 11. 30	31. 3. 31	中原 重樹	農学部 教 授	25. 8. 31	34. 3. 13
小倉 正	備 人	27. 5. 1	31. 3. 31				
宮崎 ちか子	雇	25. 3. 31	31. 4. 30				

付 属 図 書 館

氏 名	退職時 の職名	就 職 年月日	退職又 は転職 年月日	氏 名	退職時 の職名	就 職 年月日	退職又 は転職 年月日
橋本 道昭	雇	24. 8. 31	26. 4. 15	関口 貞之	"	27. 9. 1	30. 4. 15
小林 四郎	"	20. 7. 31	26. 6. 15	小森 三枝子	"	28. 11. 1	30. 10. 31
加藤 礼子	"	24. 8. 2	27. 1. 31	大木 三四郎	事 務 官	21. 6. 18	31. 9. 4
前島 義三郎	庶務係長	21. 6. 20	27. 4. 1	長崎 浪音	雇	26. 5. 16	31. 10. 31
荒川 秀夫	雇	21. 1. 7	27. 4. 15	広木 伸行	"	26. 5. 16	32. 10. 1
笈田 玄吉	庶務係長	21. 2. 16	28. 2. 15	橋本 幸子	"	26. 5. 16	33. 11. 13
高木 邦夫	図書係長	25. 9. 15	28. 3. 31	入江 美輝	事 務 長	21. 3. 31	34. 2. 28
渡辺 泰行	雇	27. 5. 16	28. 4. 16	山野 義彦	雇	26. 5. 16	34. 3. 31
大越 親	事 務 長	27. 4. 1	28. 5. 1	小川 泰	(併)館長	24. 8. 1	34. 3. 31
内藤 智恵	雇	26. 5. 16	28. 5. 15	金沢 源	事 務 長 事務取扱	34. 3. 1	34. 3. 31

茨城大学工業短期大学部

氏名	退職時の職名	就職年月日	退職又は転職年月日	氏名	退職時の職名	退年月日	退職又は転職年月日
荒又光夫	教授	31. 4. 16	32. 7. 16	中山淳一	助手	32. 4. 1	33. 4. 1

現 職 員

昭 34. 5. 31 現在

		氏 名	官 職 名	異 動 年 月 日
学	長	都 崎 雅 之 助		昭 33. 12. 19
評 議 員		都 崎 雅 之 助	学 長	33. 12. 19
		中 村 巳 喜 夫	文 理 学 部 長	33. 6. 1
		二 方 義	教 育 学 部 長	33. 6. 1
		真 野 克 巳	工 学 部 長	34. 3. 1
		広 沢 吉 平	農 学 部 長	34. 3. 31
		大 場 千 秋	文 理 学 部 教 授	32. 6. 17
		沼 尻 源 一 郎	"	33. 11. 20
		津 田 隆	"	32. 6. 17
		櫻 村 勝	教 育 学 部 教 授	32. 6. 17
		磯 貝 信 太 郎	"	32. 6. 17
		大 野 成 雄	"	32. 6. 17
		井 原 敏 男	工 学 部 教 授	32. 6. 17
		兼 先 覚 二 郎	"	34. 3. 1
		西 野 吉 次	"	32. 6. 17
		青 山 虎 彦	農 学 部 教 授	34. 3. 31
		佐 藤 正 一	"	32. 6. 17
		久 池 井 忠 男	"	32. 6. 17
名 譽 教 授		鈴 木 京 平 次		32. 5. 31
		田 中 貞 次		32. 6. 20
		長 谷 川 四 郎		32. 6. 20
		東 龍 太 郎		34. 2. 19

事 務 局

氏 名	官 職	職 名	任 用 年 月 日	所 属
藤 田 忠	文 部 事 部 官	事 務 局 長	昭 34. 4. 1	
藤 沢 孝 三 郎	"	庶 務 課 長	29. 11. 5	庶 務 課
森 田 誠	"	庶 務 課 課 長 補 佐 (併) 人 事 係 長	18. 5. 10	"
鈴 木 弘 文	"	庶 務 係 長	24. 9. 5	"
宮 本 直	"		21. 11. 30	"
長 洲 勝 也	"		28. 2. 23	"

多	滿	事務員		昭	32.	2.	16	庶	務	課
井	綾	技能員			22.	11.	5		"	
藤	みさ	"			27.	9.	1		"	
上	広	用務員			32.	9.	26		"	
根	盛	文部事務官			25.	7.	10		"	
江	保	"			26.	6.	25		"	
木	仲	"			26.	5.	16		"	
田	幸	事務員			18.	4.	25		"	
沢	佳	"			29.	7.	16		"	
	好	"			31.	9.	16		"	
	武	"			33.	4.	1		"	
藤	次	文務事務官	文書係長		20.	10.	15		"	
木	文	"			28.	12.	7		"	
田	玲	技能員			26.	6.	1		"	
部	満	"			27.	5.	16		"	
井	美	用務員			32.	9.	26		"	
田	千	文部事務官	調査係長		30.	6.	1		"	
坪	武	事務員			26.	5.	16		"	
田		"			31.	5.	10		"	
田	紀	"			34.	4.	1		"	
木	清	文部事務官	会計課長		34.	4.	1	会	計	課
藤	善	"	会計課長補佐		19.	10.	31		"	
川	鉄	"	(併)総務係長		28.	8.	1		"	
井		"			21.	6.	15		"	
司	仁	事務員			31.	5.	10		"	
泉	八	"			28.	12.	7		"	
熊	美	技能員			26.	6.	1		"	
川	千	非常勤			34.	3.	9		"	
川	昭	文部事務官	司計係長		24.	8.	8		"	
津	武	"			26.	6.	1		"	
又	岸	事務員			31.	7.	16		"	
瀬	綾	"			24.	8.	8		"	
	規	常勤			33.	4.	7		"	
倉	公	文部事務官	出納係長		27.	12.	16		"	
井		"			24.	9.	30		"	
辺	友	"			27.	9.	1		"	
谷	文	事務員			25.	5.	31		"	
田	隆	"			27.	9.	1		"	
津	民	"			30.	6.	1		"	
引	礼	"			32.	10.	11		"	





青木	谷村	心俊	め男	用務員		昭 25. 2. 28	課
木村	村藤	五充	月充	"		31. 1. 20	"
左藤	田美	健代	子雄	"		30. 9. 16	"
冢丸	比奈	一詮	彦司	常勤	施設課長	30. 11. 11	"
石丸	比奈	詮澄	江郎	文部技官	企画係長	30. 2. 16	"
胡比	藤木	澄太	元雄	文部事務官		30. 12. 28	施設課
後藤	本信	茂民	一弘	文部技官		24. 8. 10	"
冷水	本信	茂民	一弘	文部技官	技術課長	26. 4. 10	"
水度	本信	茂民	一弘	文部技官		22. 11. 5	"
竹古	功幸	黒田	一吉	文部技官		27. 6. 1	"
功幸	黒田	一吉	一吉	"		24. 9. 30	"
黒田	一吉	一吉	一吉	"		28. 3. 1	"
一吉	一吉	一吉	一吉	"		25. 11. 30	"
一吉	一吉	一吉	一吉	技 能 員		23. 3. 31	"
一吉	一吉	一吉	一吉	技 術 員		28. 1. 1	"
一吉	一吉	一吉	一吉	技 術 員		31. 5. 10	"
一吉	一吉	一吉	一吉	技 術 員		28. 1. 1	"
一吉	一吉	一吉	一吉	技 術 員		33. 10. 6	"

学 生 部

氏 名	官 職	職 名	任用年月日	所 属
原 道 博	文 部 教 官	(併)学生部長	昭 23. 9. 1	
岡 健 次 郎	文 部 教 官	(併)学生課長	21. 11. 20	
問 徹 三 夫	文 部 事 務 官	厚生課長	34. 4. 1	
田 芳 夫	"	庶務係長	25. 5. 15	
越 兵 司	"	学生係長	28. 2. 1	
口 豊 就	"	厚生係長	23. 4. 30	
沢 光	"	奨学係長	5. 5. 19	
内 美 智 子	事 務 員		24. 8. 12	学生課・庶務係
繩 公 子	"		33. 4. 1	"
木 弘 安	"		34. 5. 11	"
須 賀 清 昭	文 部 事 務 官		26. 5. 16	学生課・学生係
野 一 郎	事 務 員		24. 1. 9	"
尻 直 行	教 務 員		30. 12. 16	"
山 德 子	文 部 事 務 官		30. 10. 1	厚生課・厚生係
井 敦 子	事 務 員		23. 3. 13	"
名 仁	"		33. 10. 1	"

三村利行	事務員	27.	5.	26	厚生課・厚生係
菅谷きく	技術員	25.	1.	31	"
大野秋男	技能員	23.	4.	1	"
長山啓子	"	27.	6.	16	"
杉善子	"	31.	5.	10	"
田崎正	用務員	34.	4.	16	"
鈴木勇禎	文部事務官	23.	8.	30	厚生課・奨学係
佐藤泰典	"	24.	9.	5	"
山本とし枝	事務員	23.	11.	9	"
土井正治	文部事務官	24.	7.	15	入試事務室
為我井正明	"	27.	9.	1	"
飯島新衛	"	14.	6.	9	休職中

常勤職員

文 理 学 部 (教 官)

氏 名	官 職	職 名	任 用 年 月 日	所 属
中 村 巳 喜 夫	文 部 教 官	(併)学部長	大 13. 9. 30	文 学 科
石 原 道 博	"	教授(文博)	昭 23. 9. 1	
市 野 沢 寅 雄	"	"	大 11. 4. 11	
大 場 千 秋	"	"	昭 4. 4. 6	
小 川 泰 一	"	"	大 14. 5. 6	
北 沢 孝 一	"	"	昭 22. 2. 14	
桜 井 益 雄	"	"	24. 6. 30	
島 田 雄 次 郎	"	"	22. 2. 28	
島 野 林 藏	"	"	24. 6. 30	
原 健 忠	"	"	21. 3. 30	
広 瀬 茂 雄	"	"	25. 4. 1	
福 富 啓 泰	"	"	24. 6. 30	
星 川 清 孝	"	" (文博)	21. 3. 30	
宮 田 俊 彦	"	"	21. 3. 31	
山 口 正 秀	"	"	24. 6. 30	
山 本 正 憲	"	"	20. 6. 18	
赤 尾 勇 一 夫	"	助 教 授	29. 2. 1	
安 野 光 治	"	"	27. 4. 1	
石 黒 正 二 郎	"	"	24. 6. 30	
市 野 一 郎	"	"	24. 6. 30	
大 野 録 郎	"	"	26. 6. 30	
大 田 忠 軒	"	"	25. 12. 2	
岡 田 忠 夫	"	"	27. 5. 16	
小 野 寺 和 子 郎	"	"	30. 10. 1	
菊 地 壬 子 郎	"	"	25. 10. 30	
北 垣 篤 夫	"	"	24. 6. 30	
窪 田 鎖 夫	"	"	26. 4. 16	
黒 岩 嘉 納	"	"	24. 6. 30	
黒 沢 博	"	"	25. 6. 15	
小 泉 竜 雄	"	"	28. 4. 1	
小 田 良 亨	"	"	26. 4. 6	
折 城 常 三	"	"	31. 4. 16	
豊 崎 卓 郎	"	"	24. 6. 30	
三 浦 一 郎	"	"	25. 3. 31	
井 口 濃	"	講 師	34. 4. 1	
小 野 寺 健	"	"	32. 4. 1	



高橋弘毅	文部教官	"	昭 33. 4. 1	理 学 科
荷見守助	"	"	30. 4. 16	"
宮本弘	"	"	27. 8. 1	"
伊豆山善太郎	"	教 授	13. 4. 30	政 経 学 科
桐田尚作	"	"	28. 4. 16	"
国松久弥	"	"	27. 4. 16	"
佐々木専三郎	"	"	26. 4. 16	"
高木 皖	"	"	21. 3. 30	"
津田 隆	"	"	25. 3. 31	"
大川政三	"	助 教 授	29. 4. 1	"
木戸田四郎	"	"	27. 4. 1	"
木下 明	"	"	24. 7. 31	"
小林三衛	"	"	26. 4. 6	"
小桜井明俊	"	"	26. 4.	"
関 誠 一	"	"	25. 4. 1	"
永田 忠 哉	"	"	24. 6. 30	"
藤村 通 仁	"	"	28. 8. 1	"
古田 保 興	"	"	29. 1. 1	"
横山川 郁 男	"	講 師	24. 6. 30	"
石川地 幹 三	"	"	29. 4. 1	"
倉地井武雄	"	"	32. 4. 1	"
桜井井邦夫	"	"	34. 4. 1	"
武井松司叙	"	"	32. 4. 1	"
村本 吉 人	"	"	34. 4. 1	"
山本 直 一	"	非常勤講師	31. 4. 16	"
庄 莖 盛 行	"	"	32. 4. 1	文 学 科
長 莖 重 行	"	"	"	"
藤田重行	"	"	"	"
ダニエル・ペリ	"	"	"	"
篝 益 一 夫	"	"	"	理 学 科
浅野 豊 秀	"	"	"	政 経 学 科
横山 辰 夫	"	"	"	"
岡田 憲 樹	"	"	"	"
吉野 昌 甫	"	"	"	"
羽 石 大	"	"	"	"

文 理 学 部 (事務職員)

氏 名	官 職	職 名	任用年月日	所 属
原田貞江	文部事務官	事 務 長	昭 26. 4. 1	
大竹 仁	"	庶 務 係 長	26. 5. 7	
石塚 直 記	"	会 計 係 長	32. 9. 27	

鯨岡信夫	事務員	教務係長	昭 26. 5. 7		
一木久郎	文部事務官		32. 9. 27	教 務 係	
大木三四郎	"		31. 9. 4	"	
山田勝義	"		25. 5. 20	"	
園部精	"		28. 1. 1	会 計 係	
島賢昭	事務員		32. 10. 1	庶 務 係	
笠井隆	"		27. 9. 1	教 務 係	
渡辺泰行	"		28. 4. 16	会 計 係	
鈴木恵美子	"		26. 5. 7	庶 務 係	
武藤みつ子	"		28. 4. 16	会 計 係	
品川暁	"		30. 9. 16	教 務 係	
吉田多美江	"		32. 4. 1	庶 務 係	
秋山清吉	技 術 員		25. 5. 15	物 理 教 室	
岡崎武司	"		27. 5. 1	化 学 教 室	

教 育 学 部 (教 官)

氏 名	官 職	職 名	任用年月日	所 属
二方義太郎	文部教官	(併)学部長	昭 26. 10. 1	
磯貝信太郎	"	教 授	20. 9. 6	教 育 心 理
木村俊夫	"	助 教 授	17. 7. 10	"
林正邦	"	"	27. 4. 16	"
岡山超	"	"	24. 7. 31	"
中原弘之	"	助 手	29. 4. 1	"
今宮千勝	"	非常勤講師	32. 9. 1	"
樫村勝義	文部教官	教 授	15. 10. 4	教 育
二方健道	"	"	26. 10. 1	"
小林誠	"	"	21. 11. 22	"
小戸和男	"	助 教 授	22. 6. 25	"
秋山時中	"	"	16. 9. 12	"
大谷勤	"	"	23. 4. 30	"
関久吉	"	講 師	27. 6. 16	"
高土清樹	"	"	33. 4. 1	"
天土春一	"	非常勤講師	29. 4. 1	"
酒井清義	文部教官	教 授	9. 10. 8	人 文 科 学 教 育
塚本勝義	"	"	16. 3. 31	"
関敬義	"	助 教 授	15. 4. 30	"
金沢直人	"	"	16. 12. 31	"
桜井富次郎	"	非常勤講師	22. 7. 31	"
梅崎秀雄	"	教 授	22. 3. 31	"

## 工業短期大学部（事務職員）

氏名	官職	職名	任用年月日	所屬	
本間保三	文部事務官	(併)事務長	昭 32. 11. 1		
大和田正明	"	総務係長	31. 8. 16		
矢島三郎	"	学務係長	32. 11. 16		
岡野進	事務員		31. 5. 21		学 務 係
斎藤淳一	"		31. 9. 10		総 務 係
小沼信利	"		33. 4. 1		学 務 係
大森士富	用務員	作業員	31. 6. 1	総 務 係	

# 寄稿

## 茨城大学創業時代の回顧

鈴木京平

前古未曾有の大困難で物資は欠乏、財政は窮乏、国民思想また混沌を極める最中に、敢て教育制度の大革新を断行し、国立大学を全国各地に設立したのは、広く全国民に大学教育の機会均等を与えて、地方文化の発達を図り、日本国全体としての文化水準を高め、新しい民主平和の文化日本を建設し、国際場裡に雄々しく立ち上らんとする国民的熱意に燃えたからである。

茨城大学も、実に、この国民的熱意の所産である。米国近代文化の向上発展は、各地に有力な大学があって、世界的の学者、教育家が居り、これ等各大学が、その地方文化の中心となり、地方の学問、知性の源泉となって、各地方文化が大いに向上発展したのが、その大きな原因であるといわれる。

この意味から茨城大学は、国立大学であると同時に、また茨城地方の大学として、県民の知性の源泉、文化の中心となって、この地方の教育、政治、経済、産業、その他、精神的、物質的の文化の向上発展に寄与、貢献すべき重大使命があり、これに因ってまた日本文化の興隆となる。創立当時、在学生の八割を本県人で占めた事実から見ても、茨城大学の盛衰、消長は本県文化の夫れを示し、この大学の実情を見て、本県文化の程度が察知されると申して、敢て過言でないと思う。

明治維新後、僅か半世紀間に、日本を近代的国家に仕上げ、世界を驚嘆させた明治文化興隆の精神的要因となった水戸文化の発祥の地であり、日本教育文化の一中心地として我国の文化史上に一異彩を放った山緒の地に創設される大学の創業に關与し得た時の、私の感慨と覚悟は、一言で尽せぬが、これを特色ある有力大学に育成し、世上、よく見受ける知識に偏する機械の様な人でなく、真の全人的有為の人材を輩出して、この山緒の地に、新時代の日本文化



の華を咲かせねば相すまぬと、大学関係者は鞏固な決意の下に全学協力一致、事に当った。然し戦災直後の建物、物資の欠乏のため、当事者の苦心は甚大であった。新制大学教育の一大特色である人物養成の為に重要な一般教養科目の教育を行う場所に困り、不完全でも、旧陸軍三十七部隊兵舎の古建物を利用する外なく、当時、大学を訪れた米国人が、大学の寄宿舎を馬小屋と間違えた笑えぬ話さえあった。

更に重要、而も困難な大問題は、戦災後、土浦に落ち着いて居た教育学部の水戸移転であった。全人的人物の育成上には、多くの学部を近所に集めて、所謂、総合大学方式の教育施設が理想的であるが、当時は、全然、不可能で、せめて文理学部と教育学部を水戸に集め、それで幾分でも、一般教養学科の教育効果を挙げようと考えたが、移転には、教育学部の教授中にも異論があり、旧御範同窓の一部にも反対があり、更に土浦市及び県南、市町村民中にも、不満があつて、一時は、政治問題化の恐れさえあった。或る時の教授会での賛否両者の論争の情景は、水戸志士達の昔を忍ばせるものがあつたが、流石は教育者、一旦、氷解した後の明朗さは、また格別で、学内の平静化につれて、外部の反対運動も自然に消滅したことは、教育上誠に幸のことであつた。

当時、大学教育の重大関心事の一つは、思想問題で、各地の大学に自治会が出来、東京に全学連が結成され、後者の指令一本で、各地の大学自治会が、種々の学生運動を起し、学生騒動が流行し学生雲助論、大学無用論など極端な悪評で新聞雑誌等のマスコミを賑わしたものである。

茨城大学の学生代表達は、屢々学長室に来て、自治会の結成を要請した。然し、学長は、自治会と云う名称に不満で、何時も、之れに同意しない。その理由は、学長自身は、日本に於ける学生自治会の創始者の一人で、四十余年前に今の東京工大の前身、藏前高工二年生時代に、生徒自治会を作り、当時は、学校当局は勿論、生徒の一部からさえ大いに問題視されたが、眞の人物の育成は自主、自覚による自由意志を以て自己を啓発するにあるとして、不合理な干渉や、外部の指令等を排除し、自律、自治で大いに活躍し、学校当局も遂に多大の信頼を寄せるに至つた。然し戦後の大学自治会の多くは、全学連の指令によ

って動き、少しも自主、自治性が見られない。学長自身は学生自治を大いに歓迎するが、当時流行の自治会という名称を用いて、他の大学の夫れと混同されることは甚だ好まない。その名称を他の大学と異にして、その実は学生の絶対自治を希望したからである。尙お将来は茨城大学の学生会から指令を出し得る様な権威ある学友会にしたいものと提案して、学生代表達の大賛成を得たことがある。後に大学生の投票地問題で、水戸の学生が、選挙管理委員会を相手取って勝訴し、各地の大学生を喜ばせ、恰も水戸の大学から指令を出したかの感あらしめたのは、誠に忘れ得ぬ快心事であった。

破防法問題で、各地の大学が騒いだ際も、私は、一応政府を信じて結果を見た上で、諸君が現在、危懼する如き悪法が作られた時は、学長自ら先頭に立って之れに反対する。後に続いて呉れと約束し、学生諸君は喜んで同調してくれた。また、行く先々の大学で問題を起した米国の老視學員イールズ博士は、茨城大学の視察には、騒擾を予期して来学したが、学生達の泰然たる態度に驚き、寧ろ不安をさえ感じて帰ったと言うことが、後日、同氏について来た通訳員の話でわかった。斯くの如く当時の茨城大学の学生気質が、どこか、他の大学のそれと異なる所があったのは、誠に頼もしい限りであった。

ただ、当時茨城大学には、左翼学生党員が三十数名も居り、尙お教授の中にも、共産党員があって、一方にまた、寄宿舍の近くには、二二六事件で有名な右翼の指導者が在住し、更に、また、市の中央には、多数の右翼志士の墓で有名な某寺がある。斯る環境下で、若し全学生が左右両派に分れ、学内で争えば、教育上、由々しき事態が発生すると、学長は常に自ら進んで、全学生に屢々接する機会を作り、談笑の中に、互に意志の疏通に努め、当初は、少くも、月一回は全学生に講堂で所信を訴え、講演の主なるものを小冊子に収録し、『真の自由人』と名づけて、学生に配布する等、学生補導には、多大の苦心を払ったものである。

然し最も幸なのは、本県当局者及び民間識者各位のこの大学の国家的、地方的使命の重大性に関する深い認識は、一般県民諸君の教育文化に対する伝統的熱情と相まって、大学の育成に絶大な関心が寄せられたことで、大学設立期成

会が組織され、県庁内に事務局を常設し、専任事務員を置く等、物、心の両方面から多大の援助を惜まず、旧兵舎内の教室の改造、大学本部の建物及び学生図書館の新築、理化学実験室の整備、充実に或は優秀な教職員誘致の為の住宅の建設、また民間の常陽銀行からは経済研究室の寄贈、或は、大学の近接地に県立体育館を設立して、大学生の利便に供する等、巨額の経済的援助を以て国立大学の創設に協力され、当時国立大学創設に地方費を投じた全国、都府県中で、本県は岡山県に次ぎ第二位といわれ、この民間の熱意は文政当局を動かして、その後の国営施設を促進せしめたのである。私共、大学当局は全く感謝感激の至りで、之れに応える為めには、学術の教授、研究の指導は勿論、学生の補導、厚生施設の運営に教職員、学生の別なく、全学一致協力、常にその理想目標たる全人教育の万全を期し、豊かな学風が徐々に興り、立派な伝統が自然に築かれて行くと共に、教官諸氏は、また、各々その道の深い研究者として常に人類文化の進歩向上に寄与貢献し、将来、特色ある有力大学となる様に努力精進したいものと教職員、学生一同強い信念に燃えたものであった。

創立十周年、任を退いて満五年余、往時を追想して感慨無量、今尚お本学の健全なる発展を祈念して止まぬ熱情の、愈々切なるを覚え、茲に創業時代、常に直接、学長輔佐の重任にあった沼尻学生部長、橋本事務局長並びに本部、各学部に於て労苦を共にせられた教職員各位に対し、心からの感謝を捧げて筆を擱くことにする。(初代学長)

## 思 い 出

東 龍 太 郎

茨城大学十年の歴史の半分にあたる五年が思い出の中にあるわけだが、どうしてこのような機縁が生じたのか、考えてみれば、人生の行路には予期もせず期待もせぬことが起こるものである。かって厚生省医務局長に就任した直後に「運命の転轍手」と題して随想を綴ったことがある。軌道を走る車の行く先がポイントを切り替える転轍手によって左右されるように、人の一生も「運命」

という名のポイントマンの手中にあるようなものと、過去の履歴の右往左往を顧みて述懐し、これから後も未知の処女路線の上を走ることだろうが、どうか脱線顛覆の憂き目を見ることもなく、オールストップの赤信号が出るまで無事に走り続けたいものと希ったのであった。

昭和二十八年三月に東京大学を定年制の申し合せによって退いてから半歳の後、選ばれて茨城大学長の職に就いたのであるが、それまで本学とは全く無縁の存在であり、旧水戸高等学校にも茨城県にも水戸市にも何のゆかりもない者が、簀から棒に就任したのであるから、これもまた「運命の転轍手」の気まぐれという外はない。かくて東原町の大学宿舍の二階をねぐらとして学長室に納まること満五年、文字通り大過なくその務めを果たすことができたというのも学の内外からの寛容な支援があったからこそである。静かに落ち着いた水戸の住み心地が、今では何よりも慕わしい思い出となり、上野駅に立ち寄るごとに、利根の流れ—筑波の山肌—霞カ浦の白帆と、思いは常磐線に沿って走るのである。

さて在任五年の間に一体どれだけのことを大学のために為し得たであろうか？ と振り返ってみると、まことにお恥かしい次第で、これといって眼をみはるだけのことは何もない。ただ時の流れと共に、自然にそして無理をせずに、牛の歩みにも似た slow but steady な発展を期しただけである。従って今さら改まってこの十年史に書き残したいようなこともないが、ただ一つ、五浦研究所設立の経緯は知ってもらいたいと思う。

学長就任後間もなくのことであったと思うが、五浦の岡倉天心旧居が大分荒廃に帰して、雨漏りなども修理の手が届かぬ状態にあるということを知ったので、一日機を得て橋本事務局長等を伴って視察に出かけた。噂に違わぬ形勝の地であり、日本美術院発祥の地として文化史上にも由緒のあるところ、六角堂の巖頭に荒波のしぶきを浴びて「重細画は一なり」と口ずさぶ先覚天心先生の面影を偲びながら、いかにも荒れるに委された姿を見て、これは何とかして永久に保存せねばならず、それには国有財産とするのが最善の策と考えた。そこでこの土地建物の所有権につき調べてもらったところ、それは天心遺蹟顕彰会

という財団法人であり、横山大観画伯が理事長として全権を握っておられることがわかった。こうなれば、てっとり早く大観画伯に直談判をするに限ると思つたものの、生憎画伯とは一面の識もなく、その上あの鋭い気性から考えて、一旦つむじを曲げられたらどうにもならないことは明らかである。そこでまず話の切り出しが大切と慎重を期して、画伯とも親しい浅野国立博物館長に下相談をしたところ幸いにも全幅の賛意を表して紹介の労を約された。かくてある冬の朝、橋本事務局長を帯同し、浅野館長に伴われて池の端の横山邸を訪れた。炉辺に招じられて初対面の挨拶を終るや、短刀直入、五浦の天心遺蹟顕彰会の全財産を無償で茨城大学に譲り受け、国有財産として永久に保存管理したい旨を申し入れた。これに対して、大観画伯は終始にこやかな微笑を以て耳を傾け、一言以て快諾、なお理事長の専決を以て財団法人の意志と誼承の上即刻事務的処理を進めるようにと激励された。まことに案ずるよりは産むが易く、事は一瞬にして決した。この信頼と好意とは今でも上々無類の後味を以て又擧することができる。

その後は財団法人の解散や文部省の寄付受理手続などに多少の時日を費やし、その間しばしば大観画伯の方から督促を受けるような始末であったが、遂に茨城大学五浦研究所として受入体制が整ったのである。大観画伯はこの移管実現をこよなく喜んで、そのうち機を見て、天心先生旧居の一室でゆっくりと夏の夜を語り明かしたいもので、その準備設営などは万端こちらに委せてほしい、とまで楽しんでおられたのに、不幸にして病気のためにこの計画は実現の望をみることなく、画伯の逝去によって夢と消え去ったのは、かえすがえすも残念である。(前学長・東京都知事)

# 年 輪

今 井 宏

十年一昔とはまことに月並みな表現であるが、やはり何らかの形で思い出めた感想をしるすとなると、このごく平凡な言葉がまず念頭に浮かんでくる。何年ぶりに訪れた大学はあまりにも昔と変らぬ姿であった。もとよりあそこがこう、ここがこうと部分々々を切り離してみるならば、そこにはいくつかの変貌を認めることはできる。だが門をくぐった途端の第一印象は、変らないということであった。そしてこの変らないという印象は、何よりも校舎の大半を占める木造の旧兵舎のせいであるらしい。その上、人間の記憶はまことに頼りのないもので、一番新しい印象の前には、それ以前のイメージがうっすらと霞につつまれて背後に引っこんでしまいがちである。だが、ぼくは自分の回想をこうした印象よりも、さらに過去にさかのぼらさねばならないであろう。

何しろひどいものであった。軍靴でふみ荒らされ、おまけに戦後の混乱によって手ひどい打撃を蒙ったままの旧兵舎が、雑草の生いしげる中に、寒々とした姿で立ち並んでいた。もっとも寒々というのは形容詞であって、たしかに開学は4月からかなりおくれて、もう夏も近いころであった。そして集まる大教室もないままに、校庭に集められた学生たち。その中にはいまだにカーキ色の軍服がはばをきかせていたご時勢であった。雑然とした建物と雑然とした人間、これが開学の姿であり、そこには灰色の印象が拭いがたくつきまとっていた。しかし月日がたつにつれて、本部や図書館建設が進められ、研究室も整備されて、灰色を塗りつぶすような明るさが次第に立ちこめてくる。当時としては驚くほど立派な石造りの門が、しばらくひっくり返されたままに放置されていた旧軍隊の歩哨のポストに代って作られたのは、いつごろのことだったろうか。

しかし卒直に言って、その頃の大学には何か新しいものを作り出そうとする

積極的な建設的な息吹がたちこめており、志を同じくして集ってきた共同体を通して、それを実感として感じる事ができたように思う。そして前に書きたいいくつかの新建築は、その息吹のまさしく象徴であった。与えられた環境はたしかに疑うべくもなく不満足、不十分なものではあったが、着々と進められる建設の踵音のひびきを聞きながら、完成の暁の未来像を脳裡に描くことによって、わびしさをかみこころしていたのである。しかも同時にぼくたちは、大学は建物ではない、その中にこもる学問的な精神だとか、あるいは環境になれてはいけない、環境はみずから作るものだ、といった発言に軽く酔わされたようなかたちで、草創期につきものの混乱にまぎこまれた不平不満をまぎらせていた。こうした意識は、何よりも戦時中の耐乏生活に慣らされたぼくたちの世代が、知らず知らずのうちに身につけてしまったものであり、また大学にかぎらず何ものでも建設期にはつきものの意識であるかもしれない。そして、それとそれなりに積極的な役割りを演ずるのではあろうが、ぼくはこういった考え方は建設期だけで沢山だと思ふ。やはり環境はいい方がいいのだし、またたとえ建物だけとけなされることはあっても、大学の盛られる器はいくら立派であっても立派すぎることはない。

考えてみるに、大学の伝統とはいったい何であろうか、表面的な浅薄な見方もかもしれないが、ぼくにはやはり、内容として盛られる学問の密度それ自体よりも、むしろキャンパスからそこはかたなく立ちこめる雰囲気であるような気がするしてならない。年輪の厚さを誇る老樹の並木道、つたに蔽われた校舎、雨に置る時計台、あまりにも絵画的ではあるが、要するに年を経た環境こそ学問の翳たる大学にふさわしい伝統の厚味である。残念なことに、ぼくたちはそれを作らなかつた。そして与えられた環境を永久のものと考えることができなかつたために、後に伝うべき伝統の萌芽えすらをも残しえなかつたのではないかとおそれている。伝統は必ずしも人為的に作りうるものではないが、環境は明かに創作することができる。だが、まだ十年たっただけである。新しい伝統は作られるためであったなら、ぼくたちが4年の歳月を送った灰色の建造物の影が永遠に消え去ったとしても、決して愛惜の涙なぞはこぼしはしないであ

ろう。むしろその方が大学にとって幸福なこととして、歓迎したいような気さえするのである。(第1回文理学部文学科卒・東京女子大助教授)。

## 更に十年後を

木 戸 清 平

母校が創立されてからもう十年になると聞いたら、卒業生の誰もが時の早さに驚くと共に、母校の発展を心から祝福するに違いないと思う。いろいろの会で大学をたずねる機会に恵まれている私でも、行くたびに大学がその風格を具えつつある姿に接して嬉しくなることが多い。それにつけても、創立当時はひどすぎたような気がするし、当時一校舎でも焼失させたら大学の存立が危なくなるのでないかと案じておられた当時の学生部長沼尻先生のお顔と、最近の笑顔とを思いくらべて、創立当時、大学建設に直接力をつくされた方々の労苦が今になって実を結びつつあることを、この辺でやはり確認しておく必要がある。このことを記録して大学の歴史の1頁に残していただきたいと思うのは、卒業生の誰もが考えていることだと思う。

私の大学での学生生活は2年に過ぎない。その前の2年は付属の一教官としてお世話になっていたから、結局は4年になるわけだが、この1教官から1学生となるについては、多くの人からいろいろな批判をうけたものだ。その1つは、茨城大学なんかに入ってどうするんだ、ということであった。この裏には、茨城大学を大学の位置におくことを否定するような気持ちも含まれていたように思う。事実、創立当時の大学は、そんな批判を受けてもやむを得ない面もあったようである。だからといって、今日になっても卒業生が他の歴史ある大学卒業生に対して、卑屈な心を起こしてもよいという理由にはなるまい。また、大学卒業者の1人もいないところなどで、小天狗になってもらっても困るような気もする。大学が生まれて十年たったという時に、私が考えていることは、他人の批判や評価を気にする前に、ただ黙って自分を磨くことに全力をつくす



のが大切なことではないかということである。他人は、実績に対しては肯定してくれるように思う。それは、以上でも以下でもない。もし、誤解があるとなれば、時を待てば自然に解決してくれるように思う。大学が権威を認められるには、卒業生自体の実績を積み重ねるほかあるまい。もちろん、よい卒業生を送り出してくれる秀れた先生を大切にしなければならない。秀れた先生が、他へ逃げ出したくなるようにしては困る。茨城大学に良い先生が来ることを望むような空気を作ってもらいたいと思うのも、これまた卒業生全員の願いではあるまいか。

十年という年月は、私に「白樺」創刊号に寄せた武者小路実篤の扉のことばを思い出させる。「白樺は自分達の小なる力につくった小なる畑である。自分達はここに互の許せる範囲で自分勝手なものを植えたいと思っている。そうして出来るだけこの畑をうまく利用しようと思っている」と言ったあとで、「しかし、自分達の腹の底を打ちあけるとかなりの自惚がある。『十年後を見よ』という気がある。しかしそれは内証である」と結んでいる。私は、「十年後を見よ」ということばがとても好きである。大学はもう 10 年たってしまったが、卒業生はこれからの人間が多い。そこで、卒業生の立場から、「更に十年後を」ということばをいってみたい。誰もこんな気持で、現在を励んでいるような気がするからである。

在学中、私はほんの 2・3 カ月ほど学友会委員長にされたことがある。このとき、予算編成の仕事をやったが、やりたい事が多いのに比して、予算が思うように各部に与えられない悲しみを味わったものだった。それでいて、1日も早く、スクール・カラーを持ちたいと体育関係の先生方からご意見をうかがった。各部のセクショナリズムをやめて全体的な活動を高めたいと遠征費やユニフォーム費用の別途予算確立、研究紀要費や講演会費などの一括予算確保など試みたものだった。恐らく現在でも、どの部も予算の少ないのに心を痛めているに違いないと思う。どうしても、卒業生がなんらかの方法で、在学生の活をバックアップ出来るようにしなければいけないのではあるまいか。中にはよく相互連絡がとれている部もあるかと思うが、この辺で全体的な組織化を

凶る必要がありそうに思う。やっぱり、同窓会がそろそろ出来てもいいように思う。これも、卒業生は反対しないだろうと勝手に私は想像している。

とにかく、年と共に母校が発展することはうれしい。私も、更に十年後を夢みて今と同じような仕事を休まず続けて行きたい。

(第1回教育学部国文科卒・茨城県立水戸農業高等学校教諭)

## 思い出の記

瀬 戸 武

茨城大学工学部を卒業してからすでに数年、“茨城大学10年史を出すから原稿を”と言われて月日のたつのが早いのに今更ながら驚くとともにわが母校にも次第に、貫祿に似たものができて来たことを思い、嬉しさで一杯です。

水戸の本部での入学式は、24年7月の暑い最中、黒い詰襟の代りに、白いワイシャツの式でした。これが学生改革の影響を受けた私達の、茨城大学の学生としての第一歩でした。

水戸での一般教養過程の1年間は、兵舎改造の汚い教室や、男女共学など私達をかなり戸惑いさせるものがありました。しかし、旧水高の先生方の講義、特に独乙語の関先生の折りに触れての訓話に、私達は耳を傾けて聞き入ったものでした。星嶺寮での、自治を叫んでの寮生大会、夜を徹しての駄ペリにも、新しい大学を発展させねばならぬとのファイトに燃えていました。

多賀の里へ移ったのが25年4月、工学部の吼洋寮から、畑のコヤシの臭を嗅ぎながら教室へと、3年間をまたたくまに過ごしました。今だに、テストの夢を見るのが、熱力、蒸気罐など、井原先生のものばかり。エントロピ、エンタルピ、無我夢中で過しました。先生のお宅へは、ご不在なのを承知しながらお邪魔し、奥様から“少しは勉強しては”と忠告された者も少なからずあったと記憶しております。

徳江先生の内燃機関講義、いつもダブルの背広を着こなされ、さすが独乙へ

留学された方は違うわい、と感心している内に、卒業となり、先生お得意のラグビー学は、教えて頂けませんでした。

今はいざ知らず、水高からきた私共には、旧高校生のバンカラ気風抜け切れず、寮雨禁止、土足厳禁など新しい時代に即応する数々の禁止会など、ものも olmayan 猛者の諸君も多かったようです。また当時苦しかった食糧事情を反映し、寮をぬけて通称アタックに出勤、翌朝現場を通りかかり、“ゆんべもやられた”との嘆声を聞く事も屢々でした。

試験ともなると、目の色を変えて詰め込み勉強をし、時には暗い道を、日立の街へご清遊、帰りはハイヤーで寮の玄関に乗りつける豪勢さでした。ところが“1台に10人乗った”と運転手泣かせの勇者も出現して来ました。

さっぱりと、学問をした様子のない一回生の一人が、書き綴りました思い出の記ですが、最後に、某先生の“一回生が卒業すると、工学部は良くなる”と云は適中し、私共1回生の卒業後、発展の一路を迎えている事を、誇らし気な他言出来るように、ご骨折り下さってられる、諸先生方に、感謝の意を表し、擧筆する次第です。（第1回工学部原動工学科卒・日立製作所日立工場）

## 思い出にあらざる思い出

橋本喜久也

「10年一昔」「光陰矢の如し」学生時代によく使ったが、社会に出てから実に富む言葉である。

臉を閉じ、指を折り、光速の天文学的乗数で、過去に思い出を求めてペンを握ろうとする時、児の泣き声、妻の立振舞など、たちまち現実に直面する。十と同様に、毎日、日（火）を送るだけの生活をしていると、思い出すこと、出来ることが、憶劫になるだろうか。さいわい、本棚の片隅から一昔前に書かれた、時効になった拙文を見出したからお目にかけよう。

予科生活

予科時代の生活を振り返ってみよう。18, 19, 20才と最も活動的な年令をこ

の時代に迎え、精神的にも、肉体的にも一大飛躍の時であるべきであった。しかし、私の生活は暗かった。いや暗いようにしむけたともいえる。7つのヴェールどころか、49のヴェールに自己を隠し、あらゆる行動を、本心をもって遂行したことはなかった。終戦後の惰性の連続である。私自身、かかる生活に嫌悪を覚え、脱却しようと焦れば焦せるほど、自己への嫌悪は増すばかりであった。しかし、この三年間、まったく棒にふるたとはいえない。人生は闘争である、と知りえたからである。理屈をぬきにして知りえたことである。幸福を目的としている自己は、常に対立物と闘争を展開している。

精神的に不安定であったこの時代も、学生生活の一部としては、よき体験の時であった。大自然に囲まれ、のんびり過ぎるほど静かな環境に、一期生の横暴をほしいままにした。大半を占める寮生活から、その真髄をつかみえず終わったのは、残念にたえない。伝統がないこと、各人の利己性によるものと深く後悔している。若い情熱の吐け口であるストームですら、その団結心を見出すことができなかった。下宿生活も初めてではあったが、なかなか興味があつた。

学業は諸先生のご指導により、どうやらこの時代を終わった。学友会、自治会、どれもこれも、それ相応に仕事はした。しかし、精神的問題は行為の面にも多大の影響を与え、理想的な活動の一大障害となった。こうした反面、享楽には惰性の反動で終始した。

こう述べてくると、実に暗澹たる時代であった。私はここで1つの告白をする。以上のような精神的苦痛も、49のヴェールにつつま、他人に打ち解けなかったことを、そしてつとめて実生活を、外観だけでも楽しくしようとしたことを。しかし、私の環境は立派な教授、良き友の指導と愛情により、深淵から大海へと導かれていった。

このことに関し、私は感謝の念にたえない。ここに記したことは、余りにも暗い影を残す結果となったような気がする。勿論この時代には、楽しいことももっとも多かったのだ。しかし現在、私が筆をとっている思い出とはならない。書こうと思い、思い出そうとしても、頭に浮かばない。1年後、2年後、それは必ずよみがえってくるにちがいない、と確信する。

要するに、この時代の私は、真の私ではなかった。ヴェールをかぶり、惰性に生きた私であった。最後に、この時代をさかいとして、そのヴェールをとりさり、私のモットーである「正しく、強く、朗らかに」生き抜くことを誓う。

1949年5月27日夜

若かりし頃のタワ言、書いた私も苦笑してしまう始末。しかしある意味での思い出であろう。母校の繁栄、同窓諸兄の健闘を願って筆をおく。

(昭27年県立霞カ浦農科大学卒・宝酒造白河工場)

# あ と が き

茨城大学 10 年史編集委員長

石 原 道 博

茨城大学 10 周年記念行事委員会が発足したのは、昭和 34 年 5 月 8 日であった。委員長に都崎学長、委員に文理学部沼尻源一郎・教育学部樫村勝・工学部高橋越二・農学部青山虎彦・学生部長石原道博の各教授、それに藤田事務局長の 6 名があげられ、幹事には藤沢庶務課長と松木会計課長があてられた。

5 月 31 日はたまたま日曜日なので、記念式典は 1 日まえの 5 月 30 日(土)に、茨城会館で挙行された。岩上知事も参列、茨城大学創立功労者に感謝状と記念品をおくり、また茨大勤続 10 年の教職員を表彰した。ひきつづき校友会総会が開かれ、都崎学長の記念講演、本学吹奏楽団の演奏なども行われ盛会であった。

さて、茨城大学創立 10 周年記念事業委員会は都崎学長を委員長に、中村文理・二方教育・真野工・広沢農 4 学部長ならびに大場図書館長、および藤田事務局長、石原学生部長を委員とし、藤沢庶務・松木会計・富岡学生 3 課長を幹事として、しばしば会合協議をかさねていたが、記念事業としてつぎの 2 つを企画した。

## 1. 創立 10 周年記念講堂の建設

## 2. 茨城大学 10 年史の編集

(1) はけっきよく、財団法人茨城県文化振興協会内に茨城大学創立 10 周年記念講堂建設事業部をおき、会長岩上知事以下、副会長 5 名、顧問 38 名、委員 102 名、常任委員都崎学長以下 32 名、大学構内に 6 千万円の予算で、鉄筋コンクリート造り延 600 坪の講堂を建設しようとするものである。(2) は、すなわち本書の編集である。

昭和 34 年 9 月 29 日、正式に第 1 回の編集会議を開いたが、「茨城大学 10

年史」編集委員会委員と幹事は、つぎの通りであった。

委員（長）	学生部長	石	原	道	博
同	文理学部教授	宮	田	俊	彦
同	教育学部教授	満	井	隆	行
同	工業短大教授	瀬	谷	義	彦
同	農学部教授	佐	藤	正	一
同	付属図書館長	大	場	千	秋
同	事務局長	藤	田		忠
同	学生部学生課長	富	岡	健	次郎
幹事（長）	事務局庶務課長	藤	沢	孝	三郎
同	学生部厚生課長	岩	間	徹	三
同	文理学部事務長	原	田	貞	江
同	教育学部事務長	深	沢	勝	男
同	工学部事務長	本	間	保	三
同	農学部事務長	入	江	美	輝
同	付属図書館事務長	笠	原	謙	二郎

各委員は、当該部局関係の執筆責任者であり、各幹事は当該委員を助けて資料提供・連絡事務などを、それぞれ分担することとし、原稿締切を12月末日とした。

ところが期日までに原稿をいただいたのは、じつは寄稿をお願いした鈴木京平・東龍太郎両元前学長だけであって、編集責任者を仰せつかったわたくしとしては早くも前途容易ならざるを予感した。その後、各部局から逐次提出された原稿をいくたびか添削整理して、とにもかくにもようやくこうした体裁に編集したのである。

執筆責任者の各委員が、1人だけで当該部局分担の部分全部を執筆されたものもあるが、また各部局内でさらに分担執筆した原稿も多く、これらには事前でお願いした制限枚数や「執筆要領」を無視したような記述もあった。大は叙述の内容・分量から、小は文章・字句・かなづかいにいたるまで、千差万別の

原稿をまえにして、一時はまったく途方にくれた。記述の不備を補うため、特に事情に通じた長老教授に集っていただき懇談会を催したり、委員に書き直しや追加をお願いしたり、また予定外の方に、にわか執筆を依頼したりもした。夏休みに入って、7～8月は朝から夜まで、わたくしは連日このことのためにわたくしなりの努力をつづけたが、本書の至らぬ点は、すべてわたくしの未熟の致すところである。この間、終始わたくしに協力されたのが瀬谷教授で、夜おそくまで部長室で協議したり、あるいは水交荘に確詰になって2人で原稿整理に当たったことも一再ではなかった。

本書の内容は、7篇 25章および付録からなる。はじめ第1篇第1～2章・第5章は事務局、第3～4章および第2篇第1章・第4章は各学部、第2～3章は学生部、第3篇は図書館、第4篇は事務局、第5篇は学生部、第6篇第1章は教育学部、第2章は農学部、第3～4章は事務局、第7篇は工学部、付録は事務局がそれぞれ担当するというのでスタートしたが、じっさい集った原稿で編集してみると、前述のように原稿がきわめて不揃いなため、苦勞された執筆者にはまことに申訳ないのであるが、全篇にわたり思いきって大胆な添削を加えた。ことに事務局担当の篇章は、事情によりわたくしが急ぎ執筆したので、さだめし不備なところが多いことと思う。ただし、他の各部局で責任執筆された部分は、なるべくこれを尊重する方針をとったので、全体として記述の不統一がなお目につくが、これはわたくしの不手際として諒とされたい。

なお本書は「茨城大学 10年史」であるから、本文の記述も、旧・現職員名簿も、すべて昭和34年5月31日現在として記録されている。鈴木・東両先生のように早く玉稿をいただいた方々には、出版の遅延をなんといってお詫びしてよいかわからない。はじめ昭和35年5月31日を発行日標として原稿を依頼したが、期日までに予定原稿は集まらなかった。その後、ひきつづきわたくしとしては全力をあげて努力したつもりであるが、諸種の事情から大変遅れてしまった。改めて各委員・幹事および直接間接に協力援助を惜しまれなかった各位に対し、心から深謝の意を表したい。題字は都崎学長にお願いし、装幀は鈴木豊次郎教授（教育学部）をわずらわした。



わたくしも史学者の1人として、はじめ都崎学長から「茨大10年史」編集のことを命ぜられたとき、責任者としての光栄を感じた。それだけに、本書の出来ばえを自覚して、心中忸怩たるものがある。それにもかかわらず、わたくしは一年有半の苦勞と、いまようやく初校をおわってホッとした気持の中に、はやくも「茨大20年史」をひそかに思う。茨大10年のあゆみはこうであった。こんご10年のあゆみは、果して茨大に何をもたらすであろうか。

(昭和35年11月)

